612.2
N955n
00545366

秘

南方農林畜水産物ノ確保ニ關スル調査

（佛領印度支那篇）

31A
3・1・20
600

農林省總務局南方資源調査室

目次

第一章　食料……頁
第一節　米……四四
第二節　雑穀……四四
第三節　甘藷及馬鈴薯……四〇
第四節　カツサバルート……四二
第五節　砂糖及蜂蜜……五五
第二章　油料子実及油脂……五六
第一節　植物油……五六
第二節　魚油……六〇
第三章　繊維原料……六二
第一節　棉花……六二
第二節　黄麻……六二
第三節　カポツク……七〇
第四節　其ノ他ノ繊維原料……七七
第四章　嗜好品及香料……七八
第五章　飼料……八七
第一節　茶……八七

612.2
N955n

国立国会
36. 3. -8
図書館

545366

第二節　珈琲……九二
第三節　煙草……九四
第四節　香辛料……九九
第六章　繊維及製紙原料……一〇二
第一節　デリス……一〇二
第七章　家畜及畜産物……一〇三
第八章　水産物……一四六
第一節　漁獲物……一四六
第二節　水産製造物……一五六
第三節　塩……一六四
第九章　林産物……一六九
第一節　木材……一六九
第二節　特殊林産物……一八五

凡例

一、本調査ハ南方地域ヨリノ物資ノ取得ニ関スル事項ヲ中心トシテ南方農林畜産物ノ確保ニ関スル調査要綱ト（九ノ一）ニ依リ作成セルモノトス

二、本調査ハ極メテ短期間ニ作成セルモノナルヲ以テ誤謬又ハ遺漏ヲ免レザルベキニ付今後ノ改訂ヲ期セントス

第一節　米

(一)　需給狀況

(イ)　最近ノ年生産額、消費額、対本邦及主要貿易先別輸出入額

年次	単位	生産量	輸入量	輸出量	輸出入超過量	推定消費量
昭和九年―十年平均	千石	二四、四三八、一〇〇	一〇、九〇〇	(十)一五、二一一、四〇〇	(十)一五、二一〇、五〇〇	二九、二一七、六〇〇
十年―十一年	〃	三七、七八九、七〇〇	二四、八〇〇	(十)一五、五四九、一〇〇	(十)一五、五二四、三〇〇	三二、二三九、六〇〇
十一年―十二年	〃	三九、四七八、二〇〇	一七、七〇〇	(十)一三、四四一、五〇〇	(十)一三、四二三、八〇〇	二六、〇三四、七〇〇
十二年―十三年	〃	三九、四二八、一〇〇	一〇三、三〇〇	(十)九、三六九、二〇〇	(十)九、二六六、九〇〇	三〇、一五八、九〇〇
十三年―十四年	〃	四四、五八三、七〇〇	二七七、六〇〇	(十)一四、二九二、六〇〇	(十)一四、〇一四、〇〇〇	三〇、二九一、一〇〇
平均	〃	三九、一四〇、九六〇	八六、八六〇	(十)一三、五五二、五八〇	(十)一三、四六五、七二〇	二五、五八八、三八〇
	他	二、九一四、〇九六	八、六八六	(十)一、三五三、二五八	(十)一、三四六、五七二	二、五五八、八三八

(ロ)　西貢ニ於ケル米ノ國別輸移出表

出所――万國農事統計年鑑

地域名	単位	昭和十三年	仝十四年	仝十五年、平均	備考
フランス	石	三、七七一、七二五	三、〇〇〇、九五七	六〇六、八四六	三、三八六、三四一	西貢穀工会議所報告ニヨル
仝植民地	〃	八三二、五三五	七七九、六四六	六二六、三五六	八〇六、〇九一	
欧洲諸國	〃	五四七、九六〇	九四七、一四六	三二九、五〇六	七四七、五五三	
南アフリカ	〃	八、〇〇七	四七、六七一	六、三三二	二七、八三九	但シ昭和十五年八十月迄ノ数量ト
米國及玖馬	〃	六六、二〇九	二七八、七二七	四、七八四	一七二、四六八	
蘭印	〃	一六九、六四四	二二二、七〇一	二五、四六七	二四六、一七三	
新嘉坡	〃	一七三、九一二	三三四、一五六	五四三、九一三	二五四、〇三四	平均ハ仝十五年ヲ除キ五年ノ平均ナリ
印度	〃	七九、五八三		三六、一一三	七五、五八三	
比律賓	〃	一二三、二八〇	四六四、一八九	四四、九三七	二九三、七三五	
香港	〃	九三九、一五九	一、〇五六、七三七	一、六一四、四六一	九九七、九四八	
支那	〃	一〇六、五八四	五二三、五九二	一、三八九、〇六四	三一五、〇八八	
日本	〃	一、五〇八	五一、七七一	三、八五六、五一八	二六、六四〇	一地ニ六七石
(移出)	〃	二五八、二三〇	一五七、五一七	一六六、三八八	二〇七、八七四	
其ノ他	〃	一〇〇、四七三	二、八三三、三二三	九二五、六三二	一、四六六、八九八	
計						
地	〃	七、一七四、八〇九	一〇、六九八、一三二	九、一七六、三一七	八、九三六、四七一	
	他	一、五四一、一一九	一、五七三、二五五	一、三四九、四五八	一、三九九、五五七	

(2) 昭和十七年度ニ於ケル生産見込額、輸出見込額及算定ノ基礎

平年作ハ粉生産量六五〇万㌧ナリ、然シ昭和十六年八・九月頃ニ東京地方ニ千魃アリ稍不作ナルモ枚数見込数量ハ約五〇九・三万㌧ト入輸出見込額ハ佛印ニ於ケル米ノ対日供給ニ関スル交渉経過(昭和十七年一月)ヨリ見レバ左ノ如シ

輸出余力　粉　一六〇万㌧(佛印側申出ニヨル)

此ノ内譯

右ノ中対日供給数量	白米二号	八八〇、〇〇〇㌧
	砕米一、二号	一一二、〇〇〇
	砕米三等	三二、〇〇〇
	米粉	一二八、〇〇〇
	計	一、一五二、〇〇〇
	白米二号	六一六、〇〇〇
	砕米一、二号	三九、二〇〇
	米粉	三二、〇〇〇
	計	六八七、二〇〇

(二) 生産及取引事情

(1) 概況

佛領印度支那ニ於ケル主ナル産業ハ農業ニシテ米作ハ其ノ大宗ナリ米作以外ノ農業即チゴム、玉蜀黍、甘蔗、胡椒、コーヒー、阿片、茶、棉、椰子、煙等ノ栽培及生産ハ米作ニ比スレバ微々タルモノナリ。

米作ハ主トシテ交趾支那、東京及北部安南ノ諸地方ニ於テ行ハル、交趾支那及東蒲寨ニ於ケル、メコン河流域及ソノ「デルタ」地方ニ生産サル、米ハ主トシテ西貢ヨリ輸出サルトコロ以テ西貢米ノ名アリ、ソンコイ河流域ノ東京平野ニ産スル米ハ、ハイフォンヨリ輸出セラレ東京米ト称セラル。

佛領印度支那ニ於ケル稲栽培面積ハ一九三八―三九年ニ於テハ六、〇一二千ヘクタール、ソノ生産額ハ粉七一、三三四千キンタル(白米換算二九、六五九千石)ニシテ世界総生産ノ約三、五%ヲ占メ世界第五位ノ生産ヲ有ス。

之ヲ國別ニ見ル時ハ一九三八―三九年ニ於テ左表ノ如シ

州名	作付面積 千ヘクタール	粉生産高 千キンタル	粉ヘクタール当牧量 キンタル
安南	一、一〇七	一一、三四一	一〇、二
東埔寨	七八五	七、九五九	一〇、一
交趾支那	二、三〇八	二八、五三三	一二、四

老撾											
東京											
計											

尚最近七ヶ年間ニ於ケル國別栽培面積ハ次表ノ如シ（單位千陌）

	一九三一―三二年	一九三二―三三年	一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年	一九三八―三九年	平均
安南	九、六九	九五九	九、四〇〇	九三二	八八八	一、〇七五	九三九	一、一〇七	一、三、七三一
柬埔寨	六、八一	六一七	七一〇	七一〇	六七九	六八四	七七九	七八五	一、九、七七〇
交趾支那	二、〇五〇	二、〇〇〇	二、〇六四	二、三〇八	二、一六四	二、一五〇	二、三〇〇	二、三〇〇	一、四、四
老撾	四六〇	四六一	四一三	四一三	三八二	四〇〇	四八〇	四四四	四一一
東京	一、三〇五	一、三四一	一、二一三	一、三三二	一、三二一	一、三二〇	一、三六八	一、三六八	一、三、七三一
計	五、四六五	五、三七八	五、三三二	五、三九三	五、六四四	五、五八〇	六、〇一二		（平均）一一、一

國別粗生産額ハ次表ノ如シ（單位千キンタル）

	一九三二―三三年	一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年	一九三八―三九年
安南	九、四〇〇	九、九四〇	九、二〇〇	八、七三一	九、三一五	一〇、四九九	一二、三四一
柬埔寨	七、六一二	四、五八〇	五、〇七〇	五、九三〇	五、〇〇〇	七、七九〇	七、九五九
交趾支那	一九、三一〇	二一、一一六	二六、五七三	三〇、五〇〇	二五、七九三	二八、五三三	

國別單位面積當生産高ヲ示セバ次表ノ如シ（一陌當粗、キンタル）

	一九三一―三二年	一九三二―三三年	一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年	一九三八―三九年	平均	白米反當石ニ換算
安南	七、九	九、七	一〇、四	九、九	一一、〇	八、七	七、一	七、四	九、八	四石〇八
柬埔寨	七、九	一一、二	七、四	一一、〇	八、七	八、五	八、一	七、四	八、五	三、五三
交趾支那	一一、三	九、四	一一、二	一一、〇	一二、六	一〇、二	一一、六	一〇、九	一一、四	四、四三
老撾	七、〇	七、六	七、九	七、一	七、一	七、九	七、一	七、五	七、四	三、一三
東京	一三、九	一四、九	一三、二	一一、七	一一、六	一一、七	一三、一	一三、一	一二、五	五、五八
平均	九、六	一〇、六	一〇、〇	九、四	一一、六	九、六	一〇、〇	一〇、〇	一〇、一五	四、一五

備考　粒摺歩合六二、五%、白米一〇〇〇キンタルヲ六六七、五石トシテ換算セリ

本項ハ主トシテ米穀局編「佛領印度支那ノ米」ヨリ轉載セリ。

(2) 主要産地

前項ニ於テ記シタル如ク交趾支那ハ生産額最大ニシテ東京、安南、柬埔寨、及老撾ノ順位ナリ。

交趾支那

交趾支那ニ於ケル主要米作地方ハ *Baclieu* 州（約二七万陌） *Cantho* 州（約一八万陌） *Travinh* 州（約一六〇万陌）ソノ他一四州ニシテ之等ハ下メコン河ノ三角州地帯ニ発達セルモノナリ。稲田ノ地盤ノ高低、水利ノ良否、及雨期ニ於ケル *Mytho* 州（約一六万陌）メコン河氾濫ノ程度等ニ依リテ稲ノ品種及栽培法異レリ。概シテ上流地帯ニ於テハ地盤ハ出水面ヨリ甚シク低位ニシテ数ケ月間一米余ノ水底ニ没ス。カ、ル地域ニ於テハ浮稲ガ栽培セラル。又下流地帯ハ浸水比較的軽微ナルモ排水不良ニシテ停滞シ、更ニ海岸地方ニ於テハ満潮時ニ浸水ス。

カ、ル地域ニ於テハ二回移植或ハ三回移植ノ方法ニヨリ栽培サル。又 *Cantho* 省ノ堤防ノ施サレタル稲田、*Rach-gia* 邊ニ沿ヘル排水良好ナル地域ニ於テハ一回移植栽培ガ行ハレツ、アリ。以上ノ如キ相異ナレル地帯ノ特徴ニ因リテ夫々次ノ如キ三種ノ稲作栽培法カ発達セリ

尚本地方ニ於ケル気象状況ヲ見ルニ、雨季ハ五月乃至十一月ノ七ケ月継続シ雨量ハ二〇〇。粍ニ達スソノ間六月及九月ニ於テ特ニ降雨量多キ時期アリ又ソノ中間ニ於テハ降雨量少ク、時ニハ小乾季ノ如キ状況ヲ呈スル事アリ。此ノ時期ハ恰モ移植期ニ当ルヲ以テ稲作上甚ダ危険ナリ、此ノ傾向ハ海岸ヲ遠去リ、東捕寨ニ入ルニ従ツテ顕著ナリ。十一月ヨリ降雨量ハ減少シ十二月ハ殆ドナク、一月ハ最低雨量ニ乃至一〇。粍程度ナリ、気温ハ最高平均三〇度（四、五月）最低二〇度（十二月又ハ一月）程度ナリ。

一、移植一回ノ雨季稲田

全ク浸水ノ虞レナク稲田ヲ仕切ル畦畔ニヨリテ雨水ヲ貯ヘルコトノ可能ナル地域ニ於テ行ハル、栽培法ナリ。地盤ハ主トシテ冲積層土壌ニシテ中等ノ肥沃度ヲ有ス。

苗代ヨリ引キ抜キタル苗ヲ本田ニ移植スルニ際シテハ土壌ノ肥沃ノ程度ニヨリ苗数及株間ノ距離ヲ異ニシ一定セズ。一般ニ熟田ニ於テハ株間二十五糎内外ナルモ比較的新シク開墾セラレ旦ツ肥沃ナル田ニ於テハ株間共ニ、畦間株間トモニ、四十糎乃至五十糎ノ間ニ於ケル自家食糧ノ供給ヲ目的トシテ栽培サル、ノミナリ。生育期間ハ四ー五ケ月ナリ。即四月末播種開始、七月ニ由植、品種ニヨリ九月乃至十月ニ開花シ十一月マデニ収穫ヲ終ル。

半季節稲ハ高地又ハ中高地ノ稲田ニ於テ極メテ広ク栽培サレツ、アリ。生育期間ハ六ケ月ナリ。即チ六、七月ニ於テ播種サレ八、九月移植、十一月ニ開花、十二月一月ノ乾季ノ始メニ於テ収穫サル。品質良好ナリ。

季節稲ハ雨期稲田ノ地帯中ニ於テモ最モ低地ノ稲田ニ於テ栽培サレツ、アリ、之等品種ノ栽培開始期ハ半季節稲ノ場合ト略同時ナルモ生育期間一層長クセー八ケ月ナリ。六ー七月播種、八ー九月移植、十二月末ニ開花シ一、二月ニ於テ成熟スルモノナリ。之等品種ノ栽培ハ最モ肥沃ナル冲積土地域ニ於テ行ハルヽモ半季節稲ニ比シ栽培困難ニシテ災害ヲ被ルコト多シ。即チ成熟期遅キ故、早期ノ落水ニヨリ早害ヲ被ル事アルニ因ルナリ。

交趾支那ニ於テハ前記ノ移植一回ノ雨季稲田ハ全面積ノ七三%生産額ノ大九%ヲ占ムルニ拘ラズ、全般的ニ地味衰退ノ傾向認メラレ殊ニ熟田ニ於テ著シキモノアリ 之ガ根本的改善方法トシテハ肥料ノ施与以外ニハナク、此ニ化学肥料ノ使用ハ「ショロン」及「タナン」ニ於テ漸次普及ヲ見ツ、アリ之ガ西方ニ及バントシツ、アリ。

二、移植二回ノ稲田

浸水ヲ受ケ然モ氾濫ニヨリ有機物ヲ夥シク含ム泥ヤ砂ノ推積セル廣漠タル低地地域ニ於テ見ラル、稲田ナク一般ニ稲田ヲ整備サル、事ナク然モ年々多少トモ泥土ヲ含ム河川ノ氾濫ヲ蒙リ肥沃トナル。雑草ノ繁茂極メテ旺盛ナリ浸水ノ深サハ潮汐、干満ニ支配サル、モ九、十月ニ於テ平均四〇糎内外ナリ、カ、ル稲田ノ面積ハ全稲田面積ノ一七%生産額ハ全様ニ三%ナリ

苗代ハ安全ナル地ヲ選ビテ設ケ、六、七月ニ播種、第一回移植ハ八月、第二回移植（即本田定植）ハ十月ナリ、此ノ際苗ハ約七〇糎内外草丈ヲ有ス。開花期ハ十二月ヨリ二月ニ及ビ収穫期ハ二、三月（即チ乾季）ニ於テ行ハル、モノナリ。尚水路ニ沿フ若干ノ地点ニ於テハ水深ノ関係上三回移植ヲ行ハル、事アリ。

此ノ移植二回ノ稲田ハ今後堤防築造ト乾土工事ノ進歩ニ従ッテソノ面積ハ減ズルモノト思ハル。又過剰ニ含マル、窒素要素ニ対シ之ガ「バランス」ヲ保ツタメニ、燐酸加里ノ施与ヲ必要トス。

三、浮稲ノ稲田

メーコン河及バザック川ノ氾濫ニヨリテ毎年数ヶ月間沈水スル低キ地盤ニ於テ見ラル。五月ニ至ルマデハ乾季中ハ全然畑状態トナリ玉蜀黍、落花生ヲ栽培ス、之等ノ稲田ニハ畦畔等無ク浸水ニ任シツ、アリ。

カ、ル地域ニ於テハ普通ノ移植栽培ノ如キハ全ク不可能ナルヲ以テ、四、五月未ダ畑状態ノ間ニ於テ前作玉蜀黍ノ畦間或ハ空閑セル所ヘ撒播ス。発芽後水位ノ上昇ニ応ジテ草丈伸長シ（一日最高二十糎マデ可能）遂ニ、五－七米ニ達ス、浸水ハ九月ヲ最高トシテ漸時減水シ浮稲ハ流ノ方向ニ靡キ委倒状ス、但シ最上四節間（一－二米）ハ倒伏スルコトナシ。開花ハ十一月末、成熟期ハ十二月乃至一月ナリ。栽培面積ハ全稲田面積ノ約一〇%、生産額ハ八%ナリ

四、以上ノ外ニ浸水ニヨリテ腐死セル稲田ニ於テ栽培サル、モノニ早稲アリ、又極少部分ニ於テハ二期作行ハル。二期作ニ於テハ第一回ハ五月末播種、六月末移植、十月収穫ス。直チニ耕耘ヲ行ヒ第二回ニ移植サル、ハ稲ハ苗代播種ハ九月移植ハ十月末、収穫ハ一、二月ニ行ハル、一九二八年以後施肥ガ行ハル、ニ及ンデコノ栽培面積ヲ増加セリ。

東京

東京地方ノ稲田ハ紅河及タイビン河ノ二大河川ノ三角洲地帯ニ発達ス。土質ハ沖積土ニシテ粘土質ヨリ砂質ニ至ル種々アリ。気象状況ハ雨季ハ五月乃至九月ノ五ヶ月間ニシテ、七月末ヨリ八月ニ亘リ降雨量多シ、乾季ニ於テハ十一月乃至一月ニ亘リテ最モ乾燥スト雖モ二、三月ノ候ニハ霧雨アリテ緩和サル、一ヶ年ノ平均雨量ハ一、六二〇粍ナリ。気温

八河内ニ於ケル最暑季ノ五月ニハ二九度、最寒季ノ十二月ハ一六度ニシテ奥地ニ於テハ一
層低温トナリ平均十三度ニ降下ス
水田ハ雨量ノ分布、灌排水ノ良否ニヨリテ次ノ三型ニ分類サル。
一、五月米一作ノ低湿田、低湿田ニ於テ乾季ニ栽培サレ安南産ノ五月ニ収穫セラル 五月
末ノ稲ハ低湿田ニ栽培サレ、品種ハ倒伏ニ対スル抵抗性ヲ必要トス。即チ収穫終了前ニ雨
期ニ入リ最水ハ冠水ノヲ度クル場合、倒伏セルモノハ発芽ニヨル損失大ナリ。又中高地ニ
栽培サルヽ品種ヽ早熟ニ対スル抵抗性強キヲ必要トス。品種ニハ粳、糯ノ別アリ。
五月末ノ栽培ハ主トシテ雨季ノ雨水ヲ貯ヘ又ハ泥塁ヨリ浸水ヲ遮ヘタル田ハ水深二〇-
六。種ノヲ耕耘シテ田植セラレル。
田植期ハ十二月、一月、収穫ハ五月ナル。雨期ニ早ク入レバ収穫前ニ水害ヲ被リ、
又田植期ガ早キニ失スレバ稲ノ開花期ニ低温ニ遭遇シ稔実ヲ阻害シ収量ヲ減ズ。通常開花
ハ四月一日以前ナラザルヲ要ス。生産物ハ転嫁、品質共ニ不良ニシテ専ラ地場ノ消費ニ当
テラル。
二、十月米一作田、概シテ高地ニ見ラルヽ稲田ナリ。乾季ニ於テハ玉蜀黍、落花生、甘藷
豆類、亜胡麻ヲ栽培シ或ハ休閑ス。
雨季ニ入レバ数回耕耘サレ六月末乃至七月初メニ田植セラレ八月末ヨリ九月ニ亘リ開花ン
九月末ヨリ十月ニ収穫サル。土壌ハ大体砂質土ナルタメ雨期ニ於ケル雨量少ナキ時ハ旱魃
ニ悩ミ、時ニ収穫皆無トナル事アリ。

尚ホ月米ニハ高地稲田ニ栽培サル、極早稲ト中高地及低地ニ栽培サル、季節稲及早稲トア
リ、前者ハ旱魃ニ遭遇セザル以前ニ収穫サル、事ヲ條件トシソノ収量少ナシ、後者ハ中高
地ニ栽培サルヽモノハ開花期ニ灌水スル必要ヲ生ズルコトアリ、又低地ニ栽培サルヽモノ
ハ冠水ノ場合抵抗性強キコトヲ要求サル。
三、三ケ月稲、生育極メテ急速ニシテ苗代ニ、一ケ月、本田ニ、二ケ月ニテ収穫サル、即
チ田、五月頃ニ播種シ、六月頃ニ田植シ七月末ヨリ八月ニ渡リ収穫サル、主トシテ地
場ノ継ギ米ニ当テラル。
四、二期作、水利施設ノ良好ナル地域ニ於テハ二期作ヲ行フモノアルモソノ面積ハ全稲田ノ約三十
五%位ナリ。尚、特ニ地味良キ地域ニ於テ三期作ヲ行フモノアルモソノ面積ハ少ナク、且
ツ労力ソノ他生産費ヲ多ク要スルタメ米価ノ安キ時ニハ不利トナル。
カヽル稲田ニ於テハ第一期作ハ十月或ハ十一月、時ニハ二月初旬ニ収穫サルルヤ遅ニ耕耘
ニ着手シ、更ニ田植ノ直前ニ水ヲ充シ耕耘代掻キス。第二期作ノ田植ハ十二月中旬ヨリ一
月、二月ニ及ビテ行ハル。収穫期ハ五月中旬乃至六月下旬ナリ。
水稲品種ハ五月末約一〇〇品種、十月末約二〇〇品種計約三〇〇品種存在スル見込ニシテ
夫々適応地域ヲ異ニセリ。主トシテ耕作期、水利型、土壌型等ノ差違、及特殊ナル地方的
需要等ニ適応セシタメニ因由スルモノト思ハル。

安南

安南ニ於ケル稲田ハ海岸ニ連続スル小三角洲地帯ヲ占メ、「タンホア」ヨリ「パンチエン」

ノ間ニ跋ラナシ、多クハ貧弱ナル土地ヨリ成リ中部及北部安南ノ稻田ハ特ニ旱害ト颱風ノ危險ニ瞰サレツヽアリ。

雨期ハ五月ヨリ十月ニ亘リ九月ハ降雨量最モ多シ、全般的ニ見テ東京ノ雨期ニ比シ約一ケ月短シ、他方乾季ノ乾燥ハ東京ニ於ケルヨリモ著シク、十二月ヨリ三、四月ノ候ニ至ル間ノ降雨量ハ東京ニ比シ極メテ不規則ナリ、カクテ稻作ノ相當大ナル部分ハ旱魃域ハ氾濫ノタメニ屢々危殆ニ瀕ス。

然シテシエウ川南方ニハ約五〇、〇〇〇町ヲ行ヒツヽアリ。ソノ他、タニホアニ南部ノ三角洲地帶ノ南部ニ於ケル事情ニ著シク類似ス。

又ゲアン州ニ於ケル稻田ハ主トシテ低地帶タル海洋性沖積土ヨリナル地域ニ於テ行ハル。沿岸ノ砂丘地帶ニ接続スル部分ハ生産力低キモ内方ハ地味ヨク十月米ノ良キ稻田ヲ構成ス。

又諸河川ノ中流ニ於テ沖積土ノ地域ニモ良キ稻田発達ス、降雨量ハ、タンホア及東京ニ比シ一層不規則甚シク、之ガ爲メ稻田ノ約半分ハ收穫低位ナリ。灌漑施設完備ノ最モ必要ナル地方ナリ。

雨季ハ七月ヨリ十一月ニ亘リ、九、十ノ兩月ニ降雨量最モ多シ、二月ヨリ三月ニ亘リ少量ノ霧雨アリ四月下旬ニハ若干ノ驟雨アリ。

七日及十一、十二月ニ通量ナル降雨アレバ五月米及十月米ノ早期移植ハ可能トナリ稻作ヲ成功セシメル大ナル要素トナル。

低キ稻田前五月米ノ稻田ハ秋季ニハ洪水スルガ州内ノ三分ノ一ノ面積ヲ占メ、南部及中部ニ多ク、高キ稻田即十月米ノ稻田ハ約二分一ヲ占メ北部粘土質ノ土地ニ著シク多シ、二期作ノ稻田ハ灌漑可能ナル所ニ限ラレソノ面積ハ六分ノ一ナリ。五月米ト八月米或ハ五月米ト十月米トヲ組合セ栽培ス。

東埔寨

稻作地方ノ気象ノ特徴ハ雨期ノ初メノ數次ノ降雨ノ後ニ存スル小乾季ガ顯著ナル事ナリ。雨季ハ三月ヨリ四月ノ候ニ於ケル最初ノ數回ノ驟雨ヲ以テ始マリ、五月ニハ本格的トナリ、八月ニハ最モ雨量多シ、乾季ハ十二月ニ始マル、平年降雨量ハバツタンバン一三七、耗プレイヴエン、一六八ニ耗、プノメペン一四三耗ニシテ此ノ州ニ比シ概シテ少ナシ。

稻田ハ雨季ノ降水量ニノミ依存スルモノト、フメーコン河ノ氾濫ニ依存スルモノトアリ、三種ノ型ニ分類サル。

一、雨季稻田　東埔寨全稻田ノ約九一%ヲ占ム。

原則的ニ雨水ニノミ依存スル稻田ニシテ、交趾支那ノ移植一回ノ雨季稻田ト同種ノモノニシテ一部地方ニ通播栽培所アリ。即チ東埔寨ニ於テハ雨季中浸水ヲ蒙ラヌ沖積土上ニ希達シ畦畔ハ整備サレ稻田ハ細分サル。乾季ニ於テハ全ク乾燥シテ田面ニ龜裂ヲ生ズル。

(一)、通播サルヽモノ

Ⓐ森林開墾地ニ於ケル山地稲（早稲）
Ⓑ若干ノ早稲
Ⓒバッタンバン北西部ノ平原ノ六ケ月稲

(二) 移植サルヽモノ

Ⓐ早稲（Srau Srâl）生育期三－四ケ月、ナリ。苗代日数二十五日移植後二ケ月－二ケ月半ニシテ開花、各自栽培面積ノ一割位ヲ栽培シ自家食糧トナル。

Ⓑ半季節稲及季節稲（Srau Kon dal）生育期間ハ平均六－七ケ月ナリ。六－七月ノ候ニ播種サレ苗代期間四〇－四五日、八月－九月ノ頃ニ移植シ、十－十一月頃開花、十二月－一月ニ収穫サル、東埔寨ニ於テ最モ多ク栽培サル。

Ⓒ晩稲（Srau Thnung）生育期間平均八－九ケ月ヲ要ス。五、六月ノ候ニ播種サレ、苗代期間六十日位、八月移植サレ十一月開花。一－二月ノ候ニ季節稲ノ最終ノモノト同時ニ収穫サル。

(三) 浮稲稲田、大湖ノ周縁或ハ河川沿ヒノ浸水地帯等ニシテ水ノ来方ガ緩慢且ツ規則的ナル地方ニ於テ浮稲ガ栽培サル。

ソノ普及面積ハ全稲田ノ約九%ニシテ栽培ノ状況ハ交趾支那ニ於ケル場合ト同様ナリ。

(四) 乾季稲田　浸水地帯ヲアリ且ツ減水期ニ於テ、クリーク又池ノ附近ニ設ケラル、稲田ナリ、地味ハ肥沃ナリ、乾季ニ於テ栽培サレ、ソノ間常ニクリーク、池等ヨリ人工的ニ灌漑ス。早稲ガ栽培サレ収穫ハ安全ニシテ収量モ亦多シ、主トシテ雨季稲田ヲ失敗セル場合ニ行ハル。従ッテ普及面積ハ少ク全州稲田ノ僅カニ一%ナリ。

「註」本項ハ Yves Henry 著「仏領印度支那ノ農業経済」ニ依ル。

(3) 交趾支那 籾生産費

交趾支那ニ於ケル籾ノ生産費ハ、自作ニ就イテハ農作資金（経営費ト租税）ヲ一ヘクタール当収量（籾ノ「ギア」数）ニテ除シ、農業小作ニ就イテハ同一資金ヲ小作料ヲ支払ヒタル上小作人ノ手許ニ残ル籾ノ「ギア」数ニテ除シ又土地ヲ賃貸シ居ル土地所有者ニ就イテハ地價ノ八歩ト算定サル、収入ヲバ小作料タル籾ノ「ギア」数ニテ除シテ之ヲ算出ス。
（註一ギアハ籾一九瓩乃至二三瓩ニ当ル）

交趾支那ニ於ケル稲田ニ関スル典型的経営計算書
（一ヘクタール当リ、単位ピアストル）一九二八－一九三〇年

番号	場所	稲田ノ種別	土地資金	設備資金	総収益	農作資金（経営費＋租税）	家族労働者ノ食費	純収益	籾一ギア当生産費 食事無	籾一ギア当生産費 食事附
一	ショロン	高イ稲田 四ヘクタール	八二五	五〇	一〇〇	五一	一二	三七、六〇	〇、五一	〇、六五
二	ヴインロン	低イ稲田 六ヘクタール	四〇三	三九	八〇	二八	八	四四、二〇	〇、三五	〇、四五
三	ショードツク	浮稲田 七ヘクタール	八五	二八	五四	一八	六、九	二九、四〇	〇、三〇	〇、四二
四	ミトー	高イ稲田 一〇ヘクタール	三七四	五六	九〇	八八、五	〇	一、七〇	〇、九六	〇、九八
五	カントー	低イ稲田 二〇ヘクタール	五六〇	一五五	九〇	六九、五	〇	二〇、七三	〇、七七	〇、七七
六	バクリユー	[illegible]稲田 二〇〇ヘクタール	二〇〇	五一	八〇	五七	一、六	四一、四〇	〇、四五	〇、四八

七	A	ヴインロン	低イ稲田 三ヘクタール	四〇〇	〇	〇	（地代） 五〇	（租税） 二、二〇	〇	〇	四七、八〇	〇、六八	
	B	〃	〃	〇	四	三〇	二〇、一	一六	マイナス	〇、七〇	一、二〇		
八	A	トヲヴイン	高イ稲田 五ヘクタール	四〇〇	〇	〇	（地代） 四〇	（租税） 二、四〇	〇	〇、八六	〇、八六		
	B	〃	〃	〇	四、九	四〇	二六、二〇	（地代） 二二、五	（租税） 〇、七五	〇	四、二六	〇、六五	〇、九〇
九	A	ショードック	浮稲 七ヘクタール	八〇	五、三	三、五	一六、四〇	（地代） 三一、五	七	八、二〇	〇、四七		
	B	〃	〃	四	〇	〇	（租税ト経営費） 八、二〇	〇	三一、八〇	〇、六二	〇、六二		
一〇	A	バクリニー	熱田 一〇ヘクタール	二〇八	二、六	二八、一〇	四八〇	七、六〇	〇、七〇	〇、八三			
	B	〃	〃	二	四〇	二八、一〇	四八〇	七、六〇	〇、七〇	〇、八三			

備考 一、此等ノ生産費ハ一切ノ利息ヲ抜キ計算ス。

二、一番乃至六番ハ自作経営ノ場合。七番乃至一〇番ハ小作経営ノ場合ニシテ、A、B、ハ小作人ノ計算トス。

三、一番乃至六番ハ自作経営ノ場合ニシテB、ハ小作人ノ計算トス。

東埔寨

交趾支那ノ場合ト同様条件ニ於テ決定セリ、生産費ハ入ベテ自作ニ関スルモノデアリ、又土地所有者ガ一切負債ヲ有セズ、且充分ナ農作資金ヲ有スルモノトシテ計算セリ。

東埔寨ニ於ケル稲田ノ理想的経営計算書

（一ヘクタール当、単位ピアストル）一九二八―三〇年

番号	場所	稲田ノ種別	土地資本	機械資金	種籾	総収益	農作資金（経営費ト租税）	家族労働ノ食費	純収益	数一トン当生産費	食費除外	食費込ミ
一	ポンユントン（カンダル）	高イ稲田 二ヘクタール	九〇	五八	五〇	一五、八五	二〇、五〇	一三、六五	〇、三二	〇、七三		
二	プレイシエオル（コンポンチヤム）	高イ稲田 三ヘクタール	一八〇	五七	七五	二四、八〇	一三、六五	三六、九二	〇、三三	〇、五一		
三	バニライ（コンポントム）	低イ稲田 二ヘクタール	一二〇	七二	八〇	二六、九五	二〇、五〇	三二、五五	〇、三三	〇、五九		
四	トンレサップ（コンポントム）	浮稲 五ヘクタール	八〇	三〇	四五	一七、四〇	六、三五	二一、二五	〇、二九	〇、四〇		
五	プレイタテン（カンダル）	乾季稲 二ヘクタール	一〇〇	六三	九〇	三二、一〇	二〇、五〇	三七、四〇	〇、三五	〇、五八		

備考 一、一ヘクタールトハ概的一九駄乃至二三駄（品種ニヨリ異ナル）

「註」本項ハ「仏領印度支那ノ農業経済」中巻（東亜研究所訳）ヨリ転載ス

(4) 出廻時期

交趾支那、東京ソノ他全般ニ渡リ小農家ハ稲作中ニ於ケル負債ヲ整理スル為メ収穫後直チニ籾ノ全部ヲ売却シ又中大土地所有者ハ租税支払ノ為メニ、一部ヲ売却シ残部ヲ貯蔵シ食用ニ充ル他、相場ノ高キ折ヲ見計ラヒ売却ス。

以上ノ如キ関係ヨリシテ交趾支那ニ於ケル出廻ハ一、二月及五、六月ノ候ニ多ク、又東京ニ於テハ十一月乃至三月ノ候ニ多シ。

(5) 経営形態及利権関係

住民ノ約〇乃至九五%ハ農民ニシテ専ラ米作ニ従事シ、主トシテ家族労働ニヨリ経営サレツヽアリ。米作以外ニ煙草、棉花、養蚕、玉蜀黍等ノ栽培ハ此ノ形態ノ農業ニ属ス。之ト

対照的ナモノハ近代的栽植農業ニシテフランス統治以後主トシテ「フランス」人ノ手ニヨリ集團労働ヲ利用シ経営サレ、ゴム、茶、コーヒー、等植民地商品ノ生産ヲ目的トシテ栽培ヲ行ヒ、今両形態ヲ比較セバ（之ハ焼畑式農業地ヲ除ク、印度支那農業――牧畜、森林總監部ノ調査）次ノ如シ。

（一九二八――三〇年平均）

耕作物別	土着農業		栽培農業		計	
	面積（千畝）	價格（千ピアストル）	面積（千畝）	價格（千ピアストル）	面積（千畝）	價格（千ピアストル）
米田	四六三〇	二九九	四九二九	一、五大三、二四三		
其ノ他	三八〇	一四六	五二六	三二〇、九八七		
計	五〇一〇	四四五	五四五五	一、八八四、二三〇		

即チ、全耕作面積ノ九二%ハ土着農業ニシテ然モ、コノ九三%ガ米作ナリ（尤モ米作ハ栽植農業ニ於テモ六七%ヲ占ム）傳統的ナ土着農業ハ直接耕作スル極小自作農民ニヨリ経営サレ、更ニ土地所有ナキ雇傭農業労働者多数存在シ農業機構ハ錯雑セリ。之ニ反シ栽培農業ハフランス人ニ無償交付サレタル土地（コンセッシヨン）ニ発展シソノ他ハ米作地ニシテ小作ニ付セラレ、土着農業ト同様ニ経営サレツヽアリ。

東京、安南北部ニ於テハ旧慣ニヨル土地所有ガ認メラレ土地所有ハ細分サレ著シク遅レタル農業技術ヲ以テスル細小農業経営ガ圧倒的ナリ、従ツテソノ生産力ハ稠密増加スル人口ヲ保有スルニ足ラズ農民ノ生活水準ハ極メテ低位ニアリ農産物輸出余力乏シ。然ルニ南部交趾支那ニ於テハ單一土地所有法ノ施行トフコンセッシヨンノ設定トニ依リ土地所有ハ

著シク発達シ栽培農業ト共ニ小作制度ガ発展シ農産物モ多量輸出サル。従ツテ此ノ地方ニ於テハ栽培農業企業家ト農業労働者、地主ト小作人トノ対立ガ相当進展シツヽアリ。

「註」本項ハ情報局編「佛領印度支那の政治、経済、文化」ニ拠ル。

利権関係ニツキテ見ルニ、宗住民ノ企業ガ圧倒的ニ大ニシテ、他ニ佛人ノ企業若干アルコト次表ノ如シ。

佛印ニ於ケル農作地ノ面積及價格（一九二八――三〇年ノ平均價額）

栽培ノ種別	宗住民農業		佛人農業		計	
	面積（千畝）	價格（千ピアストル）	面積（千畝）	價格（千ピアストル）	面積（千畝）	價格（千ピアストル）
稻田	四、六三〇	一、五〇八、一一三				
雜穀栽培	三八〇	一四〇、九八七				
計	五、〇一〇	一、六四九、一〇〇	四、九二九	一、五大三、二四三		

但シ主トシテ火田式耕作ヲ行ヒ、ソノ面積及價格トモニ甚ダ不明ナル「ラオス」「トンキン」「アンナン」ノ山岳地方ノ宗住民栽培ヲ含マズ

「註」Yves Henry 著「佛領印度支那ノ農業経済」ニ拠ル

(6)、邦人企業ノ現状

邦人ニテ稻作経営ヲナスモノナシ。

(7)、集荷機構ノ現状

(イ)交趾支那

コシヨロンレニ於ケル籾商人ハ一ツノ組ヲ作リ極メテ組織的ニ活動シテ籾ヲ蒐メ輸出業者又ハ精米業者ニ売却シ又自ラ精米工場ヲ経営シ白米トナシテ香港方面ヘ輸出ヲナスモノモアリ。奥地ニアル籾商人ハ集荷人ヲシテ直接耕作者ヨリ籾ヲ買付セシメテ之ヲ集荷シ倉庫ヘ貯蔵ス。尚集荷ニ関スル業者ハ殆ド全部支那人ニシテソノ実力ノ大ナルコト他ノ何者モ追随ヲ得ザル所ナリ。

各地方集散地ニ集荷セラレタル籾ハ、精造リサルヽコトナク、小売又ハ舶載ニヨリ水路運バレテコラシユカソトレー（コシヨロンレノ西南）ニ到着シ倉庫（之ハ大部分コシヨロンレノ商人ノ所有ナリ）ニ収納セラレ、一ピクル入ノ袋姿トナリテ積上ゲラル。之等ノ籾ハ越売ニヨリテコシヨロンレニ運バレ精米業者ヘ売却セラル。

(ロ) 東京及地部安南

集荷人ハ奥地ノ村落即籾價ノ安キ地方ノ市場又ハ生産農家ノ庭先ヨリ買入レ、コハイフオンレヲ中心トスル大商人（的六万アリ）ニ売却ス、精米所ハ之ヨリ籾ヲ買入レ精米ス。交趾支那ニ於ケルト全ク同様ニ集荷精米輸出トモニ支那人ノ巨大ナル資本ト実力ノ占ムル所ナリ。

以上ノ外ニ、安南人ノ小商人（主トシテ婦人）及大商人アリ、前者ハ生産者ヨリ直接籾ヲ買入レ之ヲ輸出業者、精米所、醸造所等ヘ売却ス、後者ハ支那人商人ナキ地方ニ於テ生産者ヨリ直接ニ或ハ市場ニ於テ仲買人ヨリ籾ヲ買入レ大量ヲ倉庫ニ貯蔵シ相場ノ高キ折ニ支那人又ハ欧人商館ヘ売却ス。

(ハ) 重埔寨

籾ノ集荷ハ第一ハ村落ノ支那人ノ店舗ニ於テ行ハル。生産農家ハ大体小経営ナルタメコカンボレ及アノンペン地方ノ大地主及富商ヨナシ増水期ニ売却ス、

稍仮地方ノ各州中心地ニ集荷セラレタル籾ハ一部ハ地場ノ消費ニ充テラレ大部分ハ西貢ヲ経由シテコシヨロンレニ集荷サル。

精米所

(イ) 東京、精米所組合ハ集荷人或ハ安南人又ハ支那人ノ経営ナリ。之等精米所ハコシヨロンレニテ精白ヲ完了シ或ハ直接香港ヘ売却ス。仏人ハ、海防一、河内二、外ニ五ケアリ。

(ロ) 交趾支那　コサイゴンレヨリ輸出サルヽ米ハ全部コシヨロンレニテ精米サル。精米所ハ仏人経営ノ三ケ所ヲ除キ、スベテ支那人ノ経営ナリ。之等精米所ハコシヨロンレニテ籾ニテ買ハレ、輸出業者ヨリノ注文ニ応ジテ精白ヲ完了シ或ハ直接香港ヘ売却ス。仏人輸出業者モ亦コレヨロンレニテ支那人ノ如キ組織的購買網ナシ。

「コシヨロンレ」精米所ハ工場数七五、公称ノ動力一三、八〇〇馬力、最大仕事量二四時間

当リ七、六二五磅ナリ。

機械ニヨル籾摺ハ興地ニ於テモ看ラレ、之等ノ籾摺所ハ殆ド全部地方的資ニ売テラルル。カクノ如キ籾摺所ハ一般ニ一等ニ於テハ三六五アリ。尚之等ノ籾摺所ハ「シヨロンレ」ニ於ケルモノニ比シソノ規模小ニシテ一日ノ能力ハ五磅乃至七磅程度ナリ。

右ノ如キ機械設備ヲ有スル工場ノ外ニ、家庭民ハ土臼ニヨリテ籾摺ヲナシ要ニ応ジキシテ精白ス。之ハ東ヲ図家用ニ供ス。

(3)、輸出機構ノ現状及主要輸出商社

西貢市場ニ於ケル米穀輸出業者ハ支那人、仏國人、蘭領人及日本人等ニシテ何レモ西貢市ニ本支店ヲ設ケ相当ノ資力ヲ有ス。移出業者ハ輸出商ニ於テ之ヲ兼ヌル場合アルモ多クハ支那人又ハ安南人ノ営ム所ニシテ主トシテ小口ノモノヲコジヤンクル積トシテ印度支那沿岸ニ移出スルモノトス。

輸出業者ニ対スル売手タル精米業者ハ主トシテ支那人ニシテソノ團結堅固ナレバ買手タル輸出業者モソノ利益ヲ擁護スル必要上組合ヲ結成スルニ至リ西貢ニ於ケル仏人輸出業者ハ西貢米輸出商組合(Association des Exportateurs Français de Riz de Saigon)ヲ、日本人、葡萄牙人等ハ西貢米及各種産物輸出商同業組合(Syndicat des Exportateurs de Saigon)ヲ組織セリ。

Retour de Riz et Produit divers

西貢ニ於ケル輸出業者ト精米所トノ取引ハ毎日(休日ヲ除キ)午前九時半頃ヨリ同十一時

四十分頃マデ印度支那銀行前通(Rue Lefèbre)ノ街頭ニ参集シ、立談程ニ取引ヲ為スモノニシテ、仲買人ヲ仲介セシメズ直接取引ヲナスモ多クハ翌日午前中ニ一定様式ノ約定書ヲ取交スモノトス。

約定スベキ主ナル條項ハ次ノ如シ

数量、(風袋込俵叺)、種類、品質(原料籾ノ品質、精白程度、砕米ノ混合割合、籾及糠ノ混入程度)価格、荷造、受渡、代金支拂、等ナリ。

輸出商ハ常ニ海外ノ得意先ト連絡ヲ保チ買注ニ接シタル時ハ直チニ銀行業者及精米業者ニシテヲ出合ヲ求メ、又売込ノ見込アル時ハ自ラ売注文ヲ発シテ取引ニ努力ス、対欧洲其ノ他遠隔ノ地トノ間ニ行ハルヽカ如キ(C.I.F.)取引ノ場合ハ先ヅ之等ニ先キ立ツテ船腹ノ引合ヲナスコトヲ要ス。米取引ノ場合ハ既述ノ如ク午前中ハフレイリブルレ街路上ニテ行ヒ午后ハ電話ヲ以テ或ハ輸出商自ラシヨロンレニ出張シテ米商ニ接シ商談スルヲ普通トス。輸出商ノ多クハ午前中ニ店主自ラ専門ノ社員ト共ニ市場ニ至リ、其ノ下ニ支那人又ハ土人ノ使用人ヲ加ヘテ相手ヲ探シ扇子関係等ヲ顧慮シツヽ商談ヲ進ム。海外ノ買手トノ間ノ契約内容ハ契約書ニ詳細ナリ。

東京米ノ輸出港タル海防ニ於テハ輸出米ノ大部分ハ半搗米ニシテ、土民又ハ支那人ノ仲買商ガ地方産地ニ於テ農家ノ手搗シタルモノヲ蒐集セルモノナリ。仲買商ノ買付ヲナスニ際シテハ見本ニ依リテ引合ヲナシ契約ヲ締結ス。精米ヲ輸出スル場合ニハ産地ニ於テ買集メタル籾及半搗米ヲ海防ニ於ケル精米所ニ於テ精白ス。取引ノ方法ソノ他ハ西貢ニ準ジテ行

(9) 米及其ノ副産物ノ銘柄

西貢米ノ品質

(一) 精米所用玄米 ―籾一%乃至五%混入、此ノ品質ハ赤米一〇%以下、風ソ砕米一五%以下ナル事ヲ要ス。籾ノ混入率ハ取引当事者間ノ特別ノ契約ニヨリ定メラルヽ場合アリ。

(二) 精米所用玄米 ―籾二〇%此ノ品質ハ赤米二〇%以下砕米一五%乃至二〇%以下タルコトヲ要スル。

(三) 醸造所用 五%込ミ玄米、―此ノ米ハ赤米及黄色米ヲ含ムモ差支ナキモ砕米二五%以下籾五%以下ノコトヲ要ス。

(四) 白米擬別ニ甌 ―砕米季節場次第ニテ、此ノ米ハ砕米三〇%以下タルコトヲ要シ之ニ混入スル砕米量ハ米及砕米ノ全量ノ二五%以下タルコトヲ要ス、ソノ他ハ穀粒ノ性質ニヨリテ帯灰色乃至帯赤色ナリ。

(五) 白米欧洲ニ施普通 ―此ノ品質ハ最大限六%ノ砕米ヲ含ム、色ハ前着ト同様ナリ。

(六) 白米欧洲ニ施特別 ―之ハ最大限五%ノ砕米ト五 ―一〇%ノ赤米ヲ含ム、精白セルモノハ白米欧洲ニ号普通ヨリモ稍白シ。

(七) 白米ジマ少アニ号 ―此ノ品質ハ八月迄ハ砕米五〇%以下、其後ハ五五%迄差支ヘナシ、此ノ米ハ欧洲ニ号ヨリモ一層白キヲ要ス。

(八) 白米日本二号 ―此ノ品質ハ最大限砕米四〇%、米ノ白サニ於テ、ジヤバ二号ニ勝リ、マニラ二号ニ稍劣ル。此ノ米ハ穀粒ノ形状ハ雑多ニテ差支ヘナシ

(丸) 白米マニラ二号 ―此ハ白米日本二号ヨリモ稍白ク砕米四五%以下タルヲ要ス。

(ロ) 白米レユニオン島二号 ―此ハ白サハマニラ二号ト同程度ノ最大限四〇%ノ砕ヲ含ム、

(ニ) 白米普通一号砕米二五% ―之ハマニラ二号ヨリモ白キヲ要シ砕米二五%以下ノコト、穀粒ハ必ズシモ均一ナルヲ要セズ、長形、円形トヲ問ハズ

(ニ) 長形普通一号砕米二五% ―白サハ普一号ト同程度ニシテ砕米二五%迄タルコトヲ要ス、大部分ハ長形ノ粒ヨリナル。此ノ穀粒ハ普通一号ニ比スレバ一層均一ナリ。

(三) 白米円型普通一号砕米二五% ―白サハ普通一号ト同程度、砕米二五%迄、大部分ガ円形ヨリナル。前者ニ比シ穀粒ハ一層均整ナリ。

(四) 白米ゴーユメ一号砕米二五% ―此ノ米ハ半長ニシテ普通一号ヨリモ稍白ク、粒ハ一層太ク、砕米ハ一号ト二号トノ間ニアリ。全体トシテ差支ナキモ此ノ混白率ハ当事者間ノ約定次第ニテ小トセラルヽコトアリ。

(五) 白米ベクゾー ―ベクリユー一号砕米二五% ―砕米含有限度二十五%、但シ此ノ比率ハ当事者間ノ約定ニヨリ小トナシ得ル。精白度ハ普通一号ヨリ高キヲ要ス。長型普通一号ヨリ粒ハ稍ヒ且ツ田柱型ニシテ透明(硝子質)ナリ。

(六) 砕米一号、二号混合、―精白度ハ少クトモ日本二号ト同程度ナルコトヲ要ス、若干ノ砕米三号、半欧粒及ビ完全粒ヲ含ミ得ル。

(七) 玄砕米、―此等ノ砕米ハ混合物デアリ尚籾ヲ含ム。

之等碎米ハ微ト量ノ糠ヲ含ミテ差支ナキモ芒ヲ含マズ。

米ノ見本中ノ碎米混入率ノ検定ニ就テハ見本一〇〇瓦ヲ採取、之ヲ完全米ト碎米トニ分析シソノ各ヲ秤量シテ比率ヲ求ム。尚、分析ニ於テ長型ノ半分以上ノモノハ完全粒ト見做ス。又半成粒ガ相当多量ニ及ブ時ハ之ヲ二等分シ一方ヲ粒ノ分ニ入レ他方ヲ碎米ノ分ニ入レル。

着色粒ニ関シテハ黄色粒ハ取引上慢習上許容サレヲリ混入比率ハ七月末迄ハ二%、其ノ後ハ三%ナリ。尚收穫期ニ於テ降雨ニ遭遇セル場合ニハヨク比率ハ高メラルヽヲ普通トス。

蒸　米（Boiled Rice）

蒸米ハ普通成熟ス充分ナル粒又ハ水分含有量多キ粒等精米原料トシテハ不適当ナル粒ニ加エセルモノニシテソノ加工方法ハ先ヅ粒ヲ約二・三時間蒸シ直チニ莚上ニ撒布シ度々攪拌シ冷却乾燥シタル後普通ノ粒ニ於ケルガ如ク脱稃シタルモノナリ。

カクシテ得タル玄米ハ光澤アル黄色ヲ呈シ一見多年貯藏セル古米ニ類似スト雖モ、久シク貯藏スルモ発酵セズ。即チ蒸米ニスルコトニヨリ碎米トナル割合ヲ減少スルト共ニ貯藏力ヲ大ナラシムルモノナリ。

蒸米ハ多ク昭南港ヘ輸出セラレ同方面ニ於ケル與地農業者ノ食用ニ供セラレ、一部ハ同巻ヨリ印度ソノ他ヘ再輸出サル

糠、（粉末）

糠ハ精白当初ノ工程ニ生ズル下糠（No2. Rice meal）ト後ノ工程ニ生ズル上糠（No1. Rice meal）トアリ。下糠ニハ塵埃、粒殻ノ細片等多量ニ混入シ品質粗悪ナリ。サレド上糠ハ稍灰色ヲ呈シ細粉状ヲナシ米粉ヲ含ミ塵埃等ノ混入少ク品質佳良ナリ。之等ハ飼料或ハ肥料トシテ香巻及欧洲方面ニ輸出セラルヽ。

東京米ノ品質

(一)佛國向輸出米――マンダラン米、ブダミ、良質米ナリ。

(二)碎米混合量二五%――一号米

(三)碎米混合量四〇%――日本二号米

(四)碎米混合量五〇――五五%――ジヤバ二号米

香巻ヘ輸出サレル米ハ專ラ支那人達ニヨリ輸出サレ数多ノ地方ヨリ蒐集サル。取引ハ産地別ノ銘柄取引ニテ行ハル。米ニハ一俵摺リ二俵摺リ、ノ三種別ニテ発送サレ精米ノ仕上ゲハ香巻ニテ注文ニヨリ為サル。小碎米及糠ハ別途輸出サル。

(10)．主要輸出港数

仲領印度支那ニ於ケル輸出数量ハ年ニ依リ著シキ差異アリ．即最近五ケ年間ノ状況ヲ見ルニ

二大体ニ於テ年額一、〇万——一七〇乃至一八〇万瓲ニシテ、一九三二——三六年ノ五ケ年平均ニ於テ一五〇万五千瓲（約一千万石）ナリ、然シテ右輸出米中白米ハ九十三万瓲（約二六万瓲ハ約一七四万石）全体ノ約（二%ニシテソノ他米ハ約六、〇万石ノ）ニシテ全輸出量ノ約八二%ヲ占メ、次ニ砕米ハ輸出額比較的少ナシ。仏領印度支那ニ於ケル輸出米ハ既ニ述ベタル如ク大部分支那産米ニシテ価貴廉ヨリ輸出セラル、所謂西貢米ナリ 即チ西貢米ハ全輸出数量ノ約九六——九七%ヲ占メ、東京米ハ僅カニ、三——四%ニ過ギズ

海外ニ於ケル仏領印度支那米ノ主ナル需要市場ハ支那事変前マデハ仏蘭西本國、欧州諸國、支那、香港、海峡植民地等ニシテ特ニ仏蘭西本国ヘノ輸出最モ多カリシモ最近ニ於テハソノ趣ヲ異ニセリ

(三) 價格

(1) F.O.B價格及C.I.F價格

F.O.B價格一瓲当一ピヤストル（但シ銀ニテ）

（一〇〇ピヤストル＝九七円十二支五厘）

C.I.F價格一瓲当二〇円九〇支（本船運賃諸掛ヲ含ム）

別ニ包装用叺一五円五〇支

(2) 運賃及平戦時保險料

保險料 平時 一〇〇円ニ付 七十五支

戦時 一〇〇円ニ付 一四円

(四) 在庫量

不詳

第二節 雑穀

一、需給状況

(1) 小麦粉輸出入高及消費高（単位キンタル）

年	輸入高	輸出高	消費高
一九三五	一七九、一〇〇	一〇〇	一七九、〇〇〇
一九三六	一八四、八〇〇	二〇〇	一八四、六〇〇
一九三七	一九〇、〇〇〇	三〇〇	一八九、七〇〇
一九三八	二四二、一〇〇	二〇〇	二四一、九〇〇
一九三九	二五三、六〇〇	一、六〇〇	二五二、〇〇〇
平均	二〇九、九二〇	四八〇	二〇九、四四〇

不足高 二五一、五〇〇キンタル

(2) 小麥輸出入高及消費高（單位キンタル）

年	輸入高	輸出高	消費高
一九三五	五〇〇〇	〇	一〇、〇〇〇
一九三六	五〇〇〇	〇	一二、六〇〇
一九三七	七〇〇〇	〇	一六、九〇〇
一九三八	九〇〇〇	〇	一七、五〇〇
一九三九	二、六〇〇	〇	一五、五〇〇
平均	一、〇〇〇	〇	一三、〇〇〇

不足高　一、〇〇〇キンタル

(3) 大麥輸出入高及消費高（單位キンタル）

年	輸入高	輸出高	消費高
一九三七	一〇〇	〇	一〇〇
一九三八	一〇〇	〇	一〇〇
一九三九	三〇〇	〇	三〇〇
平均	一六七	〇	一六七

不足高　一〇〇キンタル

(4) 燕麥輸出入高及消費高（單位キンタル）

年	輸入高	輸出高	消費高
一九三五	二〇〇	〇	二〇〇
一九三六	二〇〇	〇	二〇〇
一九三七	三〇〇	〇	三〇〇
一九三八	三〇〇	〇	三〇〇
一九三九	四〇〇	〇	四〇〇
平均	二八〇	〇	二八〇

不足高　三〇〇キンタル

(5) 玉蜀黍生産高、輸出入高及差引殘高（單位キンタル）

年	生産高	輸入高	輸出高	差引殘高
一九三三	二、七七〇、〇〇〇	一〇〇	一、六六七、九〇〇	一、一〇二、〇〇〇
一九三四	五、一三〇、〇〇〇	〇	四、七一三、九〇〇	四一六、一〇〇
一九三五	四、八〇九、〇〇〇	二〇〇	四、一二八、六〇〇	六八〇、二〇〇
一九三六	四、五九六、〇〇〇	(一)	四、六六七、二〇〇	七一、二〇〇

	一九三七	六、二三〇、〇〇〇	一〇〇	五六三三、八〇〇	五九六、一〇〇
	平均	四、七〇七、〇〇〇	八〇	四、一六二、二八〇	五四五、五二〇

右五ケ年平均ヲ見ルニ

生産高　三九、一四一、〇〇〇　キンタル

輸入高　一〇〇

輸出高　四、一六二、二〇〇

差引残高　五四四、一〇〇、〇〇〇（消費高及持越高）

(6) 豆類

(一) 需給状況

(二) (イ) 主要生産及輸出地、及輸出時期

佛領印度支那ニ産出サレル豆類ハ次ノ通リ。

一、東京産隠元豆――白、赤

二、安南産隠元豆――白豆又ハさゝげ豆

三、緑豆

四、大豆ソノ他

右ノ中輸出可能ナルモノハ東京、安南産隠元豆及緑豆ニシテ大豆ソノ他ハ甚ダ僅少ニシテ

問題トナラヌ。

産地ハ大別シテ北部佛印、南部佛印ニ分レ播種、收獲、出廻期ヲ異ニスル。從来主トシテ安南人ノ食用ノミニ限ラレ佛人間ニハ余リ省ラレズ、比ノ土人ノ食用ニ用ユル度合ハ他食料品即チ玉蜀黍、米等トノ比價如何ニヨルモノニシテ、安ケレバ余計消費シ高ケレバ売却スルト言フ状態ニシテ輸出可能數量ハ年々相違アリ、生産額増加スルモ必シモ之ニ応ジテ輸出可能數量増大スルモノトハ思ハレズ。栽培面積及生産高（隠元豆、緑豆、及大豆ノ總計）

	面積（町）				生産高（千キンタル）			
	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年
安南	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一六、九二五	一六、九〇〇	一一〇	一一五	一六七	一六七
東浦寨	一	一	四、四〇〇	四、四〇〇	一	一	二六	二六
交趾支那	一	一	一	一	一	一	一	一
東京	一	四三、八八四	四五、一一〇	四四、〇〇〇	一	一三二	二〇三	一九一
合計	二〇、〇〇〇	六三、八八四	六六、四三五	六五、三〇〇	一一〇	二四七	三九六	三八四

本表ハ萬國農事統計年鑑（一九三九年）ニヨル

東京産隠元豆

白充ノ二種アリ、狀國ノ手長豆ニ類スルモノデアル

収穫期ハ十一月、四月ノ二期ニ分レ十一月収ハ僅少ニシテ問題トナラズ輸出向トシテ相当数量ニ上ルハ四月収デアル。

年間買付可能見込数量ハ

白隠元豆　二、〇〇〇噸

赤隠元豆　一、〇〇〇噸

緑豆

緑豆産地ハプノムペン及シャウドツク（Phnom penh, Chaû Doc）地方ニテ、年間産額約五——六〇〇〇噸ニテ内大割ハ Phnom peuh 地方、四割ハ Chaû Doc 地方ニテ生産サル。

緑豆ハ Phnom peuh 地方ニテハ、八月頃播種サレ収穫ハ十一月——二月 Chaû Doc 地方ハ播種三月収穫六月——九月。 Cholon ヘノ出廻リハ両者共収穫後約半ケ月ヲ要ス。

緑豆ハ生産高ノ半以上ハ当領内ニテ主トシテ、支那素麺、モヤシ、餡トシテ食用ニ消費サレ残リハ輸出セラル。現在ノ輸出余力ハ年間約二——三〇〇〇噸ト思ハル。

安南産元豆

産地ハ Phanthiet 及安南ノ Quin hon 地方ニテ年間生産高二——三〇〇〇噸、前者ハ、大割後者ニ於テ四割ヲ生産ス

Pham thiet 地方ノ播種期ハ五——六月、収穫ハ八——九月

Quin hon 地方ノ播種期ハ二——三月　収穫ハ五——六月

Cholon ヘノ出廻リハ両者共収穫後約半ケ月ナリ。

地場消費ハ生産高ノ半以上ニシテ残リハ輸出セラル、現在ノ輸出余力ハ年間約一——二、〇〇〇噸ト推定セラル。

佛印豆類輸出高表（単位噸）

	一九三七年	一九三八年	一九三九年
佛國	〇、五	二一、九	二〇〇、九
支那	二八、九	二七、七	一四、七
雲南省	〇、七	〇、一	〇、四
香港	九八〇、六	一、〇四八、七	一、一九、三
泰國	〇、八	五、五	二、〇
シンガポール	一	一	八六九、八
仏州湾	〇、一	〇、二	一七、五
船用消費	一八七、五	一六六、一	三、〇
計	一、九九一、一	四、二七〇、二	二、二二七、三

備考 一、出所 Indisch Ver slag 1939.

二、我國ノハ從来殆ト全ク輸入セラレテ居ラズ。

本文ハ主トシテ[illegible]下物産誌、「南方[illegible]概要」ニヨレル

(2) 経営形態及利權關係
(3) 邦人企業關係
(4) 集荷機構
(5) 工場設備
(6) 輸出機構
(7) 主要輸出港

等ニツキテハ不詳

(二) 價格　不詳

(三) 在庫量　不詳

第三節　甘藷及馬鈴薯

生産額（單位瓩）（資料、藍國農事協会農業統計年鑑）

地域名＼年次	一九三五	一九三六	一九三七
アンナン	一八九、〇〇〇	一八九、〇〇〇	一二〇、〇〇〇
カンボヂヤ	—	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇
トンキン	九五、四〇〇	六九、一〇〇	七七、三〇〇
計	二八四、四〇〇	二七六、一〇〇	二一五、三〇〇

馬鈴薯輸出入額（單位瓩）

年次	輸出額	輸入額	輸出超過額
一九三五	七〇	五、〇九〇	(一)五、〇二〇
一九三六	一一〇	四、七五〇	(一)四、六四〇
一九三七	九〇	四、六四〇	(一)四、五五〇
一九三八	九〇	四、六四〇	(一)四、五五〇
一九三九	一〇〇	三、一八〇	(一)三、〇八〇

備考、甘藷ハ本邦ヨリ少量輸入セルコトアルモ、大体自給自足ノ程度ナラン、

馬鈴薯輸出入高及消費高（單位キンタル）

年	輸入高	輸出高	消費高
一九三五	五〇、九〇〇	七〇〇	五〇、二〇〇
一九三六	四七、五〇〇	一、一〇〇	四六、四〇〇
一九三七	四六、四〇〇	九〇〇	四五、五〇〇
一九三八	四六、四〇〇	九〇〇	四五、五〇〇
一九三九	三一、八〇〇	一、〇〇〇	三〇、八〇〇
平均	四四、六〇〇	九二〇	四三、六八〇

不足高、四三、七〇〇キンタル

第四節　カツサバルート（資料：萬国農事協会農業統計年鑑）

一、需給状況

(1) 栽培面積（単位ヘクタール）

地域名＼年次	一九三五―三六
アンナン	二〇、〇〇〇
トンキン	六、七九八
	二〇、〇〇〇
	六、四二四

(2) 生産額（単位 噸）

地域名＼年次	一九三五―三六	一九三六―三七	一九三七―三八
アンナン（生根）	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	三八、〇〇〇
トンキン（乾根）	四九、〇〇〇	二〇、四〇〇	三六、〇〇〇

備考、一、年次ハ四月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ル分トス

二、数字ハ多少不正確ナルヲ免レズ

(3) 輸出額（単位 噸）

種類＼年次	一九三五	一九三六	一九三七	一九三八	以上五ヶ年平均
マニホツト（カツサバルート）	七四一	二、五三五	一二、一二九	八、三七〇	五、〇五三
マニホツト粉（カツサバルート粉）	二六七	七三四	一、九三三	九三〇	八八五

(4) 輸入額

一九三八年ノ輸入額ハタピオカ澱粉二九〇噸、タピオカ・フレーク（薄片及塊片）一〇噸ナリ

(5) 輸出先及輸出仕出地

輸出ハ殆ンド大部分佛蘭西本国ニ仕向ケラレ、タピオカ澱粉及薄片及塊片ノ輸入ハ下ンガポールヨリ仕出サル、

即チマニホツトノ佛蘭西本国向数量ヲ示セバ

一九三八年　八、三七〇噸

一九三九年　一、四八九噸

一、四八九〃

二、生産及取引等概況

(1) 主要産地

カツサバノ主要産地
安南ノ海岸部、東京州

(2) 出廻時期

六、七月ー十一月頃迄ナリ

(3) 経営形態

住民農業ニシテ食料トスル玉ノ以外一部ヲ輸出ス

(4) 集荷及輸出

住民ガ生芋ヲ乾燥セルモノヲ仲買人（華僑）ガ集荷シテ更ニ完全ニ乾燥シ、輸出商ニ渡ス
邦人輸出商トシテハ三井物産、三菱等アリ

(5) 主要輸出港

ツーランニ佛印産ノ八、九割ガ集散セラレ、ソレヲ西貢ニ仕向ケ、更ニ佛本国其他ニ輸出セラル

三、価格

(1) F.O.B価格

カツサバルート）昭和十六年十一月頃ノ価格、俵当一三〇円見当

(2) 運賃

俵当 二五、六円程度

(3) 保険料

百円ニツキ 三〇銭

(4) 内地価格

不詳

(5) 関税

本邦輸入税　輸出税、埠頭税アリ
カツサバルート　百斤当 一円六五（宮行税率 一、六五）
タピオカ澱粉　一、八〇（〃 二、四三）

四、在庫量

西貢ニ三〇〇瓲程度在庫ノ見込ナルモ明ラカナラズ

第五節　砂糖及糖蜜

(イ)砂糖

(一)需給状況

イ、最近ノ年間生産数量、消費数量、対本邦及主要貿易先別輸出入数量

イ、最近ノ佛印砂糖生産高

一九三八年度ニ於ケル佛印ノ砂糖生産高ハ約六五、五〇〇瓲、之ヲフランス人、安南人ノ企業別及交趾支那、安南、東京ノ各地域別生産額ニ分類スレバ左表ノ如シ

地域別／企業別　交趾支那　安南　東京　計

（單位瓲）

	交趾支那	安南	東京	計
フランス人	一一、〇〇〇	三、五〇〇	—	一四、五〇〇
安南人	一八、〇〇〇	二〇、〇〇〇	三、〇〇〇	五一、〇〇〇
計	二九、〇〇〇	二三、五〇〇	三、〇〇〇	六五、五〇〇

右場表ニ依レバ佛印ノ砂糖生産ノ決定的部分――約八割――ハ安南人企業ノ占ムル所

デアリ、地域的ニハ交趾支那、安南ノ二地方ガ重要ナル地位ヲ占メ北部ノ東京地方及ビ西南部ノカムボヂヤノ占ムル地位ハ殆ドイフニ足ラズ。

全砂糖生産額ノ内土産糖及ビ白糖ノ生産額ハ前掲表ニテハ不明デアルガ少クトモ安南人企業ノ生産ニ依ルモノハ殆ド專ラ土産糖デアルト考ヘラレルカラ絶額中土産糖ノ占ムル割合ハ八割以上ニ達スルモノト推察セラル

ロ、佛印ニ於ケル最近ノ砂糖消費量

最近ノ統計ニヨレバ生産年額約六五、〇〇〇瓲ニ対シ国内消費ハ年ニ約六〇、〇〇〇瓲デアリ、人口一人当年消費額ハ平均二、八瓩ニ過ギズ、印度、仏哇、支那等ト共ニ一人当消費額ノ最低グループニ属ス。

一人当消費額ノ低イ他ノ諸国ト対比セバ左表ノ如シ（一九三七―三八年）

ペルー	一四、六	印度	六、七
ソ聯邦	一三、〇	仏哇	四、六
白本	一二、八	佛領印度支那	二、八
伊太利	九、五	支那	一、八

ハ、対本邦及主要貿易先別輸出入数量

最近ニ於ケル佛領印度支那ノ砂糖輸入並ビニ輸出高ハ別表ノ如シ

今次欧洲大戦勃発直前マデハ、佛印ヨリノ砂糖積出ハ、主トシテ佛本國ノ需要ニ向ケラレ居リシガ大戦勃発後、特ニ佛本國ノ需要激減シ、当然コノ輸出ハ杜絶シ居ルモノト考ヘラルル

2、昭和十七年度ニ於ケル生産見込数量、輸出見込数量及其ノ算定ノ基礎

昭和十七年度ニ於ケル生産見込ニ就テハ詳細ナル数字ヲ欠クモ、大体現状ヲ維持スルモノト見ラレ従ツテ土産糖ヲ含ミ五万乃至六万瓲ト推定セラル

(二)生産及取引事情

1、集荷機構ノ現状

不明

2、設備能力及労力関係(工場数 労働者数)

製糖技術ハ依然旧式ナル方法ガ圧倒的デ新式ノ方法ニ依ルモノハ左ノ三工場ニ過ギズ

州名	所在地	会社名
交趾支那	ヒエプ、ポア	印度支那製糖及精製会社
〃	タイニン	タイニン、エ、ラムズ、ド、カント砂糖会社
安南	ツイホア	安南砂糖会社

製糖業者ハ原料甘蔗ヲ他カラ購入シ圧搾スル場合ガ普通デアリ、製糖業者ガ自ラ同時ニ農場ヲ経営スルハ稀ナリ

右三工場ノ能力ハ合計一千八百瓲デアリ最近ニ於ケル営業状態ハ次ノ如シ

一、植付面積	約六千ヘクタール
二、甘蔗圧搾斤数	二十八万瓲
三、歩留	七、五%
四、産糖高	二万一千瓲
五、ラム及酒精製造高(ピープホアノミノ)	三千五百瓲
労働者数 ナシ	

3、輸出機構ノ現状及主要輸出商社

ナシ

4、主要輸出港及同港ヨリノ輸出数量概数

不明

5、主要産地及出廻時期(生産時期)

(イ)主要産地

甘蔗栽培ハ殆ド全部土着人ノ手デ行ハレ居ル。往時ハ單位面積当リ収穫モ少ク一ヘクタール当リ六瓲内外。安南ニ五瓲ストリシガ外國産ノ輸入、化学肥料ノ使用等ニヨリ現在デハ改善イヲ増加シ平年作柄デモ一ヘクタール当リ五〇瓲平均トナレリ

現在交趾支那ニテ栽培セルモノハ爪哇ノP・O・Jニ種、安南印度ノCO二九〇及CO三一三ナリ。

参考ノタメ昭和十一年―十三年間ノ平均ニ於ケル一ヘクタール当リ甘蔗収量ヲ示セバ約七〇瓲（新式全般平均）ナリ。

6、経営形態及利權関係等

佛印糖業ニ対スル國籍別投資額

不詳

7、邦人企業ノ現状

蔗園ハ殆ド土着人ノ手デ行ハレテ居リ邦人進出ハ不明

輸出業者トシテ三井物産株式会社ガハノイ及サイゴンニ支店ヲ有ス。

(三) 價格

1、現在ノF.O.B價格及近キ将来ノ見透

一九四二年四月現在輸出巻庫渡百瓩建三四、五〇ピアスター

2、運賃及平戦時保険料

不明

3、内地公定價格トノ比較

本邦ニ輸入セラレタル事実ナキ故不明

4、輸出地及本邦ニ於ケル関税ノ有無及ソノ税率

不詳

(四) 在庫量

1、現在ノ在庫及輸出可能数量

不明

2、所在及最寄輸出巻

不明

3、所有関係

不明

別　　表

一九三六年ヨリ一九三八年ニ至ル糖種別仕向地別輸出高表（單位　百　瓲）

(1)　白　　糖

	一九三六	一九三七	一九三八
佛　國	五、四七一	二四、四八〇	六、八五九
	（五、〇一二）	（二三、七七四）	（六、八四八）
泰	（四五九）	（三〇二）	（一一）
アルゼリア		（四〇四）	
其ノ他			（一一）
計	二、〇六八	二四、七二九	九、九六五
	（二、〇四六）	（二一、五二一）	（九、九六五）
泰	（六）		
支　那	（一六）		
香　港			（二、七六二）

(2)　原料糖

	一九三六	一九三七	一九三八
佛　國	二、〇六八	二四、七二九	九、九六五
	（二、〇四六）	（二一、五二一）	（九、九六五）
泰	（六）		
支　那	（一六）		
香　港			（二、七六二）

(3)　糖　　菓

	一九三六	一九三七	一九三八
其ノ他	一三、五九六	四九、二五八	一七、三九九
計	一二、一四〇		

一九三六年ヨリ三八年ニ至ル糖種別仕出地別輸入高（單位　百瓲）

(4)

	一九三六	一九三七	一九三八
粗糖			
泰	一九三八	一九三七	一九三六
支　那	（一一五）	（一一三四）	（四七二）
香　港	（九）	（二）	（四）
精糖			
佛　國	一四八	一八八	一三七
香　港	（一四二）	（五）	（三）
泰	（六）	（六七）	（一一四）
		（一六）	（二〇）

其ノ他		一四、一三二	一四、七八〇	一二、八八〇
佛國		二、一七三	（二、九四〇）	（三、七二八）
支那		（一一）	（一〇）	〇
香港		（八一一、六二四）	（一一、七二九）	（八、四九三）
蘭印				（一〇〇）
泰		（二九九）	（六八）	（五二一）
シンガポール			（一一八）	（一一）
其他		（一三）	（六）	（二七）
計		一四、四〇四	一五、一〇四	十三、四九四

(四) 糖蜜　（最近三井物産株式会社ヨリ入手セル資料ニ據ル）

(イ) 砂糖会社糖蜜製造工場現況

(イ) Sucrerie de Thiep-Hoa (Indochina)

糖蜜年生産高ハ三千瓲ナルモノ全部ハ Distillerie de l'Indo-chine ノ用途向ノ数量ハ見込ナシ。

(ロ) Sucrerie de Tuy Hoa

本製糖会社ハ Quinhon（中部安南）ヨリ西南寄リ十四粁ノ地点 Tuy-Hoa 駅ヨリ四十五粁ノ奥地ニアリ、年産額八千三百乃至千四百瓲、出廻時期ハ一月末ヨリ五月末迄トシ従来肥料代用品トシテ砂糖園ニ施肥一部製谷向ニ積出サレタリ。包装ハ平均六千瓲ニテアンペラ包ナリ。現場ヨリ西南マデ輸送中約一〇%ノ濕損アリトノコトナリ。

(ハ) Sucrerie de Tuy-Ninh

年産額五百瓲乃至六百瓲ニシテ其ノ約半数ハ買付可能ナリ。

(ニ) 六亜支那土人ノ糖蜜

約三百噸乃至四百噸ヲ算スルモ包裝ハ不完全ニシテ品質モ一定セズ、

(ホ) 安南　土人ノ糖蜜
質付可良數量ハ二百噸乃至三百噸ニシテ品質良好ナルモ半液体ナル爲包裝ニ不便ナリ。

(2) 輸出狀況

年次	一九三七	一九三八
仕向國 ＼ 數量金額	數量（單位噸） 金額（單位一、〇〇〇圓）	數量（單位噸） 金額（單位一、〇〇〇圓）
泰國	七二四・〇 一二・六	六五四・六 一・二
新嘉坡	四六・二 一・二	一 一
合計	七七〇・二 一三・八	六五四・六 一七・六

第二章　油料子實及油粕

第一節　植物油

(一) 落花生

(イ) 生產狀況

一九三七年ノ生產額（單位噸）

胡麻　二、五〇〇

落花生　一六、〇〇〇

(ロ) 輸出額（單位噸）

品目	一九三七年	一九三八年
コプラ	一一、一一〇	一〇、四六〇
椰子油	一、一〇〇	一、〇三〇
落花生	三、六一〇	一、〇五二
落花生油(一)	一三一	二、六三〇
胡麻	六四〇	(一) 一〇八
胡麻油	八	(ロ) 三一五
		三五〇
		六九〇

(ロ) 輸出額（單位噸）

品目	一九三七年	一九三八年
胡麻	二、四〇〇	一、〇〇〇
コプラ	二七、〇〇〇	一〇、〇〇〇
ゐぼツの種子	三、〇〇〇	一、〇〇〇
落花生	一六、〇〇〇	一〇、〇〇〇
椰子實	五、五〇〇	二、〇〇〇
油桐	五、五〇〇	(推定) 二、〇〇〇
ゴム種子	五、〇〇〇	(推定) 二、〇〇〇

棉	実	三〇
椰	実	油
		〇

カポック種子（推定）

（備考）（一）ハ輸入超過ヲ示ス

右ニ見ル如ク油トシテノ輸出ハ蒔麻子ヲ除キテハ見ルベキモノナク蒔麻子ハ大部分ハ欧州大戦前マデハ独本國ニ仕向ケラレ居レリ。

乗料子実ノ輸出ハコプラ、落花生、カポック種子ヲ主トシ佛印貿易ノ性格上佛本國及属領ヲ重要ナル輸出市場トナシ居レリ。

(八)対日輸出見込額

征来対日関係ハ比較的少ク日佛印経済協定ニ依テハココプラ一万瓲ノ供給ヲ致シ居リタル程度ナルモ最近ノ日佛印関係ノ緊密化ト佛本國ノ市場脱落ニヨリ今後ハ相当ノ対日供給ヲ見ルト思ハル。

某邦人商社ノ観測スルトコロニヨレバ	
コプラ	一〇、〇〇〇瓲
落花生	二、五〇〇〃
蒔麻	五〇〇〃
胡麻	五〇〇〃
カポック種子	五〇〇〃

桐	油

一、〇〇〇瓲

他ニ棉実、ゴム種子乾古瓶ノ輸出見込アリ。

(二)生産及取引事情

(イ)主要産地

コプラ	交趾支那、東埔寨、安南
蒔麻	東京
桐油	東京
棉実	安南、交趾支那
落花生	安南
胡麻	東埔寨、安南
カポック	交趾支那
ゴム種子	交趾支那

右ノ中蒔麻、油桐、ゴム種子ハ主トシテ近代的経営ニヨリ行ハルヽモ其他ハ住民ノ農作物ナリ

(三)価格

最近ノ価格

最近ノ相場ハ一瓲当リ左ノ如シ

桐油	三、五〇〇弗
苧麻子	四三六
コプラ	三八五
椰実	一二五

尚現在ハ輸出禁止トメゴトナリ

(四) 在庫量

不詳

第十節 魚油

南洋諸島ニ於ケル水産業ハ極メテ幼稚的ニシテ甚ダ不振ナル為メ魚油ニ就テモ殆ンド見ルベキモノ無ク漸ク製塩業ニテモ発展来ラントカ多少採油サレルニ到ルベク、現在ニテハ僅ニ衛領印度支那ノ来塘素ノ太湖(トンレサプ)ヲ中心トシテ捕獲サレル淡水魚(チマズ科ノ一種)ヨリ搾油サレル魚油ノミナリ

(一) 需給状況

(イ) 最近ノ生産額、消費額、対本邦及主要貿易先別輸出額

最近ノ生産額ハ四一五、〇〇〇瓲程度ナルベシ、

支那商人ニヨリテ買付ケラレタル魚油ハコチノシペンレ、「シヨロン」地方ニ送荷セラレ石鹸原料トシテ消費シ他ノ一部分ハ西貢ヨリマルセイユニ輸出サレ機械油トシテ使用サル、其数量ハ次ノ如シ、

輸出数量

年次	数量(瓲)
一九三七年	二、九〇〇
一九三六年	一、八二〇
一九三五年	四二八
一九三四年	二三四

(四) 在庫量

(イ) 現在ノ在庫量及輸出可能額

前表ニヨリ一九三六年一、八二〇瓲、一九三七年二、九〇〇瓲ヲ輸出ス、且搾油時期ハ十一月ヨリ翌年六月ニ至ルヲ以テ本年度搾油セル魚油ハ國内消費分ノ外ハ欧洲大戦ノ推移ヨリ考察シテ全部若クハ其半額ノ九〇〇瓲乃至一、五〇〇瓲ノ貯蔵アルモノト斟察セラル、

(ロ) 所在及最寄輸出港

太湖近郊ニテ棉花、サトウダル黄油ハ支那人ノ手ニヨリテ集荷サレ東海岸ニ鉄道ニヨリテ西貢ニ搬出サレ同港ヨリフランスヘ向輸出セラルルニヨリ西貢ヲ棉花ノ最寄輸出港トナリ、

第三章　繊維原料

第一節　棉花

一、需給状況

(イ)最近ノ年生産量、輸出入量、輸出入超過量及消費推定高（単位一、〇〇〇俵）

年次	生産量	輸入量	輸出量	輸入超過量	消費推定量
一九二九―三三	一三、七	〇、〇	一三、七		
一九三三―三四	三四、九	〇、〇	三四、九		
一九三四―三五	三九、〇	〇、〇	三九、〇		
一九三五―三六	二〇、五	〇、〇	二〇、五		
一九三六―三七	三一、一	〇、一	三一、〇		
一九三七―三八	三六、〇	〇、一	三五、九		
一九三八―三九					

平均　一二、三一　〇、一　二九、二　四五、八

（萬國農事會計ヨリ摘ル）

(ロ)対本邦及主要貿易先別輸出量（単位数量百瓩、価格千法）

	一九三七年			一九三八年			一九三九年		
	数量	価格		数量	価格		数量	価格	
(イ)實綿	七、五五六	一、六五二		三、六八八	四七七		一、〇五一	二二六	
支那	一、二四七	六四九		二七六	一四〇		二〇六	八一	
(内雲南)	一、一〇八	四八七		一七〇	八九		二〇六	八一	
日本	五、六八五	七七三		一、一七三	一八八		四一〇	七〇	
タイ國	二〇二	一八		一、二〇八	一、一七九		三五四	四二四	
(ロ)繰綿	一、三二一	九二三		三〇四	一五六		一、一四五	七〇八	
支那	四一二	一八二		一一八	五八		一、〇四六	六三九	
(内雲南)	五五七	一三九		一〇七	五〇		七三四	四二四	
タイ國	八三五	六八三		一三九	九二		九六	六九	
(ハ)其他	一五五	二二三		一七〇	一七二		一〇六	九四	
支那	二	二		二二	二五		二一	二六	
合計	九、〇三二	二、七九八		三、一六〇	八〇五		二、三〇二	一、〇二八	

(3) 対本邦及主要貿易先別輸入量（単位数量千担、価格千弗）（本統計表ハ農林省総務局企画課編、佛領印度支那農林畜水産業事情ヨリ引用ス）

（「一九三八年各國対外貿易」ニ據ル）

國名	一九三七年 数量	一九三七年 價格	一九三八年 数量	一九三八年 價格	一九三九年 数量	一九三九年 價格
英印	四六、五九八	二一、八〇〇	二一、八六一	一三、八三〇	六二、一一三	四一、六六〇
日本	一五、八九五	八、二九〇	一五、九二七	一三、〇四〇	一八、〇九五	一四、六二〇
ブラジル	七、〇六七	一、一三〇	—	—	一八、六六七	一五、七〇〇
米國	一三、一一一	九、〇六〇	五七、六四二	四五、五三〇	三、一八〇	三、二八〇
其他	三、〇三九	一二、七二八	七、八七〇	六、六六四	三七、三〇五	二七、八六六
合計	八五、七一〇	五三、〇〇八	一〇三、三〇〇	七九、〇六四	一三九、三六〇	一〇三、一二六

本表ニ依レバ日本ヨリ綿花ヲ輸入シテ井ルコトニナルガ之ハ東京州ノ紡績工場ガ原綿ヲ米国ヨリ輸入スルニ際シ横浜ニテ積換ヲスル為ナリ。

佛印産綿ハ其一部ヲ領内デ消費シ、大半ハ支那、日本、タイ國ヘ輸出スルモ、其反面之ニ数十倍スル多量ノ綿花ヲ英印、ブラジル、米國其他ヨリ輸入シ居ル状態ナリ。

(4) 綿織物類輸入高（単位千法）

品名	一九三七年	一九三八年
普通綿織物	一九一、四三九	二二六、二五二
(イ) 粗布	二六、一九二	四七、四四七
(ロ) 晒布	八八、三四〇	八一、六九三
(ハ) 漂白綸布	二二四	二四一
(ニ) 繃帯用布	二五四	一、二八〇
(ホ) 染色布	六五、六〇三	八一、五一六
(ヘ) 綸染布	四、四三五	七、六六〇
(ト) 捺染布	六、三九一	六、四一五
特殊綿織物	四、〇二二	三、〇〇六
綿毛布	二七四	六八四
綿メリヤス	一、一三八	一、三九七
漁綱	二、五九一	三、二一九
綿綸	二二、四四五	三八、〇六八
計	二二一、九〇九	二七二、六二六

（「一九三八年各國対外貿易」ニ據ル）

佛印ノ綿綸布紡績ニ於テハ優レタ機械設備ヲ有スルニ、三ノ工場アルモ未ダ家内工業ノ域ヲ脱セズ綿製品ノ大部分ハ外國主トシテ佛本國ヨリ輸入シ居ル状態ナリ。

二、生産及取引事情

(1) 作付面積及生産高

最近七ケ年間ニ於ケル州別作付面積及生産高ハ次ノ如シ（単位 面積ヘクタール 産額 瓲）（農林省総務局企画課編佛領印度支那農林畜水産業事情ヨリ引用ス）

年次	安南 面積	安南 産額	東埔寨 面積	東埔寨 産額	交趾支那 面積	交趾支那 産額	老撾 面積	老撾 産額	東京 面積	東京 産額	合計 面積	合計 産額
一九三〇—三一	九、一六〇	一、一〇〇	六、八四二	不詳	六〇〇	五〇	一、五〇〇	九五	一、四六五	一五三	一九、五六七	—
一九三一—三二	八、〇〇〇	五〇〇	五、九三三	五三四	—	—	一、〇〇〇	五〇	九九七	一〇〇	一五、九三〇	一、一八四
一九三二—三三	八、〇〇〇	七〇〇	五、〇五七	五〇〇	一〇〇	七	三、二〇〇	一六二	七九七	八〇	一七、一五四	一、四四九

一九三四―三五	七、六〇〇	六、五〇〇	五、〇〇〇	五〇〇	一八〇	二	一、四〇〇	七五	一、六七三	一〇〇	一四、七五三	一、三二七
一九三五―三六	六、五〇〇	六〇〇	五、〇〇〇	四〇〇	八〇	〇	不詳	不詳	七一〇	一〇〇	一三、三五〇	一、一〇〇
一九三六―三七	五、〇〇〇	七〇〇	五、〇〇〇	五〇〇	一一〇	一〇	〃	〃	七三二	一〇、八四七	一、二八〇	
一九三七―三八	五、〇〇〇	六〇〇	三、〇〇〇	五〇〇	九五	一〇	〃	〃	六八〇	七〇	八、七七五	一、一八〇

備考、(1) 一九三五―三六年ノ計ハ老樹ヲ除ク。

右表ノ如ク佛印ニ於テハ何レノ地方モ棉花栽培ハ可能デアリ、且ツ耕地大ニシテ適當ナル等環境條件良好ニシテ、然モ住民生活ノ必需品ナルヲ以テ國内需要ノ衆棉ハ領内ニ於テ生産セラルベキニモ拘ラズ其ノ栽培ハ発達セズ、年々多額ノ衆棉、綿製品ノ輸入ヲ見ツヽアルハ、從来佛國ガ本國ノ綿業保護ノ爲ニ植民地ノ棉花栽培及紡績業ノ勃興ヲ阻止セル政策ヲ取リタル関係ニ起因スルコトハ勿論ナルモ、又棉花栽培ガ他作物特ニ玉蜀黍、煙草、落花生ニ比シテ勞力ヲ多ク要シ、豊凶ノ差甚シク、且ツ利益ノ尠キコト及生産者ト工場トノ間ニ介在スル中間業者ニ依リ生産ノ利益ガ甚ダシク害セラルヽコト等ガ発達セザル主因ナラン。

(2) 主要産地及品種

棉ノ栽培面積ハ安南ヲ第一トシ之ニ次ゲハ東埔寨ナルモ、棉ノ栽培ニ最モ適スルハ東埔寨デ其内主要棉作地ハ「クラテイエ」、「コムポンチャム」、「カンガール」、「タケオ」等之ニ次ゲリ。

(2) 主要産地及品種

棉ノ栽培面積ハ安南ヲ第一トシ之ニ次ゲハ東埔寨ナルモ、棉ノ栽培ニ最モ適スルハ東埔寨デ其内主要棉作地ハ「クラテイエ」、「コムポンチャム」、「カンガール」、「タケオ」等之ニ次ゲリ。

而シテ東埔寨ニ於ケル適地域ハ南シヤムカル地方(「プノムペン」ノ隣接南方ヨリ「湄公」河ト其ノ支流トニ挟マルヽデルタ)ヨリ北「コムポンチャム」ヲ経テ「クラテイエ」ニ至ル湄公本流ノ沿岸及紅土地帯ニシテ気候・土壌ガ特ニ好適セリト言ハレ居レリ。

安南ニテハ東京ト接壌セル「タンホア」其ノ主タル栽培地ニシテ、南安南ニテハ「ビンデインヽ」、「ビンチュアン」等ナリ。

交趾支那ノ棉作ハ「バリア」地方及「バトリ」地方ノ極少面積ニ限定セラレ、「バリア」地方ハ森林地帯ニ接スル佃地ニシテ一帯ニ赤土ナリ。「ウセンモツク」ヲ中心トセリ。

東京ノ主要棉作地ハ「ナムダン」、「ニンビン」、「タイビン」等ニシテ其山間地方ニ栽培セラルヽモ特筆スベキモノナシ。

老樹ハ土人ノ自家消費ノ栽培カ主ナリ。

栽培ニ供用スル土地ハ地方ニ依リ異リ、安南北部地方ハ丘陵地ノ麓ノ畑地、及平野ニシテ、比較的高位ノ水田ニ於テ水稲ノ後作トシテ栽培セリ。安南南部ハ單作或ハ玉蜀黍及豆類トノ間作トセリ。

東京山岳地方ニテハ普通ノ畦畑(Bay)ニ・南部及「タンホア」地方ニテハ軟壌セル水田ニ栽培シ、交趾支那ニ於テハ極メテ稀ニシテ多クハ綠豆、小豆、落花生又ハ玉蜀黍ノ間作トセリ。東埔寨ニテハ畑地ニ栽培セリ。

佛印ニ於ケル棉ノ種類ハ北部安南地方ハ南部安南地方、交趾支那、東埔寨ト全ク異リ、アジア種(記錄ニハ *Gossypium herbaceum* *Arboreum* ノ二種ヲルモ *Grossypium*

ヒトス—Dotchinson ノ分類ニ従フ）ニ属シ、支那、満洲、朝鮮、日本ニ栽培サレツヽアル在来種ト全ク同一種ニ属スル品種ト認メラル。アジア棉ノ分布ハ「タンホア」ノ南方「ビン」地方ヨリ以北ニシテ隣接東京南部（ビンデン地方）モ亦該種ナリ。恐ラク老撾及東京東北部、支那國境ニ近キ地方モアジア棉ニ属スベシ。柬埔寨ニ於テハ(1) Krabos Bay 陸地棉、（Gossypium Hirsutum）(2) Krabas Tes（Gossypium Acuminatum Roxbg）(3) Krabos Samre（Gossypium arboreum × G. indicum ノ交配種ナリト称スルモ Gossypium herbaceum（M. Vigner）ト云フアジア棉）(4) Krabos Sampau（種名不明）栽培サル

(3) 收穫並ニ出廻時期

棉ノ栽培ハ安南北部地方ニテハ十月稲收穫後十二月—一月ニ播種（中ニハ二月ニ入リテ播種セルモノアリ）五—六月ニ收穫セリ。南部地方ハ単作ト間作トアリ、何レモ稲ノ後作トシテ栽培セラル、モ播種期ハ北部安南ヨリ幾分早キモノヽ如シ。東京地方ハ二月ニ播種、七月ニ收穫シ跡地ニハ十月稲作セリ。柬埔寨地方デハ十月—十一月減水ヲ待チテ播種スルヲ以テ年ニ依リ早晩アリ、非浸水地ハ九月（尚雨期）ニ播種シ收穫開始ハ三月中ナリ、普通四月中ニ終ルモ播種期ノ関係ニ依リ遅延スルコトアリ。交趾支那ニ於テハ十月ノ雨期中ニ播種スルヲ通例トスルモ降雨サキ時ハ十一月中ニ行ヘリ。

收穫量、—北安南ニ於ケル従来ノ記録ニ表レタル反当実棉收量ハ次ノ如シ

（日本棉花栽培協会、佛領印度支那ノ棉作ヨリ引用ス）

(1) エンザフ肥料試験ニヨレバ　最高五六斤乃至七六斤
(2) 同　上堆肥使用区ニヨレバ　最高八六斤
(3) 同　—上輪作試験ニヨレバ　最高四五斤
(4) 経済調査記録ニヨレバ　三八斤
(5) 種類記載ニヨレバ　平均三七斤（但シ條件宜シキヲ得バ五〇斤）

柬埔寨ニ於ケル收量ハ次ノ如シ。

(1) 統計ニ表レタル收量　四〇—四五斤
(2) 其ノ他記録ニ表レタル收量　最高　一三〇斤（未土）
三五斤（間作）
三六—五〇斤（赤土）

南部東京農家ニ就キテノ收量ハ反当繰綿四〇斤ナリト言ヘリ。

(4) 経営形態

主ナル生産者ハ大部分ノ柬埔寨土民ト一部分ノ安南土民ニシテ会社経営トスルハ困難ナルモノヽ如シ。

(5) 集荷機構ノ現状

安南北部ニ於テハ支那人比較的少キヲ以テ仲買人ニハ安南人多キモ、タンホア地方ニ於テ

ハ支那人及佛人ノ輸入ニ係リ。東埔寨ニ於テハ支那人、馬来人ガ仲買ヲナシ、特ニ支那人ハ農家ニ対シ融資シ、生産物ヨリ低額ヲ取上ゲ、之等ノ実棉ハプノムペンノ紡績工場ニテ繰綿サレシヨロンニ送ラル。嘗テハ我國ニ輸入サレシモ現在ハ皆無ニ近シ。又ハ佛人ノ手ヲ通ジ國内消費トシテ東京棉花会社ノ独占セル在ナムダン工場ニテ消費サル。

(5) 綿糸及綿布ノ概況

東埔寨産綿ノ大部分ヲ紡績セルプノンペン所在ノ工場以外ニ土人工業ハ各地トモ幼稚ナル方法ヲ以テ栽培者自身ガ行ヘリ。而シテ土人綿布場ハ機械製品ノ増加、或ハ外國産布帛ノ輸入増加等ニヨリ漸次消滅ノ傾向ニアリ、現在代表的会社ハ河内、海防、南定ノ三工場ヲ合併結成セル東京綿花紡績会社（Société Cotonnière du Tonkin）ナリ。本会社ハ東京ニ於ケル綿糸綿布ノ販売等ノ外綿紡績ニ関スル總テノ事業ヲ営メリ。而シテ主要工場ハ南定ノ工場ニシテ規模一。萬錘ト推定セラレ、東京、及北部安南産棉花ノミニテハ原料不足ナル為莫大ナル東埔寨棉ヲ購入スル外米國及印度産棉ヲモ輸入セル現状ニアリ。

東京ニハ前本会社ノ外ニ河内、海防、南定等ニ工場ヲ有スル会社ヲ数ヘ得レドモ、交趾支那ニハ紡績工場少ク西貢紡績会社（Société Cotonnière du Saigon）ガ西貢ニ一工場ヲ有シ機械四百台一萬錘ヲ設備シ居ルノミナリ。

第二節　黄麻

一、需給状況

(1) 最近ノ年生産量、輸出入量、輸出入超過量及消費推定高（単位　瓩）

年次	生産量	輸入量	輸出量	輸入超過量	消費推定量
一九三六―三七	四〇〇、〇〇〇	二六五、四八八	一、二六九	二六四、二一九	六六四、二一九
一九三七―三八	二〇〇、〇〇〇	二一一、二一二	三、八一九	二〇七、三九三	四〇七、三九三
一九三八―三九	―	三〇八、四二五	一、五二四	三〇六、九〇一	―

備考、(1) 輸入セルモノハ全部袋デアル。
(2) 本統計ハ満国農業統計、其他ニ據ル。

現在佛印内ニ於ケル黄麻繊維ノ需要状況ヲ見ルニ領土内ニ黄麻ヲ原料トセル製綯、製布、製袋等ノ工場ハ存在セズシテ唯手工業タルカーペット等ノ経綯等ノ幼麻トシテ僅少ナル需要アルノミナリ。東京地方ニ於ケル三、〇〇〇ヘクター前後ヨリノ収穫物ヲ以テ殆ンド幼麻、粗麻ヲ製シ他州ノ需要ヲモ満シ居ル状態ニシテ特ニ精洗麻トセルハ其ノ極メテ少量ガハンモツク等ニ用ヒラル、以外他ニ需要ナキナリ。

二、生産事情

(1) 作付面積及生産高

最近三ヶ年間ニ於ケル州別作付面積及生産高ハ次ノ如シ（単位　面積ヘクター　産額サンタル）

年次	安南 面積	安南 産額	東埔寨 面積	東埔寨 産額	交趾支那 面積	交趾支那 産額	泰 面積	泰 産額	計 面積	計 産額
一九三八―三九	一	一	一	一	一	一	三五〇	一	三五〇	一
一九三七―三八	二〇〇	二	一	一	一	一	三〇〇	一	三五〇	一
一九三六―三七	一〇〇	一	一	一	一	一	二五〇	一	三五〇	一

備考「満国農業統計」其他ニ拠ル。

従来黄麻ハ各地ニ栽培セラルルモ、其ノ面積及生産額ハ僅少ナリ。

(2) 主要産地及品種

主要栽培地ハ東京、安南ニシテ交趾支那、及東埔寨ハ僅少ナルモ各地ニ於ケル中心栽培地帯ハ次ノ如シ

州名	栽培中心地
安南	タンホア
東埔寨	タケオ、メコン河流域
交趾支那	ミト、シヨードク、メコン河流域
東京	バクニン、タイビン、ナムダン

而シテ其ノ生産ノ殆ンド全部ハ東京地方ニシテ同地方ニ於ケル栽培面積ハ次ノ如シ

（単位 ヘクター）

州名	面積
バクニン	五〇、〇
ハイジヨン	六、三
ハナン	三六、三
フンエン	三七、一
キエンアン	八、一
ナムダン	五六、八
ニンビン	三二、八
タイビン	一二六、八
計	三五四、二

備考、一九三九年台湾総督府外事部調査ニ拠ルト北部地方ニ於テハ二月下旬ー四月ニ播種セバ比較的高温ニシテ適当ナル降雨アリ、発芽ハ良好ナリ。其後気温ハ漸次上昇シ、生育期ノ四月ヨリ五月ニハ急ニ高温トナリ九月迄連続セリ、其間過度ノ降雨アリ所謂高温多湿ニシテ栽培ニ好条件ナリ。

河川流域地帯ハ現在殆ンド玉蜀黍ニ利用セラルルモ、モコノ堤外地ハ黄麻ノ最適地ナリ。コノ地帯ハ毎年七月ー八月氾濫スレドモ二月ー三月ノ早期植付ヲナセバ完全ニ生育シ、充分収穫スルコトヲ得ベシ。又土地ヲ選択セバ十二月前ノ玉蜀黍収穫跡地ニ直チニ播種セバ氾濫期迄ニ大体ノ生育ヲ終レリ。他ノ河川流域ニ於テモ同様ナル適地ヲ見出セリ。

堤内地ハ堤外地ニ次ゲル適地ナリ。コノ地帯ハ十二月ー一月植ノ玉蜀黍収穫後ニテモ黄麻栽培ハ可能ニシテ氾濫ナキ為充分ナル生育ヲナセリ。

低イ新沖積地帯ハ軽鬆ニシテ水分ヲ充分保持セル地帯甚ダ多ク更ニ水田或ハ水田周縁ニ其

ノ適地相当アリコノ地方ハ流域地帯ニ匹敵スル黄麻栽培適地ナリ。

南部地方ハメコン流域ニ於ケル肥沃ナル地帯ヲ有シ、主要栽、綿ヲ主作セルモ気象状態ハ甚ダ不良ニシテ一月―五月ハ高温寡雨ニシテ甚ダシク乾燥セリ。従ツテ黄麻ノ如ク二月―四月ハ乾期ノ播種ハ極メテ困難ナリ。其上農業労力モ不足セル現状ニアルヲ以テ同地ニ於ケル黄麻栽培ハ不適当ナリ。

斯ノ如ク佛印ニ於ケル黄麻栽培ハ南部地方ハ種々困難不利ナル点アルヲ以テ北部地方好適ナリ。

大体収穫ハ七月末ヨリ八月ニ行ヘリ。

収量ニ関シテハ不明ナルモ精洗麻換算ニ八〇瓩程度ナルベシ。

殆ンド全部ヲ粗麻、幼麻トシ綱、紐、緒或ハ手工業ノカーペツト、マツト等ノ経緯トシテ用ヒラル、ノミナリ。

現在栽培セル黄麻ハ *Corchorus Capsularis* 及ビ *Corchorus Olitorius* ナリ。

第三節 カポツク

一、需給状況

(1) 最近ノ年生産量、輸出入量、輸出超過量及消費推定高（単位瓲）

年次	生産量	輸入量	輸出量	消費推定量
一九三六―三七	三、五〇〇	―	二、八四四	六五六
一九三七―三八	四、六〇〇	―	三、六六三	九三七
一九三八―三九	―	―	二、八一六	……

備考 蘭国農業統計其他ニ據ル

(2) 対主要貿易先別輸出量

カポツク（単位 数量瓲 価格千比弗）

仕向地	一九三七年 数量	一九三七年 価格	一九三八年 数量	一九三八年 価格	一九三九年 数量	一九三九年 価格
フランス	一二三・一	五七・〇	八八・二	四三・三	二六二・七	二〇六・九
ルクセンブルグ	一九九・三	九九・一	二九二・四	一七五・九	七四・八	四九・二
英本國	一三五・八	六四四	一一七・一	七九・二	四四〇・四	二八四・七
和蘭	二、〇七九・四	一、〇一三・六	三、八三〇・八	一、六三四・六	一、三四六・七	八七六・一
香港	二六・三	一九・〇	二七・三	九二・九	七・一	二・二
米國	六・二	三・〇	六・二	三・六	五・四	三・五
新嘉坡	二六四・四	一二五・五	二七六・七	一五〇・五	五〇七・八	二九九・六
丁抹	一一・〇	四・三	二四・七	二六・一	一七一・三	一一二・〇
合計	二、八四三・五	一、三八五・九	三、六六三・四	二、一二六・一	三、八一六・四	一、八三四・二

備考、三井物産株式会社調査統計ニ據ル。

	一九三七年		一九三八年	
	数量	價格	数量	價格
カポック（種子）	三一、五〇九	一五、一九二	三七、六八一	二一、八六一
英國	二〇、七七四	一〇、一三六	六、三〇八	一六、三四六
香港	二、六四四	一、二七五	二、七六七	一、五〇五
丁抹	一、三五八	六四四	一、一七一	七九二
佛本國	一、二三一	五七〇	八八二	四三三
白耳義	一、九九三	九九一	二、七二四	一、六四三

備考、各國対外貿易統計ニ據ル

一九四〇年以降ノ統計発表ナキモ戰爭勃発後欧州向積出激減シ、上海、香港向増加セル模様ナルモ全体トシテ見レバ輸出量若減セルガ如シ。

二、生産事情

(1) 作付面積及生産高

最近二ヶ年間ニ於ケル州別作付面積及生産高ハ次ノ如シ

（單位 面積ヘクタール 産額千キンタル）

年次	安南		東埔寨		交趾支那		東京		計	
	面積	産額	面積	産額	面積	産額	面積	産額	面積	産額
一九三六—三七	八〇	—	四、二〇〇	二五	一、七〇〇	一〇	—	—	五、九八〇	三五
一九三七—三八	—	—	四、二〇〇	三〇	一、二四五	一六	—	—	五、四四五	四六

備考、萬国農業統計ニ據ル。

外之六。

佛印ニ於ケルカポックノ作付面積ハ五千—六千ヘクタールニシテ生産量ハ四万六千擔内外ナリ。

(2) 主要産地

主要栽培地ハ東埔寨、交趾支那ニシテ安南之ニ次グモ前地ニ比シ少ク、東京、老撾地方ニハ殆ンドナシ。東埔寨ニ於ケル主要産地ハプノンペン市及太湖一帯ノメコン河トトレンサツプ、バサツク河トニ狭マレタル地帯ニシテ栽培者ハ土人、支那人及少数ノ佛人ナリ。

(3) 集荷機構ノ現状

土人、支那人及佛人採集ノカポツクヲ支那商買集メ、之ヲ佛人商社ハ買取ノ上輸出向ニ雑物ヲ除去シ、左記二種ノ標準規格トナセリ。之ヲ輸出商ガ買付ノ上仕向地ヘ積出セリ。

(1) 普通品 — Impurity & Seeds 5% maximum

(2) 特製品 — pure kapok（種子、雑物ナシ）

(4) 主要輸出港　西貢港

第四節　其他ノ繊維原料

佛印ニ於ケル其他ノ繊維原料ノ生産ハ微々タルモ主ナルモノハ苧麻ニシテ需給状況ハ次ノ如シ

（單位 数量 瓩 産額 一、〇〇〇フラン）

年次	輸出				輸入			
	数量	價格	数量	價格	数量	價格	数量	價格
一九三七年	一九七	九八、六〇〇	六八	五、二四五	三一四、六〇〇	一〇四八、五	三一四、四〇三	九八〇、五
一九三八年	一一二	一〇、三〇〇	七三	一、一〇〇	三〇八、二	一〇四、一七八	二三五、二	
一九三九年	三、四四一		五、二四五					

備考、錫鉄東亜経済調査局「備領印度支那篇」ヨリ引用依成ス

主要栽培地ハ老撾地方ニシテ土人ニヨリ栽培セラル

第四章 飼料

(イ) 概説

佛印ハ牛ノ家畜家禽ニ対スル飼料事情ニ就テハ既ニ述ベタル如クデ政メテ繰返ス必要モ無カラウト考ヘラル、カラ此所ニハ主要飼料資源ニ就キ其ノ対外飼料供給状況、特ニ本邦飼料需給調整ニ及ボス重要性ニ関シ検討ヲ加ヘル。

牧テ本邦政府ニ於テハ、今次事変ノ初期ニ既ニ飼料配給統制法ヲ公布シ、政府ノ厳重ナル監督ノ下ニ飼料配給株式会社ヲシテ重要飼料ノ配給統制ヲ行ハシメ需給ノ調整ヲ図リ来レリ・然ルニ事変ガ長期ニ亘ルニ伴ツテ國際貸借改善上飼料ノ第三國輸入ヲ更ニ一段ト圧縮セネバナラナクナリ、之ト同時ニ昭和十四年末以来食糧問題ガ窮窟トナリシ為ト満洲國カラノ輸入ガ思フ様ナラザル為飼料ノ供給ガ極度ニ圧縮セラレ時局下必要欠ク可カラザル畜産資源ノ維持確保ヲ著シク憂慮セシムルモノガアリタリ。一方佛印ニ於テハ従来主ニ蜀黍、

砕米、米糠等ノ飼料資源ヲ大部分欧洲ヘ輸出シ居タルモノナルガ今次欧洲大戦ノ激化ニ伴ヒ、輸出杜塞シ、日本ニ販路ヲ求メザルヲ得ザル事情トナリ・玉蜀黍等ニ就テハ既ニ昭和十四年以来急激ニ対日輸出ノ増加ヲ見居ル状勢ナリ。

先般日佛印通商協定ガ最恵國的関係ニ於テ結バレタル今日一刻モ早ク玉蜀黍ハ勿論砕米米糠或ハ量ハ少キモ「コプラ」粕等ノ良質安価ナル飼料資源ヲ輸入シ緊迫シタル内地飼料需給ノ緩和ヲ図リ、以テ國策ニ協力スル事ハ緊要ナリト思料スル次第ナリ。

(ロ) 生産状況

(a) 玉蜀黍

米ニ次グ主要穀物デ、副食糧トシテ栽培セラル。(一年三期作デアリ、生産ハ東京地方デハ第一期作(八九月頃)ノモノ、其ノ他デハ第二期作(九月頃)ノモノ最モ多シ。

コカンボチヤノ如キ地方ヲ等頭ニ殆ド全土ニ生産セラレ、年産約六十万噸ト称セラレ漸次増加ノ傾向アリ。

地方別果年生産状況

項目	年次	安南	東埔寨	交趾支那	老撾	東京	計
作付面積(一、〇〇〇ヘクタール)	一九三三年	五五	一〇〇	一八	五一	五八	二八二
	一九三四〃	七五	一二〇	一八	四〇	八〇	三三三
	一九三五〃	七七	一二五	一七			三〇四

	数量（一〇〇〇瓲）	ヘクタール当収量（瓲）
一九三六年	八〇	一三〇
一九三七〃	八〇	一三〇
一九三三年	五八、〇	一七〇、〇
一九三四〃	八〇、〇	一七〇、〇
一九三五〃	六三、七	一九〇、〇
一九三六〃	九〇、〇	二六〇、〇
一九三七〃	八五、〇	四〇〇、〇
一九三三年	一、〇五	一、七〇
一九三四〃	一、〇七	二、五〇
一九三五〃	〇、九〇	二、三二
一九三六〃	一、一二	二、七〇〇
一九三七〃	一、〇六	二、〇〇
一九三三年	〇、八八	一五、八
一九三四〃	一、〇二	一八、〇
一九三五〃	一、一五	二〇、〇
一九三六〃	〇、八五	一九、五
一九三七〃	〇、八二	二七、〇
一九三三年	〇、七八	四〇、〇
一九三四〃	一、〇〇	一〇、二
一九三五〃		八、七
一九三六〃		九、八
一九三七〃		
一九三三年	一、六九	九八、〇
一九三四〃	〇、九四	七五、〇
一九三五〃	一、二一	九七、〇
一九三六〃	〇、九八	八一、四
一九三七〃	一、一八	一〇一、二
一九三三年	一、三五	三八一、八
一九三四〃	一、五四	五一三、〇
一九三五〃	一、五八	四八〇、九
一九三六〃	一、四一	四五九、六
一九三七〃	一、五三	六二三、〇

備考、

一、本表ハ万國農業統計年鑑ニ依ル。

二、一九三八年以降ハ発表ナシ。

(B) コプラ

古々椰子ノ栽培ハ主トシテ、交趾支那、柬埔寨、安南ニ於テ為サレ、一ケ年生産高約一五、〇〇〇、〇〇〇瓲乃至二〇、〇〇〇、〇〇〇瓲ト称セラレ一部ハ國内デ搾油利用セラレ、大部分ハ輸出用ナリシガ将来輸出増加ノ可能性ハ少シ。殊ニ最近鉱物性油輸入杜絶ノ為佛印政府ニ於テハ植物性油ヲ以テ代用スルノ意図ラシク、今後ハ大部分搾油ニ供セラルモノト考ヘラル。全生産量ガ國内デ搾油セラルルモノトスレバコプラオイルレトシテ一ケ年九、〇〇〇、〇〇〇瓲ノ生産トナル。

一九三八年ハ、〇〇〇瓲ノ生産トナル。

(C) 砕米及米糠

米ハ佛印ニ於ケル常食物ナルタメ当然夥シキ数量ノ砕米及米糠ガ生産セラルル。佛印ノ米ノ搗精ハ籾カラ白米迄ノ一貫作業ニシテ今籾一瓲(一六、八掫)カラノ搗精歩留ヲ示セバ左ノ如シ。

白米	八、〇〇掫	
砕米	二、五五〃	
糠	二、〇五〃	
籾殻其ノ他	四、二〇〃	
合計	一六、八〇〃	

右ハ標準歩留ナルモ、精白程度其ノ他各地ノ実状ヲ綜合スレバ、砕米約五十万瓲米糠四

十数万俵ト推算セラレ最モ確保ノ容易ナ而貢附近ニ於ケル生産ハ砕米約十五万俵、米籾約二十二万俵ト考ヘラレ居レリ。

(ハ) 出廻取引事情

何レノ飼料資源モ大体大同小異ナル故、便宜上此所ニハ玉蜀黍ニ就テ、其ノ出廻取引事情ノ概略ヲ述ブ。

平年デアレバ一ケ年間ニ海防ニ約七万俵(最盛期五月)、西貢ニ約三十五万俵(最盛期九、十月、此ノ外第一期収穫ガ五万俵ガ五月頃出廻ル)集散セラルルモノナルガ、何レモ米ノ場合ト全ク同様ノ経路デ集荷セラル。

即チ生産者タル土人カラ乾燥セル玉蜀黍ヲ買集メタ華僑ノ集荷人ハ牛車或ハ手車デ近所ノ川ヘ運搬シ、華僑ノ川問屋ヘ売渡ス。川問屋ハ艀ニ積ミ込ミ網ノ目ノ様ニ発達セル川ヲ縫ツテコメーコンレ河ヘ下リ主トシテ西貢ノ近クノヨロンレノ市場デハ朝十時ヨリ十一時ノ間ニ相場ガ立チ、荷ハコシヨロンレノ華僑ノ大問屋ノ手ニ渡ル。市場ニ出廻ル佛印ノ米及玉蜀黍ノ約九五%ハ艀輸送デアルト云ツテモ過言ニ非ズ。

而シテ此ノ華僑ノ集荷組織ハ極メテ強固ナルモノデ、大問屋、問屋、集荷人間ノ金融関係モ、例ヘバ雑貨其ノ他ノ前貸シヲ行フ等絶対ニ華僑以外ノ他商人ノ容喙ヲ許サザルモノアリ。

(ニ) 輸出状況

(a) 玉蜀黍

統計ニモ明白ナル如ク年々其ノ生産数量ノ約九〇%以上ヲ輸出シ居レリ。之ハ生産統計ノ粗雑ナルコトモアラウガ、何レニシテモ輸出余力ノ非常ニ大ナル國ナルコトハ事実ナリ。

米ノ不作ノ場合ノ云ヘバ救荒作物トシテ最近未、急ニ作付ガ増加シタルモノナル故米ガ豊作デアレバ、別段必要ニ迫カラザルモノニハ非ズ。従来輸出先ハ殆ド佛本國ニシテ日本向輸出ハ殆ド無カリシモ、今次欧洲大戦ノ激化ニ伴ヒ輸出梗塞シ販路ヲ日本ニ求メザルヲ得ザル事情トナレルタメ、急激ニ対日数量ノ増加ガ目立チ居レリ。

仕向先別輸出港別玉蜀黍輸出状況 (単位 俵)

年次 \ 仕向先	佛本國	日本	北亜佛領	佛領民地	英領民地	支那	其他欧州	合計
一九三五年	三〇一、九六五	一〇、一三一	二、三七七	四五〇	五	三〇〇	一	三一九、二二八

輸出港別

輸出港	佛本國	日本	北亜佛領	佛領民地	英領民地	支那	其他欧州	合計
西貢	一九三五年 三〇一、九六五	一〇、一三一	二、三七七	四五〇	五	三〇〇	一	三一九、二二八

仕向先	年次								
	一九三六年	二九四、〇三七	—	—	二、八四二	—	—	—	一九六、八七九
	一九三七〃	三九三、〇三五	—	—	六、四二六	一四	—	一、八五〇	四〇一、四二五
	一九三八〃	四〇四、八九二	一四、一一一	一四、九四一	五〇	—	—	—	四三三、九九四
	一九三九〃	一六五、九九七	八二、八八三	—	六一五	—	—	八二、二三六	三三一、七三一
海防	一九三五年	六四、二七七	四、八七七	一七、二一三	—	—	—	二、八〇四	八九、一七一
	一九三六〃	一〇二、四五六	—	八、六七七	—	—	—	—	一五一、一三三
	一九三七〃	一三七、四一〇	—	一、五四一	—	—	—	六一六	一三八、五六七
	一九三八〃	一一三、四六八	一三、〇〇九	—	—	—	—	二九九	一二六、七七六
	一九三九〃	九一、五〇〇	一四、四八〇	—	—	—	—	一	一〇五、九八〇

(b) コプラ

佛印ニ於テハ最近油肥不足ノ折柄國内確保ヲ目的トシテ油脂原料全品目ノ輸出許可制ヲ布キ、「コプラ」モ其ノ範囲ニ入リ居レルモ、事実上ハ輸出禁止同様ナリ。過去ノ輸出実績ヲ記セバ左表ノ如シ。

累年コプラ輸出状況（単位瓲）

年次	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
数量	七、三七〇	五、八二〇	一二、一三〇	一〇、六八〇	一一、一二〇	一〇、四八〇

(C) 砕米及米糠

北部ニ於テハ米ノ不作地ニ米代用トシテ砕米ヲ振当テル為、輸出力ハナキモ南部ハ相当ノ余力有ル見込ナリ。「アルコール」製造原料ニモ相当向ケラレ居レリ。米糠ハ從來大部分ガ主トシテ家畜飼料ニ使用セラレ一部分即チ大体十万瓲ガ海外ニ輸出サレ居タルモノヽ如シ。輸出実績ノ概略ハ左表ノ如シ。

仕向先別砕米、米糠輸出数量（単位瓲）

仕向先	砕米 一九三八年	砕米 一九三九年	米糠 一九三八年	米糠 一九三九年	備考
佛本國	一一〇、八七二	八三、一二〇	四六、〇一五	一八、〇二一	
佛植民地	五二、五二五	五一、〇〇九	五	一一、一三一	
其ノ他欧洲	九、四三八	二五、〇七八	四二、八六六	五三、七四〇	
日本	二五	一二	—	—	
香港	三、三八七	八、一一二	八、五五二	三、五二七	

其他ノ支那	比律賓	海峡植民地	蘭印	其ノ他	合計
四、〇六二	—	二三四	—	二五、九五四	二六〇、四九七
九、四九二	—	四、一六八	—	二九、八九九	二一一、三四〇
—	一六七	四、一八八	—	四、四五九	一〇六、二五二
二〇	—	八、八八六	三四	五、二一一	九九、五七〇

(ホ) 対日供給ノ可能性

(a) 玉蜀黍及砕米

両者共食用ニモ適スル故、北部即チ人口稠密ナル東京地方デハ住民ノ食料トシテ消費サレ、将来輸出余力ハ無キモノト考ヘラルルガ、南部西貢附近ノモノハ非常ニ有望デアリ、従来ノ実績ハ確保シ得ト思ハル。

殊ニ華僑ノ集荷人ハ、自己ノ乾燥場ヲ有セザル為乾燥完成セル玉蜀黍ヲ土人ヨリ買取リ居ル如キ状態ニシテ従ツテ土人ハ乾燥ノ場所ト手間ノ為ニ自ラ其ノ作付ヲ規正サレ居ル如キ有様ニシテ其ノ他此ノ様ナル不合理ヲ除ク事ニ依リ容易ニ増産スル事ガ可能ナリ、特ニ「カンボヂヤ」地方ハ有望ナリ。

(b) 米糠

米糠ハ往々ニシテ輸送ノ途中変質シ又変質セザル迄モ、「リパーゼ」ノ為ニ脂肪ガ分解サレ脂肪酸トナリ所謂酸價高クナリ利用率ガ下ル為此ノ対策ヲ考ヘザルベカラズ。佛印ニ米糠採油工業ヲ起シ、米糠ヲ油ト脱脂糠トニシテ安全ニ運搬スル方法ガ最モ望マシキモノニハ非ザルマト思考サル。

(C) コプラ

現在ノ「コプラ」ノ生産ハ蘭印或ハ「フイリツピン」等ニ比ブレバ、マコトニ微々タルモノナルガ、安南、交趾支那等ノ沿岸ハ古々椰子ノ栽培ニ好適シタル場所多キ故指導宜シキヲ得レバ、将来頗ル有望ナリト云フ事ヲ得

第五章 嗜好品及香料

第一節 茶

(一) 需給状況

(イ) 年産額

茶園面積（単位千ヘクタール）

年次	安南	交趾支那	東京	計
一九三五	…	一	四	…

	生産額（單位 磅）					
年	安南（紅茶）	交趾支那（綠茶）	東京（紅茶）	計		
一九三六						
一九三七						
一九三八						
一九三九						

年	安南（紅茶）	交趾支那（綠茶）	東京（紅茶）	計
一九三五	九、〇〇〇、〇〇〇	二、二四四、〇〇〇	一、八八〇、〇〇〇	一一、一〇四、〇〇〇
一九三六	九、〇〇〇、〇〇〇	二、二四四、〇〇〇	一、七四〇、〇〇〇	一〇、九八四、〇〇〇
一九三七	九、一一五、〇〇〇	二、二八〇、〇〇〇	一、八五〇、〇〇〇	一〇、九八三、〇〇〇
一九三八	・・・・・・	・・・・・・	・・・・・・	・・・・・・
一九三九	・・・・・・	・・・・・・	・・・・・・	・・・・・・

備考 一、萬国農事協会農業統計年鑑（一九三九―四〇）ニ據ル

二、安南ニ於ケル茶園面積ハ臺湾總督殖産局調査「印度支那半島ノ茶業」ニ據レバ約二万「ヘクタール」ナリ

(四) 消費額

生産額及貿易額ヨリ推計スルニ年額約一〇、〇〇〇、〇〇〇磅内外ノ消費ナルベシ

(八) 対本邦輸出入額

本邦ヨリ少量ノ緑茶ヲ輸出スルニ過ギズ

(二) 主要貿易先別輸出入額

最近ニ於ケル仕向先別輸出入額不詳ナルモ一九三三年ニ於ケル統計ヲ示セバ左ノ如シ

輸出額（單位 磅）

仕向地 ＼ 産地	東京	安南	交趾支那	計
佛領印度支那	一八〇	二八六	一〇	四九六
佛領西印度諸島	一八〇	一		一八〇
香港		一		一
英吉利		三		三
アルヂエリヤ		一		一
ニユーカレドニヤ		三		三
マダガスカル		一		一
亜米利加諸國		一		一
其他		一〇		一〇

輸入額（單位 磅）

仕出地	輸入額
支那	二六
香港	五三二
日本	一五九
錫蘭	三
泰	二
其ノ他	一
計	七二四

備考、一、臺灣總督府殖產局調査ニ印度支那半島ノ茶業ヒニ據ル
二、輸出茶ハ殆ドコエステートト產紅茶ナリ
三、輸入茶ハ綠茶系統ニ屬スル暹羅及支那產其ノ過半數ヲ占メ他ハ爪哇及錫蘭產紅茶ナリ
尚萬國農事協會農業統計年鑑（一九三九―四〇）ニ據ル輸出入額ヲ示セバ左ノ如シ
（單位 磅）

年次	輸出額	輸入額
一九三五	一、一六八	六五六
一九三六	一、三〇六	六五五
一九三七	一、九八三	セニ〇
一九三八	一、九七〇	五七六
一九三九	二、四四七	二五一

(三) 生產及取引事情

印度支那ニ於ケル茶園ノ分布ハ極メテ局所的ニシテ其ノ主要產地トシテハ安南中部コントゥム州及ダルラック州東京中部ハトン州及交趾支那ノ諸地方ナリ

出廻時期ハ茶ノ適採時期等ヨリ見テ大体二月乃至十月ナルベシ

佛領印度支那ニ於ケル茶業ハ土人經營ニアリテハ栽培法極メテ幼稚ニシテ多クハ家屋ノ周囲ニ一〇〇―三〇〇本ヲ栽植シ製造法モ極メテ原始的ナルモ佛人ノ進出ニヨリ印度、錫蘭及ビ臺灣等ニ於ケルト同樣ナエステートレノ組織ト設備トヲ有スル合理的經營行ハレ相當良質ノ紅茶ヲ生產スルニ至レリ。之等ノエステートハ主トシテ安南地方ニ設立

レ何レモ佛人ノ經營ニ係ル。一九三四年ニ於ケル「エステート」ハ大箇所ニシテ二〇「ヘクタール」ノ面積ヲ有ス。各「エステート」ニ於テハ歐洲人技師一名ヲ置キ農場及工場ヲ監督セシメ助手トシテ名農場及工場ニ安南人多數ヲ使用シ栽培及製造ニ從事スル苦力ヲ指揮セシム。製茶ハ殆ド紅茶ニシテ綠茶モ製造セラルルモ一部土人ノ消費ニ當ラシメ輸出ハ僅ニ佛印ニ於ケル茶業ハ土地所有權ノ關係上不可能ナル現狀ニアリ國內消費茶ノ集荷機構ハ不詳ナルモ各「エステート」ノ工場ニ於テ再製セラレタル茶ニシテ輸出セラルルモノニアリテハ工場ヨリ直接輸出業者ニ賣却セラル。尚輸入茶ハ殆ド

(三) 價格

不詳

(四) 在庫量

不詳

第二節 珈琲

(一) 需給狀況

(イ) 年產額

資料 滿國農事協會農業統計年鑑(一九三九—四〇)

(ロ) 輸出入額

滿國農事協會農業統計年鑑(一九三九—四〇)ニ據ル輸出入額ヲ示セバ左ノ如シ

(單位 瓲)

年次	栽培面積(千ヘクタール)			生產額(瓲)		
	安南	交趾支那	東京	安南・南	交趾支那	東京
一九三五—三六	五	〇	二	六〇〇	〇	一、四〇〇
一九三六—三七	六	〇	三	一、三〇〇	一〇〇	九〇〇
一九三七—三八	六	〇	三	一、五〇〇	一〇〇	一、〇〇〇
一九三八—三九	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・
一九三九—四〇	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・

年次	輸出額	輸入額
一九三五	九九〇〇	—
一九三六	四四〇〇	—
一九三七	四二〇〇	—
一九三八	四三〇〇	—
一九三九	九〇〇	—

(二) 生産及取引事情其他

ヤ 評

附、「ココ」アル

ココアノ生産及貿易ナキモノト推測セラレ該当事項ナシ

第三節 煙草

(一) 雨蛤状況

(イ) 生産額

(イ) 作付面積（単位 千ヘクタール）

地域名 ＼ 年次	一九三五	一九三六	一九三七
アンナン	三	六	六
カンボヂヤ	七	五	四
コーチンチヤイナ	二	三	三
ラオス	一	一	一
トンキン	一	二	三
計	一四	一七	一七

(ロ) 収穫量（単位 噸）

地域名 ＼ 年次	一九三五	一九三六	一九三七
アンナン	二、五二〇	三、三〇〇	四、三〇〇
カンボヂヤ	七、〇〇〇	五、七〇〇	三、五〇〇
コーチンチヤイナ	二、八〇〇	三、六二〇	二、五八四
ラオス	五〇〇	二七二	—
トンキン	一、一一二	一、四〇一	二、七〇〇
計	一四、〇〇二	一四、二九三	一二、三三四

生産高ノ中六一七割ハ刺戟性強キモノニテ土人向刻煙草ノ原料トナリ刺戟性弱キモノハ紙巻用トナル

(2) 煙草製造額（一九三八年度）

紙巻煙草 三、三一五瓲（三〇億本見当）

葉煙草 二、一三八瓲

紙巻煙草 一、九六二〃

(3) 輸入額（一九三九年度）

葉巻煙草	一二瓲
其他	一六七〃
計	四、二八〇〃

紙巻煙草ノ九割以上ハアルゼリアヨリ輸入サレ其他香港、英國、佛本國之レニ次グ。
葉煙草及其他ノモノハ五割以上アルゼリアヤシテ、香港、支那、佛本国之レニ次グ。
日本ヨリハ従来皆無ナリシモ昭和十六年六月以来、三井物産株式会社ガ葉煙草約五〇〇瓲、紙巻煙草三十六萬本輸出セリ。

(4) 輸出額（同年度）

殆ンドナシ

(ト) 煙草需給状況

(イ) 葉煙草

供給額

國内産	一五、〇〇〇瓲
輸入	二、〇〇〇〃
計	一七、〇〇〇〃

消費額

土人向刻ミ其他	一三、三〇〇瓲
紙巻煙草製造用	三、七〇〇〃
計	一七、〇〇〇〃

(ロ) 製造煙草

紙巻煙草

國内製造額	三、三〇〇瓲（三〇億本）
輸入額	二、〇〇〇〃（一八億本）

葉巻其他高級刻、嗅、噛煙草ノ消費ハ輸入ニヨル輸入額一八〇瓲）

(二) 生産及取引事情

(1) 主要産地

トンキンノデルタ地方、アンナン、コーチンチャイナ、カンボヂヤニ産ス、
トンキン奥地地方及アンナンノ山岳地方ハ高級煙草ノ栽培ニ適スルトセラル。

(2) 煙草製造工場

現在ノ煙草製造会社次ノ如シ。

Manufactures Indochinoise Cigarette

英米系　捲上機　十九台

Societe Indochinoise de Tabac & Bastos

佛蘭西系　捲上機　三一四台

Compagnie Francaise et Annamits des Tabacs

佛蘭西系　捲上機　三一四台

Union Indochinoise des Tabacs
Compagnie Coloniale des Tabacs

佛蘭西系　巻上越

佛蘭西系　巻上越

何レモサイゴン及ビソノ附近ニ所在ス。

此等工場ノ一九三八年度使用葉煙草量左ノ如シ。

土産葉煙草	二、〇六一	瓲
輸入葉煙草	一、五八八	〃
計	三、六四九	〃

(3) 経営形態

土人栽培多ク栽培技術モ劣ル。

交趾支那ノ南部バリア地方及カンボヂヤノコンポンチヤム及カンダル両州ハ優良耕作地トシテ知ラル

(三) 価格

F.O.B. 価格　一瓲ニツキ

剌戟性強キモノ　〇、七〇―一〇、八〇比弗

（土人向刻用）

剌戟性弱キモノ　〇、三五比弗見当

（紙巻用）

備考　一比弗ハ九八銭一二五ナリ。

(四) 在庫量

不詳

第四節　香辛料

(一) 需給状況

(イ) 生産額及輸入額

品目	生産額（瓲）	輸出額（瓲）	備考
胡椒	カンボヂヤ　四、二〇〇 コーチシナヴイナ　三〇〇	四、五八四	生産ハ昭和十三―十四年数量、但シ交趾支那ノ生産ハ十二年ノ黒胡椒ナリ。輸出ハ昭和十四年数量ニシテ、黒、白及長胡椒ノ数量ナリ
		二〇八	尚輸入二瓲アリ。
蕃椒			昭和十四年数量ニシテ、其ノ中ニハピメント、及バプリカヲ含ム、尚輸入一瓲アリ。
小荳蔻	三〇〇―四〇〇		Amomum Kreroorh Pierre, Aneppe-red Somm ナリ、又別個ノ統計ニ表レバ蘭印及白荳蔻トシテ昭和十四年ノ輸出額ハ五〇六瓲ナリ。

(2) 仕向國別輸額

	昭和十四年	昭和十四年
(イ) 黒胡椒	四、四二四	三、二九九
内譯 佛本國	一、九五〇	一、六八四
アルゲエリア	二四三	三八二
モロッコ	三一二	三〇七
其他	二二一九	九二六
(ロ) 白胡椒	一、〇九七	一、二八八
内譯 佛本國	九〇九	一、二一三
其他	一八八	七五
(ハ) 荳蔲及白荳蔲	五〇四	五〇六
内譯 香港	四五四	四六七
其他	九〇	三九

545366

(二) 生産及取引事情

(イ) 主要産地

(イ) 胡椒

東埔寨ノカムポ及タケオ州.

交趾支那ノハテエン州、フコタ島

其ノ他アンナン

(ロ) 白荳蔲

東京州ノ北部、東埔寨ノプルサト州老樞ノボロベン高原

(2) 出廻時期

胡椒ハ一年ヲ通ジ收穫シ得ルモ三、四月及八、九月ガ多シ

(3) 経営形態

胡椒ハ海南島出身ノ華僑ガ主トシテ之ガ栽培ヲナス

(三) 價格

不詳

(四) 在庫量

不詳

附大蒜香

(イ) 輸出額 (單位 瓲)

	一九三五	一九三六	一九三七	一九三八	一九三九

大茴香		二六七		六三六		一三六二					
大茴香精油	九七		一〇〇				二一六	二五一	一一一	二二二	

備考 一九三七年ハ推定数字
資料 日下駐尚着「佛印ノ宝庫」

(2) 仕向先

大茴香精油　一九三八
内佛本國　一四五瓲
其他　一〇六

一九三九
一一四瓲
一〇八

佛本國ニテハアブサン酒、アニセット酒ノ如香料ニ消費サル

(3) 主産地

トンキン北部山地ノラオカイ方面ニ産ス

(4) 輸入税

無税

第六章　薬剤原料

第一節　デリス

(1) 産地

サイゴンノ附近ニシテ栽培園ノ周囲多シ、又佛蘭西ノ製薬会社ノ直営農園アルモ大ナラズ

(2) 輸出

輸出能力ハ六〇ー八〇瓲程度ナリ、サイゴン港ヨリ積出ス、

(3) 價格

ロテノーン含有量割合ニ大ニシテロテノーン含有量四%ヲ基準トシテF.O.B.ハ封度当九〇弗ナリ、然シテロテノーン含有量一%増ス毎ニ二弗、五ヲ加算スルコトニナリ居レリ、

(4) 在庫量

サイゴンニ二四、五瓲在庫ノ見込、「バーターム」ナラザレバ輸出セズ、

一平方粁当家畜家禽頭数密度（一九三七年）

地域 / 家畜	馬	牛	水牛	緬羊・山羊	豚	計	家禽
安南	〇、一	四、二	三、三	〇、一	四、一	一一、〇	一
東埔寨	〇、一	六、六	三、三	一	一、九	一一、五	一四、六
交趾支那	〇、三	三、六	四、三	一	一〇、三	一八、五	五〇、一
老撾	〇、〇	〇、八	〇、九	〇、〇	一、四	三、一	五、一
東京	〇、三	一、八	四、一	〇、〇	一二、五	一八、八	一
全佛印	〇、一	三、三	二、六	〇、〇	四、五	一〇、六	※一四、八

「註」 ※印ハ東埔寨、交趾支那、老撾ノ平均

一人当家畜家禽頭数（一九三七年）（家畜頭数ハ一九三七年ノ調査ニ依ル。人口ハ一九三六年ノ調査ニ依ル。）

地域 / 家畜	馬	牛	水牛	緬羊	山羊	豚	計	家禽
安南	〇、〇	〇、一	〇、一	〇、〇	〇、〇	〇、一	〇、二	〇、一
東埔寨	〇、〇	〇、四	〇、一	〇、〇	〇、〇	〇、二	〇、七	〇、三
交趾支那	〇、〇	〇、二	〇、二	〇、〇	〇、〇	〇、三	〇、七	〇、三
老撾	〇、〇	〇、一	〇、一	一	一	〇、一	〇、三	〇、一
東京	〇、〇	〇、〇	〇、一	〇、〇	〇、〇	〇、一	〇、二	〇、一
全佛印	〇、〇	〇、一	〇、一	〇、〇	〇、〇	〇、一	〇、三	※〇、八

「註」 ※印ハ東埔寨、交趾支那、老撾ノ平均

「註」 ※印ハ東埔寨、交趾支那、老撾ノ平均

佛印ニ於ケル家畜分布ハ大別シテ牛族及ビ豚族ニ分タル。

馬族ト羊族ハ僅少ニシテ家禽類ハ相当広範囲ニ分布スルモ農民ノ家禽ニ対スル観念ヲ変更スルニ非レバ之ガ改良ヲ図ルハ困難ナリ。

佛印ノ牛族ハ大体左ノ如ク分類セラル。

ノ水牛 *Les Buffles*

2. 牛 *Les Taurins* { 1. *Le genre Zebu* ゼブ類 / 2. *Le genre Taurus* タウルス類

水牛及ビ牛ハ頭数及ビ領内ノ分布状態ニ於テ相互ニ類似シ豚ハ一般ニ土人ノ食用ニ供セラル、為若ド凡テノ村落ニ於テ飼養セラレ、競走馬ハ東京及ビ交趾支那ニ於テ飼養セラル。

馬（駅載用）ハ主トシテ山岳地帯及ビ安南南部ニ於テ飼養セラル。

緬羊及ビ山羊ハ一般ニ散在的ニシテ緬羊ハ特ニ南部ニ多シ

大部分ノ家畜ハ土人ノ手中ニアリ欧洲人ハ牛ヲ採肥及農耕用トシ羊ヲ食糧目的ノ為飼養スル。

(ホ) 欧洲人ニヨル畜産

欧洲人ニヨル畜産ハ殆ド皆ナコーヒー、茶等ノ農作物ニ厩肥ヲ与ヘルコトノ主眼トシ厩肥ヲ得ル為家畜ハ夜間畜舎ニ収容サレ放牧地モ概シテ畜舎ニ近接ス。

一般ニ佛印ノ欧洲人ハ牧野面積ニ比シ飼養頭数過多ナル為採草地放牧地共ニ不毛化ス

ル傾向アリ。
要之欧洲人ニヨル畜産ハ全クプランテーショント農業ニ結合セルモノトス。
(ロ)、土人ニヨル畜産
土人ニヨル畜産ハ家畜ノ取扱方法ヨリ云ハバ何レモ大同小異ナルモノノ目的ハ多様ナリ。
種牛ハ一年間ヲ通ジ自由ニ牝ト交配セラルルタメ生産ハ不規則的ニシテ、犢ノ多クハ乳ノ不足、牧野ノ乾期ニ於ケル飼料不足ノ為斃死ス。又去勢ハ特ニ方針ニ行ハルル為頗ル優秀ナルモノガ種畜トナラズシテ役牛トシテ使役セラルルヲ常トス。
次ニ各地方ノ特殊事情ニ就テ見ルニ、
イ、東京地方
α 高地(山岳地帯)
高地地方ハ降水量多ク一年ヲ通ジ牧草ニ恵マレ、而モ比較的家畜ノ頭数少ク飼料豊富ナルヲ以テ本地方ノ牛、水牛ハ平地ノモノニ比シ体格大ニシテ肉付亦良好ナリ。
豚ハ主ニ取引盛ナルヲ以テ住民ハ専ラ駄載用ノ牛、馬ヲ飼養ス。
β 中部
コソンコイレ河ノコデルタニ続ク起伏殷カナル地帯ニシテ家畜ハ其ノ数多カラザルモ平原部ヘノ家畜貸出地トシテ発展可能ナリ。

C デルタ地方
本地方ハ米作地帯ニシテ人口稠密(一平方粁四五〇人)ナルタメ狭小ノ土地ト雖モ悉ク耕地化シ、従ツテ飼料ノ入手ハ頗ル困難ニシテ常ニ飼料不足ノ状態ニアリ。
ロ、安南地方
α 海岸地帯
東京コデルタノ状態ト同一ナルモ飼料不足ハ更ニ甚ダシク、雨季ニスラ飼料不足ニシテ乾季ニハ全ク飢饉ノ状態ニ陥ルヲ常トス。南部方面ハ雨量比較的少ク自然的環境ヲ異ニスルヲ以テ地部ノ家畜ト比較セバ体格、生体量、外形共ニ相当ノ差違ヲ示ス。
β 中部地方
安南山脈ノ支脈ノ縦走スル地帯ニシテ森林及ビ荒蕪地多キ為家畜モ僅少ナリ。
C モイ高原
人口稀薄(一平方粁当一〇人)ニシテ家畜ノ飼養ニ適スルモ「モイ」族ガ宗教的祭典ノ犠牲ニ供スル目的ヲ以テ家畜ヲ飼養スルニ過ギズ。
農耕ノ方法モ焼畑式ニテ馴馬少ク、牛、水牛モ土壌中ニ石灰質不足スルタメ発育不良ナリ。
ハ、交趾支那地方
α サイゴン河以東地域

樹木多ク且「ゴム」ノ「プランテーション」多ク從ツテ役畜ハ木材運搬車輛用ノ
牛ヲ主トス。

b メコン、デルタ

育成ハ Luyen Buria 附近及「モイ」族ノ住ム地方ニテ多少行ハル。
野東京、安南ト同一ノ條件ニアルモ主要米作地ナル爲人口ニ比シ土地過少ニシテ
且ツ乾季（約十ケ月）長キ飲料水ノ欠乏甚ダシ

二、柬埔寨地方

畜産ハ大湖附近ノ平野及「メコン」河及「バサック」河沿岸地帯ニ集中セラル。
尚タイ湾沿岸地帯カルダモン群山及象山山脈ノ低地ハ相当ニ重要ナル畜産地帯ヲ
成ス。
「カンボヂヤ」人ハソノ宗教ノ禁ズル所ニ從ヒ家畜ヲ食用ニ供スル事ナク役牛ハ交
趾支那ニ赴キ同地ニテ處分シ、資質良好ナル蕃殖基礎牛ヲ自場ニ残スコトナク需要
ガアレバ役牛トシテ販売ス、ソノ結果
① 誤レル淘汰ガ行ハレ優秀ナル家畜モ去勢サレ体格一般ニ低下ス。
② 種牛ノ缺乏甚ダシク、殆ド皆無ニ歸ス。
③ 牝牛ノ数著シク減少ス。

ホ、老撾地方

老撾ハ宛ラ一國ヲ成シ凡ユル標高、気候條件ヲソノ中ニ有ス。「メコン」河谿谷ト高

原地帯（Hauts Plateaux）ニ分タル

a メコン河谿谷

本地帯ハ一面ニ Dipterocarpiés ノ疎林ニ蔽ハレ毎年燒カル。老撾人ハカヽル、環境
裡ニ米作ニ從事ス。乾季ニハ家畜ハ林中ニ放飼サレ且ツ草生豊富ナル谿谷及ビ牧野
アルヲ以テ飼料ニ不足ナシ。
馬ノ育成ハサホド発達セズ富裕ナ土人ニ限リ之ヲ行フ。
豚ハ到ル處ニ飼育サレ屡々猪ト交配セラル。

b 高原地帯

北部ノ Tran-ninh, Som-ueua 及 Le Common 地方ハ優秀ナル牧畜地帯ニシテ住
民ニヨリ粗放的ニ利用セラル。
南部ノ「ボロフエン」地方ニ於テハ Kha 族（モイ族ノ原種族）ハ、水牛ノミヲ飼養
シ而モ住民ハ頗ル怠惰ナルタメ野性ニ近イ状態ニ放任セラル。

二、種類及資質

(イ) 牛

佛印ニ於ケル牛及水牛ハ農用役畜トシテ特ニ重要ナ地位ヲ占メ居レリ即チ米作地帯ニ
於ケル自作農ハ大体皆水牛又ハ牛ヲ所有ス。
小作農ノ多クハ之ヲ有セザルモ高價ナ賃借料（一般ニ收穫期ニ籾デ支拂ハル）ヲ支拂ヒ

地主ヨリ借入ル。

東京全家畜ノ三分ノ一内外ヲ占ムル東京「デルタ」地帯デハ農家ノ大多数ハ兼業デ牧畜ヲ副ニ所有シ得又トコロカラ数戸共同シテ牛又ハ水牛ヲ購入スルカ借入レルカシ居レリ。

一方欧州人ニ依ルトコーヒー、紅茶等ノプランテーション農業ニ於テモ牛ハ殊ニ及役用家畜トシテ勿論カニク又乾酪ヲ有ス。

此ノ外肉ヲ目的トシテ牛ノ飼育ハアカンボチヤレ地方等ニ於テ専業的ニ相当大規模ニ行ハレオル模様ナルガ目下ノ通牧畜程ノ普及ヲ有セズ、河内、イタリー、西班牙ノ欧洲人ノ多イ都会附近デハ乳牛ノ飼育モ多少行ハレオルモ其ノ数ニ於テハ問題ナラズ。種類上カラ見レバ佛印ノ牛ハ大多数ガ黄牛トシテ都市ニ出廻ル黄牛ノ生体重ハ河内ブレー(Nègre)種モ輸入セラレテ一部ノ土産牛ノ改良ニ用セラル。欧洲系ノ乳用種モ欧洲人ニ依ッテ多少ハ持込マレオル模様ナガ。鹹肉牛トシテ

物ニニ〇〇―二六〇瓩、幽霊物三〇〇―三二〇瓩、牧肉量ハ生体量ニ五〇瓩内外ノモノデ一一ヵ所程度ト云ハレオル故我國ノ改良和種ニ比シ小サク肉量モ少シ。

牛ノ飼養管理ハ地域及飼育目的ニヨッテ異ナル、即チコラオスレノ山岳地帯ノ如キ部分ニ於テハ今尚原種ニヨッテ半遊牧的ニ飼養サレ居リ、又土地広々、人口ノ密度モ薄ク且ツ飼料資源ニ恵マルルトカンボチヤレ地方デハ放牧的ナ飼育多シ。

然シ役用牛ノ大多数ハ人口稠密ナ農耕地帯ニ飼育セラレ飼料供給減退ノ為メ牛ノ数モ少ク飼

料トシテハ野草藁等ノ粗飼料ノミヲ給シ極メテ粗悪ナ飼養管理ヲナシオル為家畜ハ一般ニ営養不良ノモノ多ク伝染病或ハ寄生蟲ノ襲撃ニ対スル裡カラ脆弱ニシルルトコロヨリ短期間ニ更新ヲ必要トスト云ハル。

従来佛印ニ於テハ家畜ノ改良ハ殆ド行ハレザリシモ牛ニ就テモ局部的ニ行ハレタルニ過ぎず。

即チ英領印度ノコゼブレー(Nègre)種ヲヨリ、都会附近ノ乳牛及肉牛ノ改良、Thanh-hoa 地方ニ於ケル土産牛ノ改良等ナリ。

D'Arnaud Darbot 氏ハ佛印ノ牛ノ改良ハ Annam horn 或ハ Hereford 種ニ依ルヲ最適トシテオルモ今尚現在土人ノ飼養シ居ル家畜ハ南圻ノ環境ニ最モ適合シオルコトヲ認メ、外来種ヲ依ル改良ニ当ッテハ其ノ均衡破壊ニ依ル反作用ヲ可及的緩和スル方法ヲ採ラネバナラズトナシ居レリ。

(四) 水牛

佛印ニ於ケル水牛ハ二大米作地タルトメコンレ及東京「デルタ」ニ特ニ稠密ニ飼育セラレ水田耕作ニハ欠ク可カラザル家畜トサル。

山根甚信氏(植物及動物第八巻第九―一二号)ニ依レバ元来家畜水牛ハ英領印度ノ北部ヨリ発祥ノ地トシ一ツハ泰、佛印、馬来群島ノ東洋諸國ニ又一ツハ南欧諸國ニ伝播シタモノナラントス云ハルモ、佛印ノ水牛ハ泰、馬来群島ニ見ラルルモノト大体同型デ南欧諸國ニ於ケルモノニ比シ野生的ナリ。即チ同氏ハ由来南東亜細亜ノ諸民族ハ牧畜民族デハ

ナクシテ耕作民族デアルカラ家畜水牛位猫ノ動物モ亦尊ラ水田ノ耕作使役ニアリト見ラル。從ツテ半野生的管理ノ下ニ特別ノ選擇行ハレザリシタメ、其ノ外貌ハ最モ野生水牛ニ近クシテヲ西亜細亜及南欧羅巴ノ家畜水牛ニ対比スレバ、水牛飼育ノ目的ガ洋ノ東西ニ於テ加何ニ相異スルモノデアリシカヲ知リ得ルナラン。尚水牛ノ南洋渡来ニ就テハ今ジク山板氏ノ論文ヲ引用スレバ四家畜水牛ノ南洋伝播ノ年代ニ就テハ何等確整ナキモ彼ノ第九世紀後半ノ作ト謂ハルル扎哇 Jawa Ajudun 佛蹟ニ家畜水牛ガ刻マレテヰルトコロカラ察シ其ノ年代ハ極メテ古ク、扎哇及「スマトラ」島ニハ西歴紀元ノ当初ヨリ「シンゾーレ」ノ印度カラノ移住ガ屢々行ハレタト云ハルルニヨリ水牛モ亦既ニ此ノ時代ヨリ佛教及米作ニ隨伴シテ馬来諸島ニ移植セラレタルモノト思ハル。

尚水牛ハ蘭印ニ於テハ Karabous（和蘭語）、Karabau（ボルネオ語）、Kebo（扎哇語）等ト呼バレ、比律賓ニテハ Carabao、又台湾ノ一部ノ蕃人間デハ Karabut ト呼バルルガ佛印ニ於テハ「ラオス」語デ Kabu、「カンボヂヤ」語デ Crebey ト称セラル、而シテ之等ノ語源ハ何レモ「バリ」語 Karaabo ニ由来スルモノト云ハル。

南方亜細亜地方ノ水牛ハ前述ノ如ク外貌ニ於テハ南欧地方ノ水牛ニ比シ野生ニ近キモ性質ハ温順且ツ力ハ強大ナル故水田ノ役畜トシテハ好適ナリ・然シ其ノ肉及皮ハ牛ニ比シテ劣リ且ツ野獣疫等ノ伝染病ニ対シテハ牛ヨリモ罹病シ易シト云ハル。

(ハ) 馬

印度支那ノ主ナル馬産地ハ東南ノ海岸即チ「ビンチユアン」カラ北ハ「フユイエン」ニ至ル間ナリ。即チ安南ノ南部ナリ。從ツテ又安南馬トモ称セラル。支那ノ西川馬ト同ジク起原ニ属スト考ヘラル

体高ハ一一六糎デ頭ハ転嬢シテ貴相ヲ呈シ、頸ハ短ク且ツ稍々重シ。胴ハ短ク尻ハ水平ナルカ又ハ若干傾斜シヰル。肢ハ乾燥シテ短シ。蹄ハ小サク硬ク蹄鉄ヲ必要トセズ。産地ニ依ツテ多少体形ニ差アリ。北部ノ「フユイエン」カラ「カンホア」ノ間ニ産スル馬ハ一般ニ頸ガ長クマ、鞍背ヲ呈ス。

南部ニ産スル馬ハ尻ノ傾斜ノ大ナルモノ多シ。コノ種ノモノハ「カンボヂヤ」ニモ飼育セラル。

安南馬ハ悍威アツテ然モ耐久力ニ富ミ強靱ナリ。体ハ幾小ナルニモカヽハラズヨク駆、駄、輓用ニ適ス。農夫ノ使フモノハ多クハ北馬デ六十瓲ノ重量ヲ駄シテ毎日四十粁ヲ運搬シ得ルト云ハル。都市デハ客馬車用ニ用ヒラレ居ルガ四輪ノ幌馬車ニ大人数ヲ乗セテヨク敎唖駝駝スルヲ目撃ス。

(ニ) 豚

佛印ニ於テハ豚ハ最モ重要ナ肉畜ナリ。

其ノ主要飼育地帯ハ東京及交趾支那デ一平方粁当飼育頭数ハ夫々一二、五頭及一〇、三頭デ安南ノ如ク一頭、未満ノ一、四頭ヲ遥ニ凌駕ス、殊ニ東京ハ豚總数ノ半近クヲ有ス。佛シテ之等ノ豚ノ大多数ハ「デルタ」地帯ノ農家ニ飼育セラレ

専業的大経営ニヨル飼育ハ少シ。

即ち農家ニ於テハ、食肉ヲ得ル傍ラ厩肥メ給須トシテモ主要ナル位置ヲ占ム。

佛印ノ豚モ他ノ東洋諸國ニ於ケルト同様其ノ祖先ヲ *Sus Vittatus*（亜細亜野猪）ニ発ス ル土着豚デアルガ支那ニ於テハ近年欧洲ヨリ *Berkshire* 種ヲ輸入シテ土着豚ノ改良ガ図リ居レリ。

佛印ノ豚ハ体色ハ黒色デ生体重ハ大体五〇ー七〇瓩、一頭当ノ肉量其ノ他ハ生体重一〇〇ニ対シ精肉ニ四、下等肉、脂肉等ニ二、皮一ニ、骨ニニ、臓腑等二〇程度ト云ハレ ヰルモ一般ニハ肉量ハ右ノ数字ヨリモ稍々少キニハ非ズヤト思ハル。

尚佛印ノ豚ノ改良ニハ前記 *Berkshire* ノ外 *Poland china*, *Duroc Jersey* 種モ適当ナリ ト云ハル。

(ホ) 緬羊

佛印ニハ在来ノ緬羊ナク現在飼育セラレヰルモノハ凡テ移植セラレタルモノデ、其ノ品種ニ就イテハ詳カナラザルモ地域トシテハ安南カ最モ多シ、最近デハ「カンボチヤ」地方ノ農家デ小規模ニ飼育スルモノモボツボツ出テ来タト云ハルモ全地帯ノ土着民ハ豚ヲ食セズ又自然的環境モ佛印ニ於テハ比較的緬羊飼育ニ適シ斗ル為全地方ノ緬羊飼育ハ今後伸ビテ行クニハ非ズヤト思ハル。

斯ク現在佛印ニ於ケル緬羊ノ飼育ハ極メテ微々タルモノナルガ羊肉及羊毛ノ需要モ漸次増加ノ傾向ニアリ、肉緬羊ハ年ニ数百瓲輸入セラレ居レリ。

B. Durand Duclos 氏ノ一九三九年二月ノ調査報告（*Bulletin économique de l'Indochine* 一九四〇 P.S.C. 2.211-258 頁）ニ依レバ佛印ハ一般ニ湿気多ク緬羊飼育ニハ好適トハ云ヒ得ザルモ地域的ニハ南部安南、*Tran-Ninh* 高原、東京ノ一部地方其ノ他 *Loi-chau*, *Kontum*, *Darlac*, *Berbes*, 高原ノ如キ適地アリ、適種ヲ選シテ蕃殖セシムレバ将来其発展モ期待シ得ル。即チ同氏ハ採リ入ル可キ緬羊ノ種類ノ選択ニ当ツテハ *Carnidale*, *Romney Marsh* 等ノ比較的湿地ニ強イ品種ヲ可トシ且毛ヨリモ肉ヲ主トスル品種ヲ選ブヲ可トシ注意トシテハ、次ノ事項ヲ挙ゲ居レリ。

尚飼養管理上ノ注意トシテハ、次ノ事項ヲ挙ゲ居レリ。

イ、湿気高キ地方ハ主トシテ舎飼トシ高地デ乾燥期長キ処ハ主トシテ放牧ニ依ルコト

ロ、寄生虫ノ予防ニ最モ留意スルコト

ハ、寄生虫ノ予防ト草地ノ改良ヲ目的トシテ *Tétraclore* ヲ行フコト

ニ、緬羊ノ栄養ヲ維持シ寄生虫ニ対スル抵抗力ヲ涵養スル為ニ給飼ハ一年ヲ通ジテ整一ニスルコノ為ニハ「エンシレージ」ヲ利用スル等ノ方法ヲ採ルコト

三、畜産物ノ生産及需給

佛印ニ於ケル畜産物ノ生産及需給ニ関シテハ従来行ヒ調査セラレタルモノ無ク、又タト ヘ統計等アリテモ周部的ナモノニ亜ギヌ為、家畜ノ屠殺統計或ヒハ畜産物ノ貿易統計等ニ依ツテ之ヲ推定スルヨリ途ナシ。

(一) 獸皮

主ナルモノハ水牛皮及牛皮デ豚皮モ多少生産セラル。

尚鰐皮其ノ他野獸ノ皮モ年々國外ニ輸出セラレヰルガ之等ニ就テハ此處デハ觸レヌ事トス。

今佛印ニ於ケル家畜ノ屠殺ニ就テ見ルニ次表ニ示ス如ク一九三七年ニ於ケル屠場ノ數ハ安南二八、東京六一デ東埔寨交趾支那及老撾ニ就テハ詳ナラズ

全年ニ之等ノ屠場デ屠殺セラレタル家畜ハ牛八万六千頭、水牛三万六千頭、豬一万九千頭、豚八十九万八千頭デ地域別ニハ東京地方ガ水牛、牛共最多デ豚ニ於テハ交趾支那東京ノ順位ナリ。

然シ此ノ數字ハ佛印ニ於ケル屠畜ノ全部ヲ示スモノデナク是レ以外ニ自家屠殺ガ相當多數有ルモノト思ハル。

之ハ牛皮及水牛皮ノ輸出數量ヨリシテモ容易ニ領カレル処ナリ。即チ一九三九年ニ於ケル之等ノ輸出額ハ水牛皮十四万六千枚、牛皮九万八千六百枚、豚皮五万五千三百枚(各乾塩皮一枚当水牛一〇瓩、牛四、五瓩、豚二、六瓩トシテ換算)ニシテ今假ニ生産額ノ八割ガ輸出セラルルモノト見レバ生産額ハ

水牛皮 一八二、千枚 五

牛皮 一二三、三

豚皮 六九、一

地域別家畜別屠殺頭數及屠場數（一單位千頭）

家畜別 ＼ 地域及年次		安南	東埔寨	交趾支那	老撾	東京	計
水牛	一九三七年	二、二	一	五、〇	〇、三	二八、〇	三五、六
	一九三八年	二、二	一	四、二	〇、四	二八、〇	三〇、五
牛	一九三七年	一七、〇	一一、八	一六、一	一、四	三九、二	八五、五
	一九三八年	一四、六	一一、八	二〇、一	二、〇	三九、二	八九、八
豬	一九三七年	五、〇	一、一	三、九	一	九、二	二一、一
	一九三八年	三、六	一、一	四、三	一	九、二	一九、一
豚	一九三七年	一〇九、〇	一〇九、〇	三八〇、〇	二三、〇	二八七、〇	八九八、〇
	一九三八年	一二、八	一〇九、〇	四七六、〇	二一、〇	二六四、〇	九八四、〇
緬羊	一九三七年	三、二	〇、一	二、九	一	三、〇	六、二
	一九三八年	〇、三	〇、一	二、三	一	三、〇	六、四
山羊	一九三七年	〇、二	〇、二	一、五	一	〇、九	二、九
	一九三八年	〇、二	〇、二	一、六	一	〇、九	二、九
屠場數	一九三七年	二八、〇	一	一	一	六一、〇	一
	一九三八年	一八、〇	一	一	一	六一、〇	一

Annuaire Statistique De L'Indochine 1937－1938

トナル。

右ノ内原皮ノ生産数量ノミハ僧数ニ比シ甚ダ少キハ大多数ノ豚ハ皮共食用ニ供セラレ剝皮セラルルモノハ一少部分ニ過ギザル為ナリ。

然シ乍ラ何レニシテモ佛印ノ家畜僧数ハ其ノ飼育頭数ニ比シテ甚ダ少キモノニシテ人口ノ大多数ヲ占ムル土人ノ文化程度低ク畜産物ノ需要少キコトニモ因ルガ一面ニハ当領ノ家畜ハ畜力及採肥ヲ目的ニ飼養セラレ且ツ家畜自体疎熟ナルコトニ歸因スルトコロ多シ。然シ何ハ兎モアレ東亜共栄圏内ニ、泰、蘭印ニハ及バザル迄モ牛、水牛併セテ約四百万頭ノ皮革資源ヲ有スルコトハ、心強シ。

次テ國内ニ於ケル獣皮ノ加工デアルガ佛印ハ現在工業原料ノ生産國デアルガ工業ノ発達ハ遅々トシタモノデアリ、従ツテ大部分ノ原皮ハ輸出セラレ、革製品ハ之ヲ海外ヨリ輸入セル状態ナリ。

然シ土人又ハ支那人ノ経営ニ依ル小規模ナル製鞣工場ハ國内ニ可ナリ存在シ、又河内、西貢等ノ大都市附近ニハ印度支那鞣皮会社、支那支那鞣皮会社等ノ比較的大規模ナル工場モ存スル。

獣皮ノ主要取引市場ハ西貢及海防デ買付及輸出ハ少数ノ佛蘭西人会社ヲ除キ大部分支那人仲買商ニ依ツテ行ハル。従来佛印産ノ牛皮、水牛皮ノ品質ハ余リ良好トハ認メラレザルモ之等ハ或程度迄剝皮術ノ指導等ニ依ツテ改良シ得ルモノナリ尚土人中安南人ハ製革技術ニ長ジヰルト云ハル。

(二) 肉類

佛印ニ於テ最主要ナル畜肉ハ豚肉ナリ。即チ牛肉ノ消費ハ大体欧洲人、軍隊及比較的文化程度ノ高キ土人ノ間ニ限ラレヰルガ豚肉ハコカンボヂヤ人ヲ除キテハ何レモ好ンデ食スルトコロナリ。尚水牛肉ハ牛肉ニ比シテ味ガ劣等ナル為欧洲人ハ費用ヒザルモ土人ハ食用ニ供ス。

肉類消費ノ中心地ハ都市ナルガ、最近軍隊ノ拡充ニ依ツテ此ノ方面ノ消費ガ著シク増加シ居レリ。又土人ガ軍隊生活中ニ肉食(牛)ヲ覚エルコトモ最近ノ牛肉消費増加ニ影響シヰルト云ハル。

佛印ニ於ケル牛肉、水牛肉、豚肉等ノ生産ニ就テハ獣皮ノ項ニ既述セル屠殺頭数ヨリ推定シ得ルガ一頭当ノ枝肉量ハ大体牛一一〇瓩(生体重二五〇瓩程度ノモノニ於テ)豚四〇瓩(生体重六五瓩程度ノモノニ於テ)ト見ラルルガ水牛ヲ欠テハ詳ナラズ。

現在佛印ノ肉類輸入ハ年(一九三九年)三六〇瓲程アルガ之等ハ主トシテ欧洲人ノ食用ニ供スル罐詰及コハムト類デ生肉及冷凍肉ニ於テハ僅少デハアルガ寧ロ出超ナリ、

次ニ家禽肉ニ就テハ農家ノ自家消費ガ多数ヲ占メヰル為其ノ需給状態ハ不明ナルモ鶏、家鴨等ノ鳥肉ハ國内ノ需要ヲ満ス外、年々國外ニ(輸出セラル。)(数以上ノ如ク畜肉トシテハ佛印ハ大体自給自足デ国外ニ供給スル部分ハ僅少ナルガ生畜トシテハ年々相当多数國外ニ輸出セラレ殊ニ従来馬来半島ニ対シテハ多数ノ肉畜ヲ供給シ居レリ。

、即チ最近三ヶ年ノ生畜ノ輸出入状態ハ次表ニ示ス通リナルガ之等ノ中牛及水牛ニハ役畜トシテノモノモ含マレヰルガ他ハ何レモ肉畜ナリ。

最近三ヶ年ニ於ケル生畜ノ輸出入状況（単位一〇〇瓩）

種類	輸出 一九三九	輸出 一九三八	輸出 一九三七	輸入 一九三九	輸入 一九三八	輸入 一九三七
牛及水牛	三九、〇一〇	九四一六〇	五五、二九三	一七九〇六	二四、一七一	三一二
豚	二、〇二三	一六、五二一	二九、六三五	七八二	六九一	一八八
家禽	五、八七一	五、二六三	五、一三九	―	―	―
緬羊	―	―	―	一、六〇八	八六二	一、九〇三
山羊	―	―	―	一	六	三
計	四六、九〇四	一一五、九四四	八六、〇六七	二二、三七八	二六、五九八	三、四六四

原著 *Statistique Mensuelle Du Commerce Extérieur De L'Indochine. Decem. 1939*

右表ヲ見ルニ一九三九年ニ於ケル牛及水牛、豚ノ輸出ハ共ニ前年及前々年ニ比シテ減少シヰルガ之ハ主トシテ家畜伝染病ノ問題ニ原因ス。即チ従来生畜ハ主トシテ新嘉坡、香港、泰方面ニ仕向ケラレヰタルガ最近牛疫其ノ他ノ家畜伝染病防止ノ見地カラ英領馬来へノ輸出ハ制限セラルルニ至レリ。尚比律賓ハ以前ヨリ其ノ輸入ヲ禁止シ居レリ。

然シ之等ノ輸出不振ニ対処シテ最近西貢ニ輸出豚ニ対スル検疫施設ガ設ケラレタルタメ豚ノ輸出ハ稍々恢復シツツアリト云フ。

尚最近ニ於ケル物産局内及西貢出張所ノ調査ニ依レバ局内及西貢ニ出廻ル生牛（黄牛）ハ毎日大タ五百頭、一千頭内外デ、柬埔寨、老撾、安南産ノモノガ多ク相場ハ肉牛百瓩当二三比弗前後ト云ハル。

又豚ニ就テハ現在西貢ニ出廻ルモノハ主トシテ *Chandoc. Baclieu Tanchau* 方面ノモノデ肉豚ノ相場ハ百瓩当四一―四八比弗ト云ハル。

次ニ佛印ニ於ケル肉加工業ハ現在冷凍肉、罐詰肉等ガ多少製造セラレヰルガ未ダ技術的ニモ初歩デアリ、冷凍肉ニ於テハ「アルゼンチン」物ニ比シテ遥カニ劣ルト云ハル。然シ其ノ生産ハ最近増加ノ趨勢ニアリ僅少デハアルガ肉畜ノ一部ニ代ヘ新嘉坡方面ニ輸出セラレ居レリ。

（三）牛乳及乳製品

英領、熱帯植民地デハ至ル処デ新鮮ナ牛乳ガ得ラルルガ佛領ノ植民地就中佛印ニ於テハ極メテ限定サレタル地域以外ニハ求メル事ハ容易ナラズ。元来安南人ハ牛乳ヲ飲マズ近時佛印ニ於ケル乳製品ノ需要ハ都市ヲ中心トシテ漸次増加シツツアリ。

即チ牛乳、煉粉乳、「バタ」、「チーズ」等ハ殆ド都市在住ノ欧洲人及一部ノ上層階級ノ土人ノ需要ニ限ラレヰタルガ第一次欧洲大戦以後煉乳ハ漸次土人間デモ消費セラル

ル如クナレリ

之等ノ乳及乳製品ノ需要ニ対スル國内ノ生産ハ、先ヅ市乳ニ付テハ都會・河内ノダラト
シ等ノ主要都市附近ニ於テ多少生産セラレテハヰタルガ乳牛モ印度ノゼビクル種ヲ以テ土
産種ヲ改良シタルモノ多キタメ乳量モ少クシテ土人生産ノモノハ其ノ取扱ガ衛生的デ
アルカラ新鮮且衛生的ナ市乳ハ充分ニ得ラレズ。
又「バター」、「チーズ」等ハ政府方面ヨリ多少生産セラレヰルガ殆ド総テ政府方面ヨリ
ノ輸入ニ俟ツ状態ナリ。
斯ク佛印ニ於ケル乳及乳製品ノ需要ハ全部輸入ニ依ツテ充タサレヰル現状ナルガ之等ノ
輸入状況ニ就テハ貿易ノ項ニ於テ詳述スルコトトス。

(四) 鳥卵

佛印ノ家禽ノ飼育並ニ生産物ニ就テハ從來調査セラレタルモノ無キ爲斯カナラザルモ其
ノ生産物モ大体農家ノ自家消費多シト思ハル。交趾支那ハ鶏、家鴨等ノ家禽ノ主要飼育
地帯ナルガ全地方ニ於ケル鳥卵ノ生産ハ一九三七年ニハ四千五百万箇ト計上セラレ居レ
リ。
尚佛印ハ鳥卵ニ於テハ國内ノ需要ヲ満タスノ外年々新嘉坡、其ノ他ニ輸出シヰルガ(下
貿易ノ輸出ノ項参照)、輸出ハ生卵ノ外塩水漬等ノ加工卵モ多少含マル。

(五) 其ノ他

以上ノ他牛及水牛ノ角、骨ノ加工ガ家内工業的ニ行ハレヰルガ、大規模ナモノトシテハ

コタイハアプム(Thoi-Ha-Apm)印度支那刷子製造会社及安南東京工業会社ノ両社ア
リ。

四 貿易

(一) 輸出

最近三ケ年間ニ於ケル動物生産品ノ輸出総計ハ次ノ如シ

品名	数量(一、〇〇〇瓲)			金額(一、〇〇〇法)		
	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
生畜	四九、四〇二	一一五、九四四	八七、三三八	八、五二二	一七、二七八	一四、一五五
牛及水牛	三九、〇一〇	九四、一六〇	五五、三九三	四、三四四	九、二九一	五、六七三
豚	二、〇二三	一六、五二一	二五、六三五	五〇一	四、九〇五	六、五六〇
家禽	五、八七一	五、二六三	五、一三九	二、一五七	一、九六〇	一、九六四
其他ノ生畜	二、四九八	—	一、二七一	一、五二〇	一、一二二	四五八
獣皮類	二一、八七八	二二、七七九	三六、三八七	一二、七七七	一三、六三二	一八、六〇六
牛皮	四、四三九	四、九九四	一〇、三九八	二、七三三	四、二三三	六、七六八
水牛皮	一四、六〇一	一五、四〇三	二一、八四三	七、九六九	八、三六二	九、九二七
豚皮	一、四三四	一、四一八	一、九七三	三二三	三二四	三八四
其他ノ皮革	一、四〇四	九六五	二、一七三	七五二	七一三	一、五二七

雜著

Statistique Mensuelle du commerce Extérieur de l'Indochine

Decem. 1939

	鷄卵	肉類	生肉及冷凍肉	[illegible]	[illegible]	[illegible]	鳥肉	罐詰	獸腸（生及乾燥鹽漬）	動物脂肪	羽毛	豚毛	獸毛（豚毛以外無加工）	毛髮	其他ノ動物生産品	計
	九五、○六九	三、○二四	四九七	三○	二○	二七○	八五四	一、三五三	一六一	一、四七三	八、四九二	七二	一六[illegible]	四三	七、一一三	一八四、八八九
	八○、[illegible]三六	一、八○一	一七四	三五	一	二一	四一二	一、一九八	一○四	一、九○六	五、六七○	—	三六六	五三四	五、○三二	二三四、二一二
	四九、一三一	一、四五七	一九○	一○六	[illegible]五	三○	一二一	九九五	九三	三、二八五	五、九五九	八七	二五六	八八	九、四七九	一九三、五六○
	四○、六二三	二、○五○	二三○	二七	一五	[illegible]三三	六三六	九○九	二五五	七五五	六、二二六	一二六	三一六	二一三	…	七○、五二○
	二六、三二一	一、一一五	七二	一六五	一	二二	二○二	六五三	二○八	七一三	三、七四三	—	四一一	二、七九八	四、五三二	七○、七五一
	一三、三三六	七七七	六四	六○	三	二○	七八	五五二	一九四	一、○八三	四、四八三	三一	二九○	六二	三、七五○	五六、七六七

佛印ニ於ケル生畜及動物生産品ノ輸出状況ヲ見ルト大体ソノ数量ニ於テ二万瓲前後、金額ハ多キ年ハ七千万法、少クモ五、六千万法ナリ。

コノ中最モ重要ナルモノハ生畜、鳥卵、及皮類ナリ。之等三者ノミデ多キ年ニハ総額ノ九割モ占ムル状態ナリ。

次ニ主ナルモノニツイテソノ仕向先別ニ考察ス。最初ニ生畜ニツイテ見レバ

品名	仕向先	生畜類総計	牛 計	牛 泰國	牛 香港	牛 新嘉坡	水牛 計	水牛 香港	水牛 泰國	豚 計	豚 香港	豚 泰國
数量（一○○瓲）	一九三九年	四九、四○二	六、四九九	二、三三九	二、○九九	—	三八、三六一	三二、五○○	一、七○九	二、○二三	一、一四三	七[illegible]○
	一九三八年	一二五、九四四	六、○五一	六一	四三七	三、五五七	八八、一○九	五九、六八一	一六、五五二	一六、五二一	三、○六七	八一九
	一九三七年	八七、三三八	九、四三三	一、六五[illegible]	七七四	六、九一六	四五、八六○	四四、二八七	二、五七三	二五、六三五	三、九五七	一○三
金額（一○○○法）	一九三九年	八、五二二	一五七	三八	三七	—	四、一八七	三、五八七	一六三	五○一	三九四	五六
	一九三八年	一七、二七八	一、二一四	八	五六	五五七	八、○七七	五、六六四	一、七二二	四、九○五	九六四	一七五
	一九三七年	一四、一五五	一、二一九	七○	七三	一、○六一	四、四五四	四、二六九	一八五	六、三六○	一、○四四	一○

ル如クザレリ
之等ノ乳及乳製品ノ需要ニ対スル国内ノ生産ハ、先ヅ市乳ニ付テハ西貢・河内「ダラト」等ノ主要都市附近ニ於テ多少生産セラレテハ居タルガ乳牛モ印度ヨリ輸入セル種ヲ以テ土産種ヲ改良シタルモノ多ク且ツ数量モ少ク且ツ土人ノ生産ノモノハ其ノ取扱ガ非衛生的デアルカラ新鮮且衛生的ナ市乳ハ充分ニ得ラレズ。

又「バター」、「チーズ」等ハ欧洲人ニヨリ多少生産セラレ居ルガ殆ド総テ欧洲方面ヨリノ輸入ニ俟ツ状態ナリ。

斯ク仏印ニ於ケル乳及乳製品ノ需要ハ全部輸入ニ依ツテ充タサレ居ル現状ナルガ之等ノ輸入状況ニ就テハ「貿易」輸入ノ項ニ於テ記述スルコトトス。

(四) 鳥卵

仏印ノ家禽ノ飼育並ニ生産物ニ就テハ従来調査セラレタルモノ無キ為詳カナラザルモ其ノ生産物モ大体農家ノ自家消費多シト思ハル。交趾支那ハ鶏、家鴨等ノ家禽ノ主要飼育地帯ナルガ全地方ニ於ケル鳥卵ノ生産ハ一九三七年ニハ四千五百万箇ト計上セラレ居レリ。

尚仏印ハ鳥卵ニ於テハ国内ノ需要ヲ満タスノ外年々新嘉坡、其ノ他ニ輸出シ居ルガ（「貿易」輸出ノ項参照）、輸出ハ生卵ノ外塩水漬等ノ加工卵モ多少含マル。

(五) 其ノ他

以上ノ他牛及水牛ノ角、骨ノ加工ガ家内工業的ニ行ハレ居ルガ、大規模ナモノトシテハ「タイハアプ」（Thai-ba-AP）印度支那刷子製造会社及安南東京工業会社ノ両社アリ。

四 貿易

(一) 輸出

最近三ヶ年間ニ於ケル動物生産品ノ輸出統計ハ次ノ如シ

品名	数量（一〇〇瓩）一九三九年	一九三八年	一九三七年	金額（一、〇〇〇法）一九三九年	一九三八年	一九三七年
生畜	四九、四〇二	一一五、九四四	八七、三三八	八、五二二	一七、三七八	一四、一五五
牛及水牛	三九、〇一〇	九四、一六〇	五五、三九三	四、三四四	九、二九一	五、六七三
豚	二、〇二三	一六、五二一	二四、九三五	五〇一	四、九〇五	六、三六〇
家禽	五、八七一	五、二六三	五、七三九	二、一五七	一、九六〇	一、六六四
其他ノ生畜	二、四九八	―	一、二七一	一、五二〇	一、一二二	四五八
獣皮類	二一、八七八	二二、七七九	三六、三八七	一一、七七七	一三、六三二	一八、六〇六
牛皮	四、四三九	四、九九四	一〇、五九八	二、七三三	四、二三三	六、七六八
水牛皮	一四、六〇一	一五、四〇五	二一、八四三	七、九六九	八、五六二	九、九二七
豚皮	一、四三四	一、四一八	一、九七三	三二三	三二四	五八四
其他ノ皮革	一、四〇四	九六五	二、一七三	七五〇	七一三	一、五二七

	白耳義	計	香港	計	亞米利加合衆國	香港	泰
	佛本國		其他（獸皮等）				
	一一一	一、七三四	一、四二八	一、四〇四	九〇九	二二九	一三三
	一三七	一、四一八	一、四一〇	九九九	二七九	三〇三	三〇三
	四四	二、九七三	一、八〇〇	二、一七三	五六五	七八〇	七三八
	六二	三二三	二七六	七五二	四三一	一八〇	六八
	八八	三二四	三二二	七一三	一九九	二六六	一八二
	二〇	三八四	三五一	一、五二七	六一〇	三三〇	五〇二

原書 Statistique mensuelle de Commerce Extérieur de L'Indochine Decem 1939

牛皮ハ一九三七年ニハ一、〇三九瓲ノモノガ翌年ハ半量以下ニ減少セリ。之ハ各地向トモ減少シタルガ特ニ香港向ノモノノ激減セル為ナリ。最近ニ於テハ佛本國向香港向ノ両者ガ全体ノ三分ノ二ヲ占メ之ニ次デハ新嘉坡向ノモノナリ。其他ニシリア、広州湾、泰、日本、和蘭ノ各地向ノモノモアルガソノ量ハ極メテ少シ。

次ニ水牛皮ニツイテ見ルト之ハ獣皮中第一位ヲ占メルモノデ、従来ハ数量、金額共英吉利向ノモノガソノ半ヲ占メタルモノナルガ最近デハ漸減ノ傾向ニアリ。之ニ次デ佛本國向、香港向ノモノガアルガ何レモ漸減ノ傾向ヲ示シ、其他ニシリアレ、土耳古、白耳義向ノモノモアルガソノ量ハ三ツニ足ラズ。

豚皮ハ殆ド全部ガ香港ニ向フ状態ナリ。

以上ノ外ノ皮類ハ亜米利加合衆國、香港、泰國デアルガ全体デ一四〇瓲余ナリ。

次ニ佛印ニ於ケル輸出貨物中金額ニ於テ首位ヲ占ムル鳥卵ニツキソノ仕向先別ニ総計ヲ示セバ次表ノ如シ

品名	仕向先	数量（一〇〇瓲）一九三九年	一九三八年	一九三七年	金額（一〇〇〇法）一九三九年	一九三八年	一九三七年
鳥卵	総計	九三、〇六九	八〇、一三六	四九、一三一	四〇、六二三	二六、三二一	一三、三三六
生卵	計	四九、九三一	五四、九四九	四七、一二〇	二二、八九一	一五、九六六	一一、六六五
	新嘉坡	三六、六七七	三七、六八七	三四、九四一	二七、〇四〇	一一、六二五	九、六一九
	香港	一一、四六六	一五、一九二	一、九三七	五、七六九	四、二八六	二、三一三
塩水浸漬	計	三八、二三三	二〇、四五八	—	一一、八五二	五、一三三	—
	新嘉坡	一九、六四一	一〇、八八七	—	六、六八九	七、〇五八	—
	香港	一七、九六三	九、五六三	—	五、一五七	二、〇八一	—
其ノ他	計	四、九〇五	四、七二九	二、〇一一	五、八八〇	五、二二二	一、六七一
	佛蘭西	四、七七四	四、六六六	二、〇〇七	五、六四三	五、一〇五	一、六七一

原書 Statistique mensuelle des Commerce Extérieur de L'Indochine Decem 1939

鳥卵ハソノ大部分ガ生卵トシテ新嘉坡、香港ニ向ケラル。尚一九三八年及一九三九年ニ

登リ塩水漬ノモノノ香港、新嘉坡進出ガ目立チ来レリ。

生肉、塩水漬以外ノモノガ四九〇瓩程アルガ殆ド全部佛蘭西本國向ナリ。之ハ全額ニ比スレバ僅少ナルガ漸増ノ傾向ニアリ。

次ニ肉類ニツイテ見ルニ、肉類ハ輸出品中特ニ重要ナル位置ヲ占ムルトハ云ヘザルモ其ノ中数量的ニ見テ比較的多キ罐詰類ニツキ統計ヲ示セバ次ノ如シ。

品名	仕向先	数量（一〇〇瓩）一九三九年	一九三八年	一九三七年	金額（一〇〇〇法）一九三九年	一九三八年	一九三七年
罐詰類	總計	一三五三	一一九八	九九五	九〇九	六五三	五五二
豚肉関係	計	二四	九八	八	一一八	九六	七
ハム	小計	六	七九	〇	八八	七七	〇
	佛蘭西	一	—	—	一	—	—
	支那	〇	七九	—	三	七七	—
	（内東京）	〇	一	—	三	一	—
其他	小計	一八	一九	八	三〇	一九	七
	支那	一〇	一二	〇	二二	一二	一
	（内安南）	五	一一	〇	四	一一	一
	佛蘭西	〇	一	四	〇	一	四
豚肉以外	計	一三二九	一一〇〇	九八七	七九一	五五七	五四五
	佛蘭西	一、二七四	一、〇七二	六二八	七五七	五四三	二五七
	支那	二八	一	二三七	一九	一	一六
	（内雲南）	一〇	一	一	六	一	一
	広州湾	一	九	二	二	九	四
	香港	一	二	一二〇	一	一	一一一

原著 *Statistique mensuelle du Commerce Extérieur de l'Indochine Decem 1939*

罐詰類ハ最近三ケ年間ニ於テハ数量、金額共ニ漸増ノ傾向ヲ示シ居レリ。之等ハ殆ド全部豚肉以外ノモノデ、仕向先トシテハ佛本國ガ年々増加シ、支那、香港ハ一九三七年ニハ相当量アリシガ夫レ以後ハ云フニ足ラヌ数量ニ減少セリ。

(二) 輸入

最近三ケ年間ニ於ケル生畜並ニ動物生産品ノ輸入統計ヲ示セバ次ノ如シ。

品名	数量（一〇〇瓩）一九三九年	一九三八年	一九三七年	金額（一〇〇〇法）一九三九年	一九三八年	一九三七年
生畜	二二、三七八	二六、五九八	三、四六四	五、四三〇	四、五四三	一、四五〇
牛及水牛	一七、八六三	二三、九〇七	二九四	四、六四三	三、二一〇	三七

羊	一、六〇八	八六三	一、九〇三	九三一	四七二	七七七
山羊	一	六	三	一〇	一五	〇
豚	二、八〇六	一、六二四	六五七	七四二	三二四	一三〇
其他ノ生畜	一〇〇	一九九	六〇七	・	五一二	五〇六
肉類	三、一六三	二、四三八	三、一七六	五、〇三八	四、〇八四	三、九五六
生肉及冷蔵肉	三七五	三八一	四〇八	四〇九	三二五	二九五
塩漬肉(ハム)	七五六	五一六	六四四	一、一四九	一、〇七一	九八六
豚肉腸詰類	二八五	二三七	三〇三	六九七	五三八	六二六
罐詰類	一、六〇〇	一、二〇一	一、七五五	二、五二六	一、九六四	一、九四六
肉エキス	一四七	一〇三	六六	二五七	一八六	一〇三
獣皮類(含未鞣牛皮)	四六四	三六二	一、五一五	一三一	一六二	七三七
羊毛	四二六	四二八	一〇五	六三八	三〇〇	四八
毛髪	一七六	四六〇	五一〇	三六五	三、二六六	一、〇九三
羽毛	一、八二六	一七	一四	七六三	七	五
豚毛	一、〇一〇	一、〇三九	八一六	一、一六六	九二六	九五二
マーガリン及其他食用油脂類	九一二	六七四	五六五	七八一	五一七	三七四
蝋	四六四	二、一二一	九三三	三〇五	七五四	一、〇二〇

鶏卵	一六〇	一五五	二四七	五七	五五	五一
牛乳及乳製品	一〇、一六六	一〇、〇一七	一一、一〇七	一七、三一四	一四、四八一	一一、九八九
滅菌又ハコマフトナイズセル全乳	二、四七八	二、九一一	三、一九二	一、二九〇	一、二六三	一、〇〇九
クリーム(煉詰及煉ラザルモノ)	八六	九五	九八	一五五	一四八	一三一
全乳及脱脂煉粉乳	七九一	六六六	四七六	九一二	七四三	二六五
チーズ	二、三六五	二、六二二	三、〇五八	四、六二五	四、五一二	四、〇三九
バター	四、四四六	三、七二三	四、二八三	一〇、三三二	七、八一五	六、五四五
蜂蜜	一〇四	一六〇	二三八	一一〇	一〇四	一二〇
燕巣	一九	一一	九	三八二	一九一	一四三
其他ノ動物生産品	二、五七七	一、四三七	一、四五五	二、三三三	一、四二九	八二七
計	四三、七九五	四四、九一二	二四、一五四	三四、八一三	三〇、八一六	三二、七六五

原著 *Statistique mensuelle du commerce Extérieur de l'Indochine Decem 1939*

以上ノ結果ヲ見ルニ仏印ニ於ケル生畜並動物生産品ノ輸入量ハ一九三七年ノ三、四一五瓲ヲ除キ他ハ四、四〇〇瓲前後デ価格ハ大体三千万法以上ナリ。一九三七年ハ輸入ハ全般的ニ少キモ特ニ生畜就中牛及水牛ニ於テ少シ。

輸入品中生畜及牛乳、乳製品ガ総量ノ三分ノ二ヲ占メ、而シテ生畜中ニハ牛及水牛ガソ

ノ大部分ヲ、又牛乳、乳製品中ニ於テハ「ケーゼ」及「バター」ガソノ数量ニ於テ半数、金額ニ於テハ其ノ大部分ヲ占メ之等ニ次デハ肉類ガ此ノ中輸出額ガ大多数ヲ占メ。

以上ノ三ノ外ハ量トシテハ特ニ云フニ足ルモノ無シ。

次ニ主要輸入品ニ就キ之ヲ仕入地別ニ見レバ先ヅ生畜ニ就テハ次表ノ如シ。

品名	仕入地	数量（一〇〇頭）		金額（一〇〇〇法）	
		一九三八年	一九三七年	一九三八年	一九三七年
生畜	総計	二二、三七八	三、四大四	四、五四三	一、四五〇
	支那	二〇、一四二	一、〇二五	三、四四二	一七九
	香港	一、三八四	一、八二五	一七九	七八五
	蘇門答剌	六九八	一八〇	一、六七	〇
	佛蘭西	八大	五一	一八九	一八
	新嘉坡	二四	一二六	三七七	三八八
	アルゼリヤ	一	一	三〇	三一
	其他	四四	二一	八	一四九

即チ支那（香港ヲ含ム）カ殆ド全部ヲ占メ其他蘇、新嘉坡ヨリ少量アリ。

次ニ牛乳、乳製品類ニツイテ各品名毎ニ仕入地ヲ示セバ次ノ表ノ如シ。

品名	仕入先	数量（一〇〇瓲）		金額（一〇〇法）	
		一九三八年	一九三七年	一九三八年	一九三七年
牛乳及乳製品類	総計	一〇、一六六	一〇、〇一七	一七、三一四	一四、四八一
滅菌（パストアイゼーション）全乳	計	二、九一一	二、〇九〇	一、二六〇	一、一六六
	ベルギー、ルクセンブルグ経済聯邦	一、五〇一	一、二四四	五六九	五〇一
	瑞西	九五一	四七三	四七三	二四七
	Pay-Bas.	三三四	四四	一一二	一一
クリーム	計	八大	九五	一五五	一四八
全乳及脱脂乳粉末	計	七九一	九八	一五五	一三一
無糖煉乳（全乳）	小計	大五八	大大大	九一二	七四三
	Pays-Bas	三七五	四七大	四七九	四〇二
	ベルギー、ルクセンブルグ経済聯邦	一一二	四七大	一三五	一七八
	佛蘭西	一〇二	一一九	一一七	一一
	布哇	二四	一五四	五四	五四
	西米利加合衆國	一六	一六	七	七
	新嘉坡	一	一	一	一

Reserved Statistique mensuelle du Commerce Extérieur de l'Indochine Decem 1939

支那	バター 計	新鮮バター 小計	新嘉坡	香港	佛蘭西	南阿聯邦	丁抹	其他ノ自由領	ベルギー・ルクセンブルグ経済聯邦	Sondaki & Conserve marinique 小計	印度(Co. fr. de l'I)	佛蘭西	印度(英領)	加塩バター 小計	佛蘭西	泰
—	四、四四六	一、八六七	九〇四	四三六	八〇	二一	一七	一二	二	二二七	一四三	五八	—	二、三五二	二、三三四	一六
一	三、七二三	一、七七八	八九九	四四八	五二	—	六	三六	四	三一六	二三四	五三	六	一、六二九	一、六二三	一
四	四、二八三	一、九〇七	七七二	七一七	六五	二九	三三	—	四	四二二	二七六	二三	〇	一、九五四	一、九四〇	〇
—	一〇、三三二	四、五五四	二、三二〇	一、一三二	一七八	五四	五四	二七	七	三九八	二五四	九一	—	五、三八〇	五、三四三	二九
一	七、八一五	三、六六三	一、七〇七	一、〇一六	一〇〇	—	三〇	八一	一一	五〇七	三四四	一〇九	七	三、六四五	三、六三二	一
一	六、五四五	七、八七四	一六一	一、一〇七	九〇	三五	五九	—	七	四七九	二三六	[illegible]	[illegible]	三、三五二	三、二二八	〇

丁抹	粉乳・塊状濃縮乳(全乳) 小計	佛蘭西	香港	チーズ 計	グロロスチーズ(オランダグリエール) 小計	佛蘭西	Pay-Bas	伊太利	香港	新嘉坡	丁抹	ベルギー・ルクセンブルグ経済聯邦	其他 小計	佛蘭西	香港	Pay-Bas
—	一三二	一〇	二	二、三六五	九一七	六九二	二〇二	六	五	一	—	—	一、四四八	一、四二六	四	三
五	一一五	一	一三	二、六二二	九八〇	七三二	二二五	三	〇	一六	二	一	一、六四二	一、六〇六	〇	一一
—	四〇	八	一〇	三、〇五八	一、一〇九	九〇一	一六五	三	—	六	四	三	一、九四九	一、九二四	三	—
—	四三二	〇	三二	四、六二五	一、六四八	一、六三七	二五〇	一六	七	三	—	—	二、九七七	二、九四〇	七	一
四	三四一	二	四二	四、五一二	一、六三六	一、三〇六	二九八	四	〇	三二	二	二	二、八七六	二、八〇四	〇	一八
—	八七	一五	二六	四、〇三九	一、三五二	一、一二二	一三八	四	—	五	二	四	二、六八七	二、六六六	二	—

新嘉坡	一	四	二	一	一〇	一
印度 (Etb. fr. de l'I.)	〇	一	一	一	一	一

資料 *Statistique mensuelle du Commerce Extérieur de l'Indochine Decem. 1939*

乳製品中數量ニ於テ最モ多キハ「バター」ニテ之ニ次グハ「チーズ」滅菌乳、及「クリーム」ノ順ナリ。之等ノ大部分ハ佛印ニ於ケル歐洲人ノ食用ニ供サルルモノナリ。

滅菌乳等ハ半以上ガ「ベルギー」、「ルクセンブルグ」經濟聯邦ヨリ、ソノ殘リノ大部分ガ新西蘭ヨリ來ル現状ナリ。

煉乳ハ殆ド無糖煉乳デアルガ之ハ半以上ガ Pays-Bas ヨリ、其他ハ「ベルギー」、「ルクセンブルグ」經濟聯邦、佛蘭西等ヨリ輸入セラル。

「チーズ」ハ殆ド總テ佛本國ヨリ、其他ノ地方ハ極メテ少量ナリ

「バター」モ同様半以上ガ佛本國ヨリ輸入セラレ其他ハ新嘉坡、香港地方ヨリ來ルガソノ量ハ少シ。

次ニ蜂蜜ニツイテ同様統計ヲ示セバ次ノ如シ。

品名	仕入先	數量(一〇〇瓩) 一九三九年	一九三八年	一九三七年	金額(一〇〇〇法) 一九三九年	一九三八年	一九三七年
蜂蜜	計	一〇四	一六〇	二三八	一一〇	一〇四	一二〇
	香港	三六	九八	一三七	二九	五八	四九

佛蘭西	二三	一九	二六	四三	四五	二三
亞米利加合衆國	一四	三〇	五九	一九	三五	四一

資料 *Statistique mensuelle du Commerce Extérieur de l'Indochine Decem. 1939*

即チ香港、佛蘭西、亞米利加合衆國ノ順序ナリ。何レニシテモ全体トシテハ漸次減少シ特ニ香港、亞米利加合衆國ヨリ來ルモノニ於テソノ感ヲ深クス。

尚燕巣ハソノ量ハ少キモ主ナル仕入地ハ支那、香港、新嘉坡等極東ノ諸地方ナリ。

次ニ貿易ニ就テ見レバ畜産物ニ關スル限リ佛印ト日本トノ貿易關係ハ金額、數量共極メテ微々タルモノデアルト云フ一言ニ盡ク。今輸出入別ニ最近五ケ年間ノ統計ヲ示セバ次ノ如シ。

(一) 輸出

品名	數量單位	數量 一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	金額(單位圓) 一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
毛皮	一〇〇斤	—	—	—	—	—	—	四三	—	—	—
牛皮及水牛皮	一〇〇斤	五	三六〇	一七〇五	二〇、	三	一三六	一二〇、五五	一二〇、八八	四〇、三五四	—
其他ノ皮類	一〇〇斤	一	四七五	一〇八八	〇	—	五五七	八八三	三、六〇四	八四〇	—
獸角	〃	—	六五〇	—	—	—	—	四八	—	—	—

品名	数量単位	数量 一九三五年	数量 一九三六年	数量 一九三七年	数量 一九三八年	数量 一九三九年	金額 一九三五年	金額 一九三六年	金額 一九三七年	金額 一九三八年	金額 一九三九年
其ノ他ノモノヲ含メテ安石、骨、角、牙類々同製品計							七八三	一六八〇	一七九五	五、四二六	—
対日輸出額総計							三、三一〇、〇〇五	三〇、四〇四、九一七	三三、六二二、八四八	三三、五四〇、六二八	三六、七六一、〇〇〇

右表ニヨリ佛印ノ対日總輸出額ハ一九三五年ヲ例トスレバ年々少クトモ三千万円以上ナルニモカヽワラズソノ中ノ動物性産品ハ多クテ十五万円内外デ一九三九年ノ如キハ全然ナキ状態ナリ。輸出品トシテハ牛皮及水牛皮ガ殆ド全部ヲ占ム。

(二) 輸入

品名	数量単位	数量 一九三五年	数量 一九三六年	数量 一九三七年	数量 一九三八年	数量 一九三九年	金額（単位円） 一九三五年	金額（単位円） 一九三六年	金額（単位円） 一九三七年	金額（単位円） 一九三八年	金額（単位円） 一九三九年
煉乳	一〇〇斤	〇	—	三五	—	—	七	—	二四〇	—	—
獣肉罐詰	一〇〇斤	〇	一	三	—	—	七三	四〇	三二〇	—	—
鶏卵	一〇〇斤	—	〇	—	—	—	—	一〇〇	—	—	—
毛皮（毛）	斤	—	五	—	—	—	—	三一〇	—	—	—
其他ノ皮毛骨牙類							八四	—	—	—	—
靴底革	一〇〇斤	三	—	—	—	—	一五五	—	—	—	—
鞣皮	一〇〇斤	二	二	二	—	—	三一〇	四三三	八五五	—	—
ベルト	一〇〇斤	三	〇	—	三	—	七九九	二〇六	—	二二一	—
其他ノ革製品							二四八六	一三八六	六五〇	三八二四	—
其他ノ皮毛骨牙類製品											
皮毛牙類及同製品計											
膠	一〇〇斤	四三	四四	四六	—	—	一二五六	一七九七	一一七〇	—	—
畜産物計							九三四五	四〇六〇	一一〇四	四九五五	〇
対日輸入額総計							四〇、〇二〇、八八四	四六、八二三、四三五	四六、三三五、〇六八	三六、一六一、六七七	一、九八八、〇〇〇

資料（輸出輸入表共）大蔵省編日本外國貿易年報昭和十一、十三年（上・中巻）
日本外國貿易四半期表昭和十四年第四々半期下篇

輸入ハ輸出ニモ増シテ微々タルモノデ金額ニシテ多キ年デモ一万四千円ニ過ギズ。之モ大部分ハ革製品デ其ノ他ノモノハ量モ少ク年ニヨツテ区々ナリ。

従来佛印ノ対日貿易ハ日本ニトツテハ著シキ片貿易ノ状態ニアリ、畜産物ハ輸出、輸入共ニソノ量僅カナルガコノ僅カナル数量ニ於テモ輸出品トシテハ原料品ガ占メ、輸入品トシテハ完成品ガ占メテヰル事ハ植民地貿易ノ特徴トシテ今後我國ノ対佛印関係ノ緊密化ノ期待サルル折柄、佛印ニ求メル畜産資源ト佛印ヲ市場トスル製品ニ付キ大ナル関心ヲ拂フベキナリ。

五　家畜衛生

熱帯地域ハ其ノ自然的環境カラ伝染病ガ生ジ易ク、殊ニ雨期ニ細雨ノシトシトト降リ続

ク様ナ等ニハ其ノ報告ガナシ。

斯カル自然的條件ヲ講ズル疫発生ノ関係ニ就テハ次亞支那中 Pasteurella 地帯ノガナルモノトサレテオルコトヲ中心トシテノ某領人尊問家ノ調査結果ヲ述ベテ参考ノ一端ニ供シ度シ。

印比ノ [illegible] 地方ハ北緯一〇度東経一〇〇度ノエーヤ四度コメコンデルタニ位シ一年ノ平均温度八二六、九度、月平均最低温度ハ一二月ノ二五、八度最高ハ四月ノ二八、八度デ熱帯ト雨季トハ明確ニ区別セラル。

雨季ハ五月ヨリ十月デ五、六両月ハ概ネ毎日豪雨アルモ永クハ續カズ、七月及八月ハ小時多クル月デハ大豪雨多シ。熱季ハ十一月以降四月一杯デ十一月ヨリ一月ノ間ハ北東貿季東ノ貿易風ガ規則正シク吹キ涼シキモ二月ヨリ四月ニカケテハ温度八三度前後トナリ風ハ不規則トナル。人畜ニ最モ悪イ季節ハ熱季雨季ノ変リ目タル四ー五月ノ頃デ雲ハ低ク風ハ不規則デ変リ易シ、先ヅ野獣疫（Barbone 牛及水牛ノ Pasteurella）ノ発生ナルモ、本症ハ熱帯タルト温帯タルトヲ問ハズ季節的影響、就中暑気ト降雨ノ状態ニ密接ニ関係シ居レリ。

佛印ニ於テハ野獣疫ハ熱季ニモ全國的ニ発生スルモ其ノ発生ハ散発的ナリ。之ニ反シテ雨季ニハ交趾支那、東埔寨、南部安南、老撾ノ低部地方、東京ノデルタ等ノ暴熱ノ低地ニ地方病或ハ流行病ノ形デ蔓延ス、雨季ニアッテモ特ニ五、六、七月頃ハ其ノ猖獗烈シク就中小雨ノ持續スル様ナ年ニハ各所ニ病菌デ汚レタル水溜ガ出来、之ヲ飲ム家畜ハ忽チ

発病ス、然シ九月前後ニ至レバ本症ノ発生ハ急激ニ減少ス

同ジク Pasteurella ニ依ル豚疫及家禽コレラノ発生モ亦季節的影響ヲ受クルトコロ甚ダ多ク、其ニ貿易風ノ変リ目タル三月ヨリ五月及十月ヨリ十二月頃ニ猖獗ヲ極ム即チ此ノ時期ニ於ケル不順ナル気候ハ家畜ノ抵抗力ヲ著シク低下セシメ病気ノ蔓延ヲ助長スル処ナリ。

風土的條件以外ニモ家畜伝染病蔓延ノ原因トナル事項ハ極メテ多シ即チ佛印ニ於テ最モ多数ノ家畜ヲ所有スル土人ノ獣疫ニ対スル智識ノ低度ナルコト、防疫施設及人員ノ充分ナラザルコト、支那及泰國境ヨリノ密輸入家畜並ニ野獣ニ依ル病原伝播等ガ之ナリ。野獣ノ害ハ野牛、羚羊類等ノ草食動物ニ依ル牛疫ノ伝播ニ留マラズ野象、野猪、虎等ハ直接家畜、造作物、飼料等ニ被害ヲ与ヘルコト夥カラズ。

佛印ニ於ケル主ナル家畜伝染病ハ牛疫、野獣疫、豚疫、家禽コレラ等デ炭疽ノ発生モ相当見受ケラル。豚コレラレハ時折両部的ニ流行ヲ見ルコトモアルガ概シテ少シ、其ノ他ノ疫病トシテハ体内寄生虫ニ因ルモノガ相当猖獗シオル模様ナリ。

前伝染病ノ発生状態ヲ地域的ニ見ルト、野獣疫、豚疫、家禽コレラ等 Pasteurella ニ因ル疫病ハ前述ノ如ク交趾支那、東埔寨、南部安南、老撾ノ低部、東京デルタ等ノ高温多湿ノ地帯ニ多ク、牛疫ハ安南、東埔寨地方ニ多シ、炭疽ハ特ニ東京地方ニ多ク一九二〇年以来現在ニ至ル迄佛印全土デ豚丹毒セラレタル七万本ノ免疫ワクチンレ中、三万二千本ハ東京地方デ使用セラル、之ニ次イデハ老撾及東埔寨デ交趾支那ハ極メテ少

シ。交趾支那ノ少キ原因ハ全地帯ノ大部分ガ耐穫菌ヨリ成リ病原菌ノ生存及蕃殖ニハ東京地方ノ如ク好適ナラザル為ナリト云ハレル。

尚地域別ノ伝染病発生状態ニ就テハ概計ハ稍古ク且ツ部分的デハアルガ一九三三年ノ数字ヲ示セバ大体次ノ如シ。

疾病種類		東京		南支那		柬埔寨		老撾	
		発生	斃死	発生	斃死	発生	斃死	発生	斃死
		箇処数	頭数	箇処数	頭数	箇処数	頭数	箇処数	頭数
牛疫（水牛）		一	一	一	一	一	一	一	一
水牛疫（野獣疫）		ナシ	六一	ナシ	三五〇〇	ナシ	三五〇〇	ナシ	三五〇〇
炭疽		一	三二	一	三五〇〇	一	三五〇〇	一	三五〇〇
腫脹（気腫疽）		一	西	一	三	一	三	一	三

「註」※印ハ一九三二―一九三三年、―印ハ不詳ナルモノ。

次ニ獣疫ニ関スル試験研究機関其ノ他ノ施設デアルガ、其ノ主ナルモノハ下ナトラン、河内、西貢ノ「パスツウール」研究所、河内獣疫試験所及河内獣疫学校デ何レモ政府ノ施設ナリ。以上ノ内「ナトラン」ノ「パスツウール」研究所ハ獣疫研究機関トシテ代表的ナルモノデ其ノ人的構成及研究事項ノ概略ヲ述ベレバ次ノ如シ。

即チ其ノ人的構成ハ仏蘭西人獣医三名、佛印人獣医二名、安南人ノ助手八名、其ノ他ノ職員（七人）四四名、人夫其ノ他九四名ヨリ成ル。

而シテ其ノ研究ノ主ナルモノハ牛疫免疫血清及「ワクチン」ニ関スルモノ、野獣疫（*Barbone* ― 牛及水牛、*Baudrillartia*）ノ免疫血清ニ関スルモノ及豚「コレラ」、狂犬病ニ関スルモノナリ。就中佛印ノ家畜伝染病トシテ最重大ナル牛疫ニ就テハ特ニ力ヲ入レ居リ、極ク最近ニ於ケル研究ニハ次ノ如キモノアリ。

佛印ニ於ケル牛疫「ワクチン」使用ニ関スル研究

Lamblinе 包装ニ依ル牛疫「ワクチン」

牛疫免疫血清製造方法ニ関スル研究

尚当研究所ニ於テハ試験研究ヲ行ヲ傍ラ名種家畜伝染病免疫血清及「ワクチン」ヲ製造シテ各地方ニ配布シ其ノ種類及最近ニ於ケル製造数量（一ケ年）ハ次ノ通リナリ。

牛疫免疫ワクチン	五一八、一一二本（一本二〇㏄）
牛疫免疫血清	四三、九二〇本
其他炭疽免疫ワクチン等	

「パスツウール」研究所ノ外河内獣疫研究所ニ於テモ家禽「ペスト」及牛疫ニ関スル試験研究ヲナス傍ラ、牛疫、家禽「コレラ」ノ免疫「ワクチン」及家禽「ペスト」予防液ノ製造ヲナシ居レリ。

此ノ外牛疫「ワクチン」ノ製造ヲナシテ居ルモノニ *Bach-Brai* ノ獣医学研究所。

Thanh-hoa 州衛生区ノ附属機関ガアリ、前者ハ全地方ノ他東京地方ニ対シテモ一部分ヲ配付シテ居リ、後者ノ製品ハ専ラ北部安南地方デ利用セラル。

尚家畜伝染病予防制度ニ対シ仏蘭西ノ一専門家ハ次ノ如キ措置ヲ講ズルヲ可トシ居レリ、即チ

一、乾季ノ終リ雨季ノ初メ等ノ時期ニ於ケル家畜ノ生産ヲ手控フ。

一、東部交趾支那、安南等ノ如ク高地ニ隣接セル平野ニ於テハ雨季酷暑ノ候ニハ家畜ヲ高地ニ移動放牧セシム。

一、予防接種ヲ普及セシム、尚予防接種ノ時期ハ豚及家禽ハ一—二月、其ノ他ノ大家畜ハ三—四月ノ頃ヲ至当トス。

一、霖雨ニ因ル河水ノ氾濫ヨリ家畜ヲ救護シ一般飼養管理方法ヲ改善ス。

以上ノ外薬浴ノ普及ニヨルコダニ等ノ外寄生虫ノ除去、病原菌ヲ伝播スル野獣ヲ家畜ヨリ遠避ケルコト、伝染病ニ罹リ易イ水牛ノ飼育地域ヲ限定スル等ノ措置モ又必要ナリトサル。

尚間接的デハアルガ道路ノ開発整備モ防疫ヲ徹底セシムル上カラ必要ナリ。

第八章 水産物

第一節 漁獲物

(一) 現況

佛領印度支那ハ亜細亜洲ノ東南ニ位スル一大半島ニシテ海岸線ノ延長二千九百六十粁ニ及ビ広大ナル大陸棚ヲ控ヘ且メコン河、フレープルージユ河、タイビン河等ノ諸河川及太湖等アリテ海洋・内水面共ニ魚族共極メテ豊富ニシテ二千万住民ノ副食物トシテ不可欠ノ食糧タリ。

佛印沿岸海面ニ於テ漁獲サル、魚族ハ二五〇種乃至三〇〇種ト称セラレ其ノ主ナル漁獲物ハすゞき、たい、さはら、かます、はぜ、あぢ、ひらめ、かれひ、いわし、さば、かつを、さめ、かぢき、えひ、えび、かき、うみがめ等ニシテ又河川湖沼ニ於テハすゞき、ぼら、こい、うなぎ、うぐい、はぜ、なまず、雷頭魚等漁獲セラル。

(ハ) 魚族等ノ分布状態

イ、東京湾ニ於ケル主要水族

土名	佛名	和名	漁期	摘要
Cá chay (Cá thu)（カ チャイ 或ハ カ ツー）	Maquereau	さば	九月	多シ
Cá moi（カ モイ）		このしろ	九月—十月	多シ
Cá hom（カ ホム）	Pagre	たい	十一月—翌年三月	多シ

一フ	Bonite	かつを	十一月—翌年一月	多シ
Cá chay (カ チャイ)	Brochet	こち	十月—翌年三月	多シ
カトツー		さわら	十一月—翌年四月	多シ
Cá duoi (カ ズイ)	Pastenague	あかえひ	五月—八月	多シ
Cá map (カ マップ)	Requin	ふか	二月—三月	普通
		ぼら	二月—三月	普通
Con tom (コン トム)	Langouste	えび	十一月—翌年二月	多シ
Con cua (コン クア)	Crabe	かに	五月—八月	多シ
Cá muc (カ モク)	Seche	いか	三月—八月	多シ
Cá Song (カ ソン)	Poisson Vieille	あら	四月—九月	多シ
Ca Lam (カ ラム)	Sardine	いわし	十二月	少シ
Cá lon bon (カ ロン ボン)	Sole	うしのした	周年	普通
Mai mai (マイ マイ)	Poulpe	たこ	周年	少シ

以上ノ外、貝類ハはまぐり最モ普通ニシテ殻長四寸ニ達ス、又灰貝、しじみ介等一般ニ成長良好ニシテ又真珠貝ノ産アリ殊ニ安南沿岸「ユエ」附近ニハ黒蝶貝ヲ産ス。北海沿岸、欽州藩門附近ハ有名ナル天然牡蛎ノ産地ニシテ「ナイチンゲール」島ニハ鮑ヲ産ス

藻類ハ他ノ南洋諸島ニ比スレバヨク繁茂シほんだわら類最モ多クあをのり、あをさ、おごのり等普通ナリ、北海近海ニハおごのりノ種類ニテ支那人ニ海菜ト称ヘラレ漂白、製品トシテふのりノ代用トスルモノアリ

ロ、安南沿岸ニ於ケル主要水族

たひ、まぐろ、かつを、さめ、えび、かに類

ハ、交趾支那ニ於ケル主要水族

まぐろ、さわら、えび、かに類、うみがめ等

ニ、「タイ」湾ニ於ケル主要水族（東埔寨沿岸）

「アプラトール」さっぱ、ぐち、ぼら、さわら、まながつを、かます、たひ、さめ、えひ、くろだい、あぢ、いわし、えび、あみ、いかひ、かき、はまがひ等

ホ、仏領印度支那ニ於ケル淡水性主要水族

Notopteridae 科

Chupeidae　科（鰶科）
Cyprinidae　科（鯉科）
Ictaluridae　科
Synbranchidae　科
Labyrinthici　科
Kiaeidae　科（ニベ科）
Nandidae　科
Gobiidae　科（沙魚科）

(2) 漁獲高

コトンキンレ湾及北部安南
南部安南ノ沿岸
コタイレ湾、交趾支那及コカンボヂヤレ私岸
コカンボヂヤレノ太湖及河川

計　一、〇〇〇、〇〇〇 噸
（備考）右漁獲高ハ領内取引及地方消費ノミニ関スル極メテ内輪ノ見積ナリ。

(3) 漁船、漁具

漁具ハ未ト支ニ即チ支那領住民及外来ノ住民ノ使用スルモノヲ最モ重要ナル位置ヲ占メ漁民地

ノ住民二千万人ニ対シ理論的ニハ漁獲ハ一、〇〇〇、〇〇〇噸ノ量ヲ吸収シ得ルト説メラルヽモ事実ニハ海洋漁業及河川湖沼ノ漁業ヨリ收獲シ得ルハ前記ノ如クニシテ従ッテ現在ノ收獲高ハ理論上ノ有効消費量ノ約三分ノ一ヲ充シテ居ルニ過ギズ

イ、品目別生鮮魚介類仕向地別輸出高（単位数量 噸 金額 千弗）

魚類	一九三七年 数量	一九三七年 金額	一九三八年 数量	一九三八年 金額	一九三九年 数量	一九三九年 金額	備考
魚	三八二、一	二九二	五四二、四	六七三	一、六五四	二〇六	
(1) 淡水魚	三五五、五	二六九	五〇〇、六	六四二	一三、三	一六三	
支那	〇	〇	〇、一	〇	〇	〇	
西貢	六九、五	六一	三四一	五七二	八一、〇	一一八	
タイ	二八五、六	二〇八	一四四、九	一〇二	五三、九	四三	
コーカレドニア	一	一	一、五	一	一	一	
其ノ他	一	一	四、三	二	一	一	
海洋魚	二六、六	一三	四一、八	五一	一四、三	四二	
フランス	一	一	〇、一	〇	〇	〇	
支那	二一、二	六	五七、五	三〇	一八、八	一〇	
香港	一	一			〇、二	一	

タイ	其ノ他	牡蛎	殻類	鼠	支(安南)瑚	香港	タイ	新嘉坡
|	五、四	○	○、一	一二、八	(二○、四)五	一○、七	一、四	○、二
|	一、七	○	○	一三	(三)五	八三	七	○
○、六	三、六	○	○	一二、八	(一○、一)八	一、五	七、四	二、八
一○	一、一	○	○	七二	(三)九	一五	三四	一四
|	一○、一	○、一	○、四	一一、四	(一、五)九	一、三	五、四	一、七
|	三○	一	一	九四	(二三、九三)	一六	三九	三

ロ、品目別生鮮魚介類仕向国別輸入高（単位 数量 千瓩 金額 千円）

		牡蛎	香港	ヒリッピン	海峡	日本
一九三六年	数量	五一、七	五一、七	|	八五、七	八五、七
	金額	二二八、七	二二八、七	|	四○五、三	四○五、三
一九三七年	数量	六二、六	六二、六	|	六四、八	六四、八
	金額	三六一、三	三六一、三	|	四一二、○	四一二、○
一九三八年	数量	一○三、七	八六、三	二七、四	三、三	三、三
	金額	八四三、四	六六七、○	一七六、四	三九、四	三九、四
備考						

(ハ) 漁業別ノ態様、漁船数、従業者数及根拠地

漁業名	主要漁場	主要漁期	漁具	漁船	従業者数	主ナル漁獲物	漁獲高	備考
底引網漁業	東京湾 仏印沿岸各地	自九月下旬至翌年六月 自十月至翌年四月	二艘打曳網 幼稚ニシテ規模小ナリ	支那戎克 三〇—一〇〇屯 八〇〇—五,〇〇〇隻	一隻平均十五名	あかまつ、たばめ、ちこたい、いとより等	一隻一漁期十五瓲 約四千隻 総漁獲高約二万—二万五千瓲	支那人漁業者ニヨリ行ハル
定置漁業	〃	〃	〃					
旋網漁業	〃	〃	〃					
釣漁業	〃	〃	〃					
刺網漁業	〃	〃	〃					
カルマル漁業	〃	〃	〃					
投網漁業	〃	〃	〃					
地引網漁業	〃	〃	〃					
				安南戎克又ハ安南舢板 約六千隻	約九万人	各種沿岸魚類	約十四万瓲	

支那人ニ依リ行ハルル底曳網漁業ノ主要根拠地ハ東京、カク・バ島（Cat Ba）ナリ。土人及支那人ニ依ル沿岸小漁業ニ於テハ一部ヲ自己消費ニ備テ漁獲物ノ大部ハ之ヲ製品化スルノ必要上ソノ根拠地ハ塩田地方ト密接ナル関係ヲ有シ主要ナル塩田地帯ハ又主要ナル根拠地タリ

(ニ)、邦人漁業ノ現況

当領在留邦人ニシテ漁業ヲ営ム者ナシ、之ハ小資本ナル支那人及土民業者ニ対抗シ

テ良ク其ノ外ノ等グルノ困難ナルニ依ルベク従ツテ邦人其ノ他ノ外国人ニ於テモ之ヲ営ム者ナシ。

然レ共南支那海、東京湾、ウイ高等ノ湾頭及邦漁船ハ既ニ内地、台湾、海南島ヲ根據トシテ出漁シ好成績ヲ挙ゲツヽアリ。

(三) 将来ノ見込

(1) 出漁地根拠可能数

沿岸漁業ハ漁具、漁法、漁船等極メテ幼稚ナルヲ以テ漁獲増收ノ爲ニハ漁船数ノ増大ヨリ寧ロ速カナル技術的指導緊要ト思料ニラルル尚遠洋漁業ハ現在全ク見ルベキモノナク併モ附近ニ好漁場ヲ有スル点ヨリ見ルモ今後ノ発展ヲ期シ得ベシ

(2) 漁獲見込高及算定ノ基礎

(イ) 沿岸漁業及改水漁業

新規漁場ノ開発ニ依ル増收見込高左ノ如シ

コバサック及イメコン河口附近	一、〇〇〇、〇〇〇瓲
コピアン、ソンル及ヤアオ岬ノ漁場	二〇、〇〇〇、〇〇〇瓲
コタイル湾、其ノ他可能ノ海底	三〇、〇〇〇、〇〇〇瓲
計	一五〇、〇〇〇、〇〇〇瓲

(ロ) 遠洋漁業

鮪、鰹漁業（漁船平均五〇屯ニ〇隻出漁）　六、〇〇〇瓲

機船底曳網漁業（漁船平均五〇屯一〇隻出漁）　三、〇〇〇瓲

計　九、〇〇〇瓲

(3) 土人漁業ニ及ボス影響

沿岸漁業及改水漁業ハ土民ノ生業ノ重要ナル一部ヲナスヲ以テ従来漁業者多キ方面ニ於テハ直チニ在民ノ生計ヲ破局ニ導クノ虞アルヲ以テ此ノ方面ニ対シテハ主トシテ前記(イ)ノ新規漁場及共同漁業ニ邦人進出ヲ促進セバ土民漁業トノ相克ヲ防ギ生産ノ増加ヲ期待スルコトヲ得ベシ。

（資料）　海洋漁業第六巻第十二号、同第五巻第五号。

農商務省水産局編「南洋ト水産」

農林省水産局編「海外水産調査」。

南洋叢書第二巻「佛領印度支那漁業」

佛領印度支那ニ於ケル華僑。

水路誌「南支那海第一巻」。

第二節 水産製造物

(1) 生産高 (不明)

(2) 需給ノ概要

(イ) 主要國別水産物輸出状況 (単位 數量 瓲 價額 千弗)

國名	一九三七年 數量	一九三七年 金額	一九三八年 數量	一九三八年 金額	一九三九年 數量	一九三九年 金額	備考
フランス	二、六三九、二	二、九八〇	七〇四、九	七六七	一、二三〇、〇	一、四四九	
ベルギー	九二〇、〇	八六	一〇〇、三	八九	一七六、七	一七二	
イギリス	二一〇、〇	一一一	二四、一	四八一	一八、二	二四〇	
支那	一〇〇、〇	一五六	三一六、〇	二八五	五五九、一	七四三	
蘭領印度	—	—	〇、一	〇	一、二	二	
タイ	七、一五六、二	六、一〇九	五、八四九、二	五、三八〇	三、八〇七、一	三、六三五	
新嘉坡	二〇、九二六、八	五二、二四九	二二、七五二、三	五六、六〇五	二四、九四二、四	六二、四一一	
他ノアジア諸國	一、〇	五	五、六	四	七六、三	七四	
ニューカレドニア	〇、七	一	〇、六	一	二、七	一〇	
計	三六、一一三、七	七五、二一七	三六、三一五、九	八一、四九五	三七、二〇七、四	八六、五八八	

(ロ) 品目別水産製品輸出状況 (単位 數量 瓲 價額 千弗)

品目	一九三七年 數量	一九三七年 金額	一九三八年 數量	一九三八年 金額	一九三九年 數量	一九三九年 金額	備考
乾・塩・燻魚及鹹	九〇、〇	一八五	九八、一	一七二	六三、七	一四三	
香港	八七、六	一八四	九八、一	一七二	六三、七	一四三	
タイ	三、四	一	—	—	—	—	
別掲セザル水産製品	三一、三四〇、九	六五、九〇〇	三二、〇九五、五	七〇、七一九	三三、四〇四、五	七六、七五八	
フランス	—	—	五七、七	一四三	—	—	
支那(安南)	五六、七(一〇、三)	七八(三三)	九八、七(一六、一)	一四八(一一)	四六七、九(四四、五)	五三八(二一九)	
香港	三、九一二、四	八、八一六	四、八一七、七	一一、八六二	五、一一八、四	一二、九一八	
蘭領印度	—	—	〇、一	〇	—	—	
タイ	六、六一一、一	五、六九三	四、九二一、七	四、六四〇	三、三四〇、五	三、〇八一	
新嘉坡	二〇、七五一、四	五一、二九五	二六、二四三、五	五四、〇四六	二四、四八五、六	六〇、〇九六	
他ノアジア諸國	—	—	五、六	四	七六、三	七四	
其ノ他	一、二	二	一、七	四	一四、六	三四	
缶詰魚	三、八	三三	九、八	七〇	四、四	三八	
牡蠣	三、〇	一二	〇、四	二	一六、六	一四四	
香港	一、九	一六	〇、三	二	一〇、二	七六	

ソノ他	一、一	六	〇、一	四	六、四	六八
甲殼類	〇、七	一	〇	〇	〇、五	一
小蝦（乾）	一、〇〇五、二	五、〇八八	一、三五三、五	六、八九五	一、三九四、七	六、五八一
フランス	〇	〇	〇、四	六	〇	〇
支那（雲南）	三二（三、三）	八（一八）	四、三（四、三）	一五（三）	一一、四（一一、四）	七四（七四）
香港	八四九、一	四、二二〇	九一九、三	四、七二六	九一〇、六	四、〇七六
タイ	〇、八	三	二一、九	五三	五八、三	五六
新嘉坡	一五二、〇	八四六	三八五、六	二、一五三	四三三、九	二、一五五
乾塩製小蝦ノ頭	｜	｜	二二三、六	一七七	九〇、九	二〇〇
香港	｜	｜	一七八、七	一四一	八八、一	二〇〇
鱶鰭	一、二	一二	一、七	三九	二、六	一〇四
支那（雲南）	〇、六（〇、四）	七（五）	〇、一（〇、〇）	二（〇）	〇、四（〇、三）	一一（一〇）
香港	〇、六	五	一、五	三六	二、一	八五
タイ	〇	〇	｜	｜	〇、一	〇
ニユオクマム及其ノ他ノ魚醤油	三四、八	五九	七九、八	一〇六	三〇、八	七〇
フランス	五、八	九	九、二	二三	八、〇	一六
支那（雲南）	一六、四（二、九）	二六（二三）	一五、〇（五、〇）	二六（六）	一五、二（五、一）	二八（二八）

香港	二、四	三	一、一	一	〇、二	〇
タイ	〇、六	〇	四五、〇	二六	〇、八	〇
新嘉坡	三、八	三	｜	｜	｜	一
レユニオン	一、七	六	五、三	二〇	一、三	｜
広州湾	〇	〇	一、二	一	〇、二	四
貝殼（乾）	一、一	一	四、〇	二	三、四	三
魚油	二、九一七、二	三、二〇八	九五二、八	一、〇三四	一、四四〇、六	一、六四四
フランス	三、六三一、〇	二、九五四	六九四、五	七三四	一、二一八、九	一、四〇八
ベルギー	九一、八	八四	一〇〇、三	八九	一七六、七	一七一
香港	一八七、七	一五五	一一七、五	一八三	一一、一	二七
魚ノ鰾	六八、七	四二五	六五、二	七三四	四二、〇	四九一
フランス	二、三	一五	〇、七	八九	二、八	二五
イギリス	三一、〇	一一	二四、一	一六三	一八、二	二四〇
香港	二四、四	一四二	一八、〇	八五六	九、九	七八
タイ	〇、九	三	一一、八	四	五、三	八
新嘉坡	一八、五	一四四	一〇、二	四八一	四、五	一七
其ノ他ノ海産	〇、三	〇	一八五、二	一七八	四一、九	一三

(八) 主要國別水産物輸入状況（單位 數量 價額 千瓩 千匙）

國名	一九三六年 數量	一九三六年 價額	一九三七年 數量	一九三七年 價額	一九三八年 數量	一九三八年 價額	備考
フランス	一四七.二	一、〇三七.二	一一六.二	一、〇三二.六	二二五.五	二、二八三.三	
香港	二〇一.〇	五九四.四	一七九.八	八五四.四	一五九.三	一、〇五八.五	
ヒリッピン	—	—	—	—	二七.七	二一三.二	
タイ	七九.五	四六.四	四八.六	三六.〇	五五.七	八三.〇	
アメリカ	四〇.二	六七.〇	一〇八.三	二六〇.七	八六.一	三九四.八	
日本	二六四.五	一、五五四.九	一九〇.二	一、〇二二.五	一〇.六	一二二.七	
計	七三二.四	三、三〇〇.四	六四三.〇	三、四七六.〇	五六四.九	四、一五八.八	

(二) 品目別水産製品輸入状況（單位 數量 千瓩 價額 千匙）

品目	一九三六年 數量	一九三六年 價額	一九三七年 數量	一九三七年 價額	一九三八年 數量	一九三八年 價額	備考
缶詰	三一二.八	一、二五四.二	三四四.二	一、七一七.九	三八八.七	二、八五五.六	
フランス	一二七.六	九六六.七	一一二.三	一、一〇五.三	一四五.二	一、七二五.二	
フランス植民地	一九.六	七〇.五	四三.九	一九七.三	八〇.三	五五八.一	
香港	二二.八	四四.四	一六.三	五四.[illegible]	八.八	三八.一	
ヒリッピン	—	—	—	—	一〇.三	三六.八	
タイ	七九.五	四六.四	四八.六	三六.〇	五五.七	八三.二	
アメリカ	四〇.二	六七.〇	一〇八.三	二六〇.〇	八六.一	三九八.四	
日本	二三.一	五九.二	一四.八	六四.六	二.三	一五.八	
乾燻製塩漬魚等	一一〇.九	二〇六.五	九〇.五	二八四.四	五四.四	二〇〇.二	
香港	一〇四.三	一八三.九	八四.一	二三九.五	五二.九	一七六.四	
日本	六.六	二二.六	六.四	四四.九	一.五	二三.八	
鯖	二二.二	一三七.四	一六.八	一九八.九	一一.三	一七七.〇	
香港	二二.二	一三七.四	一六.八	一九八.九	一一.三	一七七.〇	
牡蛎ソース漬	三八.八	三八八.五	三一.九	一一二.八	二.六	一六.九	
日本	三八.八	三八八.五	三一.九	一一二.八	二.六	一六.九	
乾鮑牡蛎又ハ貝殻	七五.一	六四九.七	四二.二	三八八.〇	〇.九	二六.三	
日本	七五.一	六四九.七	四二.二	三八八.〇	〇.九	二六.三	
魚脂	三五.二	五二.二	—	—	—	—	
日本	三五.二	五二.二	—	—	—	—	

(3) 主要産地

製品名	原料	処理法	主要産地	備考
塩魚	たゐ、狗母魚、いか、えび、小鯵、淡水魚等	大形ノモノハ頭及内臓除去、特ニ身ヲ開ク、塩量ハ重魚量ノ四割乃至三割	沿岸、河川湖岸各地（カク、バ島）	
塩干魚	同右	塩魚ヲ筵ノ上デ一日乃至四日日乾セルモノナリ。	同右	
燻魚	淡水魚	魚鱗及内臓除去、竹串ニ五乃至六尾頭ヲ刺シ簀子上ニ並ベ薪火ノ煙ニ投燻シテ製ス。	大湖、河川沿岸	量少シ
魚醤油	雑魚	丸ノママ、水洗、原料五百瓩ニ対シ塩三百瓩及黒魚ノ米三百瓩ヲ桶ニ混入、屋外ニ一ヶ年放置浸出液ヲ煮沸シ塩ヲ添ス	安南、交趾支那（ビーソン）（フ、コク島）	
漁油脂	塩魚製造ノ際除去セル頭及内臓等	大鍋ニテ煮出ス	太湖沿岸	
浮嚢	魚ノ浮嚢	魚体ヨリ丁寧ニ抜キ取リ洗滌、血痕ヲ去リ約一日間乾ス	不明	
鰭	鱶鰭	乾燥	安南	
魚卵	魚ノ卵巣	塩中ニ保存、米ト混食ス	不明	
亀甲製品	亀甲		ハドン	原料ハ「サイゴン」ヨリ供給ヲ受ク
貝殻製品	鮑、蠣、螺		ハノイ	

(4) 経営形態、設備能力及従業者数

製造方法幼稚ニシテ家庭加工業ノ域ヲ出デザル為特記スベキモノ少シ漁獲物ハ主トシテ漁業者及其ノ家族ニヨリ処理加工ス。

名称	経営組織	業務	設備	従業者数	所在地
廣湾公司	支那人経営	海産物製造	塩蔵タンク、乾燥場	不明	カク、バ島
安南東京工業会社 La Société Industrielle de l'Annam-Tonking	不明	貝釦製造	不明	約一〇〇〇名	ハノイ

(5) 集荷及輸出機構ノ現状

水産物ノ集荷輸出ノ実権ハ殆ンド支那人ノ掌中ニアリ土民ノ製造加工セル製品ヲ支那人ガ買付ケ華僑大商店等ト提携シテ各地ヘ輸移出ス

(6) 主要輸出港及同港ヨリノ輸出数量

(イ) 海防

「タイピン」河ノ支流「キエア・カム」河口ヨリ上流約十六浬ノ地ニ在リ佛領印度支那北部ニ於ケル要港ニシテ又東京地方ニ於ケル唯一ノ貨物集散地ナリ、首府河内及州内各地主要都市トノ間ニハ鉄道及水路ノ交通アルノミナラズ沿岸航路船舶ノ寄港地ニシテ香港ニ近キ為商業殷賑ヲ極メ南部ニ於ケル「サイゴン」ト並称セラル。

唯惜シムラクハ河口ニ箇ノ間洲アリ年年巨費ヲ投ジ之ヲ浚渫セルモ土砂堆積シ航行不便ナリ、港湾ノ設備トシテハ市街ノ下流ニ鉄造埠頭アリ長サ五九九、八米、幅四〇、二一ー六〇、三米ニシテ埠頭側ノ水深七、九米、汽船五隻ヲ繋留スルヲ得、

該埠頭上ニハ二〇噸起重機一台、二噸汽動起重機四台、外ニ二噸手動起重機二台ヲ備フ、埠頭ハ鉄道ト連絡ス

浮船渠、乾船渠及船架各一箇アリ船舶及機械ノ修繕ヲ為シ得、当地ニハ常ニ多量ノ石炭ヲ貯蔵シ又重油貯蔵所、給水設備等アリ

(ロ) 西貢（サイゴン）

ドンナイ河ノ一名「サイゴン」河ノ一支流ノ両岸ニ跨リ河口ヨリ約四十五浬ノ處ニ位シ数條ノ可航流ニ依リ「メコン」デルタト連絡ス、近代的都市ニシテ兼制学校アリ衛生設備整ヘリ

港湾設備トシテ繋船浮標及埠頭アリ埠頭側水深五、八―九、八米アリ埠頭ハ長サ一浬余ニ亘ル、

官設乾船渠、二箇、及浮船渠一箇アリ又造船所ノ設ケアリ其他各種ノ修理設備モ完備ス、

石炭重油等モ容易ニ入手シ得ラル

飲料水ハ給水船ニ依リ得タル、モ使用前煮沸濾過スルヲ要ス

第三節　塩

一、生産高（単位　瓲）（天日製塩ヨリ見タル産塩）

年次	東京	安南	交趾支那	合計
一九三〇	五一、五九一	一〇六、四八五	七九、二五九	二三七、三三五
一九三一	五八、九六七	一二一、〇四四	六九、七三八	二四九、七四九
一九三二	五八、七九四	一二一、二五四	七一、一三〇	二五一、一七八
一九三三	三六、一〇八	七六、六六七	三二、七一八	一四五、四九三
一九三四	二三、八四一	九四、八〇八	四一、八〇九	一六〇、四五七
一九三五	三一、三八三	一一一、四五六	六三、九四〇	二〇六、七七八
五ケ年平均	四三、四四八	一〇五、二八六	五九、七六〇	二〇八、四九一

備考、一九三三年ニ一四五、四九三ノ生産ハ前年一九三二年ニ五一、一七八ニ比シ五五%ノ激減ナリ其ノ理由ハ天候ノ不良ト経済界ノ世界的恐慌ニ歸因ス

二、需給概況

消費高（単位　瓲）

年次	消費高
一九二三	一五一、五〇〇
一九二四	一五〇、四〇〇
一九二五	一五五、四〇〇
一九二六	一四二、二〇〇
一九二七	一五五、四〇〇
一九二八	一五〇、七〇〇
一九二九	一五六、二〇〇

一九三〇	一五〇、〇〇〇
一九三一	一三九、二〇〇
一九三二	一二一、四〇〇
平均	一四七、二四〇

備考 佛印ノ人口二〇二一万人ナリ一人当消費高年七、三七瓩、日本ノ消費一一瓩世界ノ消費ハ二瓩ニ比シ遙ニ小量ナリ

塩ハ漁業用トシテ沿岸地方ノ消費及工業用及泰國境ヨリ岩塩ノ流入等ヲ含マザル為ナルベシ

三、主要産地製塩時季及製塩方法

主要産地

前掲ノ通リ東京安南交趾支那ガ其ノ生産地ナルモ安南最大ナリ

塩田ハ東京ニテハクハンヤン、ナムディン、タイピンガ中心トナリ安南ハ佛印中最大ノ製塩地ニシテ特ニホンコーエ、キノン、カナ、バリヤノ四地区、交趾支那ニテハバリア、バクリウ地方等ナリ

製塩時期

北東季節風ノ乾期ニシテ一一月ヨリ翌年四、五月ニ至ル、カナ地方ニテハ一一月ヨリ四月ニ到リホンコーエニテハ一月ヨリ九月ニ至ル八ケ月間ナリ

気象概況

月	キノン（安南）雨量（粍）	キノン（安南）降雨日数	カップパダラン（安南）雨量	カップパダラン（安南）降雨日数	サイゴン（交趾支那）雨量	サイゴン（交趾支那）降雨日数
一月	五二	一〇	一四	二	一七	二
二	三九	五	四	一	三	一
三	三一	三	一八	二	一六	二
四	二八	三	二三	二	四一	五
五	五〇	五	七七	八	二一二	一六
六	五七	五	六四	六	三三九	二一
七	六七	六	五八	九	三〇九	二二
八	五七	五	二九	五	二八四	二一
九	二四二	一五	一〇五	一〇	三四五	二一
十	四四九	一八	一四五	一二	二八〇	二〇
十一	四一二	一七	一五一	一〇	一一三	一〇
十二	一四三	一六	八九	七	六三	七
計	一、六二七	一〇八	七五七	七四	二、〇二二	一四八

備考 安南海岸ニテハ一月ヨリ八月迄ハ乾期ナルモ南部佛印サイゴンニテハ五月ヨリ一一月迄ハ降雨季ニテ安南海岸ト著シク異ル

製塩方法

天日製塩法ナリ

四、経営形態

塩ハ阿片酒精ト共ニ政府専売ニシテ主管々廳ハ印度支那税関税務局ナリ

塩田ハ殆ンド民間有ニシテ会社又ハ個人ノ経営ニヨリ製塩ス

一九三三年迄ハ塩税ノ許可ニル範囲内ノ数量ノミ製塩セルガ斯クテハ需給上種々ノ弊害ヲ生ズルニヨリ之ヲ改正シ、国内ノ需要不足ヲ補フ為メニ其ノ最近ノ五年平均販売数量内ニテハ自由製塩可能トセリ

五、集荷及輸出機構ノ現状

集荷配給ニ就テハ製塩地別ニ需給ノ円滑ヲ計ルヲ立前トセルモノノ如ク東京地方ノ製塩ハ東京地区需要ニ供給ス、

輸移出塩ハ安南カナホンコーエ塩田地区ヨリ輸出ス

是等両地区ニハ良好港ヲ有シ軽鉄、鉄路アリ又バスケットコンベーヤクレン等ノ搬出積込等ノ設備完備ス

資料（仏印、宝庫）

輸出額

年次	輸出額（単位 七）
一九三八	六八、四五六
一九三九	四四、二〇六

又一九二八年ヨリ一九三一年迄四ヶ年平均輸出量ハ五三、七五〇五ナリ而シテ現地調査者ノ意見ニヨレバ仏印当局ハ国内需要ノ調節ヲ計ルニ専ラニシテ外国市場ニ販路ヲ求メ大量生産ニヨルコストノ引下ゲヲ全ク考慮セズ無理ナル生産制限ヲ行ヒ徒ラニ安南人製塩業者ヲ圧迫シ居レリト云フ

第六章　林産物

第一節　木材

（一）需給状況

（イ）最近ノ年生産量、消費量並対本邦及主要貿易先別輸出入量

（ロ）最近ノ年生産量、消費量（資料、山林会　仏印ノ林業）

品目	年生産量	年次	消費量
木材　用材	二、四〇〇、〇〇〇石	一九三八	用材ノ消費量ハ僅少ナリ
薪炭材	五、五〇〇、八〇〇石	〃	薪炭ハ自家用トシテノ消費量
木炭	五〇、一三〇噸	〃	相当アリ

（ハ）対本邦及主要貿易先別輸出入量

次ノ一　輸出量（資料　仏領印度支那農林畜水産事情）

品目	輸出數量	年度	仕向先別數量	
(一)普通材				
(ロ)丸太材	一、四九、九〇〇石	一九三八	支那 香港	二〇、七五石
(ロ)鐵道枕木（厚サ八〇粍以上）	三、仁、三四〇		全屬領	二六、九〇五
(ハ)〃（〃以下）	三一〇		アルゼリヤ	二一五
(ニ)角材及挽材（厚サ八〇粍以上）			佛本國	一一〇
松類	一、四〇		佛本國	一九六五
闊葉樹	三、十一五		香港	一一〇
(ホ)角材及挽材（厚サ三五―八〇粍）			アフリカ	一一四〇
（闊葉樹）	七、六〇〇		アフリカ	三〇四〇
(ヘ)〃（厚サ二一―三五粍）	一一九五		アルゼリア	一三〇五
			チユーニス	一二六五
			支那	三二〇
			佛本國	八五〇

品目	輸出數量	年度	仕向先別數量	
(ト)薪材	二、九三〇石	一九三八	香港	二四二五
(チ)木炭	一七、四七五噸		香港	一七、二七三
(二)鐵重材			佛本國	五五
(イ)チーク原木	五五石		英印	二〇八七〇
(ロ)チーク角及挽材	五五、七五五		新嘉坡	八三一五
			南阿（佛ン）	七〇八〇
			支那	四七二〇
			セイロン	四七七五
			アフリカ	三九九五
			蘭印	二一七〇
			佛本國	一五〇〇
			日本	二五〇
(ハ)鹿木類（厚二〇粍以上）	五、五八五		支那	二九六五
			香港	一七〇五
			シリア	六五〇

(ニ) 薪木類（厚七分乃至以下）	一、八六〇		支那	七四五
(ホ) 唐木	一一五		佛本國	五一〇
(ヘ) 枕木	二〇五		香港	八〇

其ノ二、輸入量（資料・同前）

品目	輸入換量	年度	仕入先	仕入先別数量
(イ) 普通材原木（丸太）闊葉樹及針葉樹	六、一一〇石	一九三八	支那	六、一一〇石
(ロ) 角材及挽材	五〇〇	〃		
(ハ) 黄檀材チーク材原木	一二四、一六五	〃	泰國	一二四、一九五
			日本	五四〇
			エストニア	三九五
(ニ) 木工品	一、三三五	〃	日本	一七〇
(ホ) 紡績機ノ「ボビン」	三五〇	〃	ブルトン（佛）	一一〇
(ヘ) 其他（内容不詳）	二八五	〃	日本	六〇〇

(ト) 薪類	一三、八三五	〃	日本	九、四七〇
			エストニア	二、二九〇
			ブルトン（佛）	六〇〇
(チ) 其他ノモノ	五四〇	〃	香港	二三五
			日本	一一五
			佛本國	一二五

(2) 昭和十七年度ニ於ケル生産見込量、輸出見込量、及算定ノ基礎

品目	生産見込量	輸出見込量	算定ノ基礎
用材	二、四〇〇、〇〇〇石		最近ノ実績ニヨル
チーク材	――	五六、〇〇〇石	
唐木類	――	七、五〇〇	
普通材	――	一〇、〇〇〇	

四 生産及取引事情（資料・佛領印度支那農林畜水産業事情）

(イ) 生産地域、面積及蓄積

佛領印度支那ノ森林ハソノ面積約三二、〇〇〇千陌 全面積ノ約四三%ニ当ル、ラオス、

カムボヂヤ、アンナン、トンキン等ノ山嶽地帯ニハ文字通リ千古斧鉞ヲ入レヌ大森林ガ鬱蒼トシテ生ヒ茂レリ
ソノ地方別森林面積ハ左ノ如シ

地方別	全土面積 千陌	森林面積 千陌	森林ノ全土ニ対スル割合 %
アンナン	一四、七六〇	六、〇〇〇	四〇、六五
カンボヂヤ	一八、一〇〇	四、〇〇〇	二二、〇九
コーチンチヤイナ	六、四七〇	一、八〇〇	二七、八二
ラオス	二三、一四〇	一六、三〇〇	七〇、四四
トンキン	一一、五七〇	三、五〇〇	三〇、二五
計	七四、〇四〇	三一、六〇〇	四二、六七

針葉樹林ハ中華民国トノ国境近クノ山岳地帯ニ之ヲ見ルノミナルガ有力ナル檜、亜杉、松、杉等分布ス。
闊葉樹林ハ森林面積ノ九割八分ヲ占メ之ヲ大別スレバ常緑闊葉樹林、落葉闊葉樹林及チーク林等ノ林型ニ区別シ得。
之等ノ森林ニ熱帯産樹種ヲ一通リ産出スルガソノ主ナルモノハ唐木、銘木類ニ属スルモノナリ

而シテ佛領印度支那ノ木材ハソノ性質用途ニ応ジ貴重材、一等材、二等材、三等材、四等材ノ五種ニ分ケラル、
チークレハ老撾ヨリ國境ヲ越ヘテ泰國ニ続キ世界的ニ有名ナル産地ヲナセリ。
次ニ森林蓄積ノ分布状況ニ就イテ見ルニ次ノ五種ニ分類サル、
一、第一級（蓄積豊富ナルモノ）陌当リ三百立方米以上ノ蓄材ヲ有シ、ソノ中少クトモ三分ノ一ガ優良材ナルモノ約六、〇〇〇千陌
二、第二級（蓄積中位ナルモノ）陌当リ百五十立方米乃至三百立方米ノ蓄材ヲ有シ、ソノ中約四分ノ一ガ優良材ナルモノ約二、四〇〇千陌
三、第三級（蓄積貧弱ナルモノ）陌当リ百立方米乃至百五十立方米ノ蓄材ヲ有シ優良材極メテ僅少ナルモノ約七、七〇〇千陌

雑木林面積約一五、一〇〇千陌

四、第四級（蓄積豊富ナルモノ）陌当リ用材及工業材百立方米乃至百五十立方米ナルモノ約一二、三〇〇千陌、
五、第五級（蓄積貧弱ナルモノ）陌当リ用材及ビ薪炭材百立方米弱ノモノ約二、八〇〇千陌
以上ヲ地方別ニ見レバ

國別	安南	東埔寨	交趾支那	東京	老撾	總計
蓄積豐富ナル森林	千町 一、四四〇	千町 二、九三三	千町 一三四	千町 一、〇〇〇	千町 四四二	千町 五、九四九
蓄積中位ノ森林	三、五〇六	三、五八七	二六七	三、四四〇	一三、三九七	二四、一九八
蓄積貧富ナル雜木林	一、五五三	一、三〇四	四一六	二、五〇三	六、五〇七	一二、二八三
計	六、五〇〇	七、八二四	八一七	六、九四三	二〇、三四六	四二、四三〇
總面積ニ対スル割合	四四%	四三%	十三%	九〇%	八八%	五七%

(2) 経營形態及利権関係等（資料、南洋年鑑、其ノ他）

当國ノ森林ハ其ノ大部分即チ約九割程度國有林ニシテ取締ヲ嚴重ニ施タル企業ハ小規模ナ土人ノ経營ノミ許サレ外国人ノ開発ヲ禁ジ居レリ。フランス人モ亦自ラ経營ニ参加スル者殆ドナク交通、運輸ノ不便、伐採搬出ノ困難ヲ手傳ヒ未ダ積極的開発ヲ見ズ、

森林行政ノ大様ヲ見レバ左ノ如シ

即チ聯邦各國ニハ各々地方林野局アリ、地方行政長官即チ交趾支那ニ於テハ植民地知事其他ノ保護国ニ於テハ理事官長ノ監督下ニ属ス、河内ニハ林野管理官ヲ長官トスル中央機関アリ各々地方林野局監察ノ任務ヲ有ス、各森林区ハ行政上財政上自治的単位ヲナシ地方森林事務ガ森林区長ノ任ニ当ル。森林区ハ更ニ多数ノ小管区ニ分タル。

佛領トナル以前ニ於テハ特ニ森林ニ関スル規定ナク、佛領トナリタル後モ前述ノ如キ地方森林局以下ノ森林行政ガ制定サレタルハ一九〇五年以後ノコトナリ。然シテ現在印度支那森林行政ニ於ケル基本法ハ一九三〇年三月二十一日附總督令ニ依リ大体次ノ如キ内容ヲ有スルモノナリ。

一、森林ヲ三種ニ区分シ、編入林（伐採制限或ハ保護林及植林地ノ如ク特別規定ヲ適用サレタルモノ並ニ地方林或ハ公共造営林ノ如ク法人ニ属スルモノ）、保安林及特別林（個人所有ノモノ）トス。

編入林―伐採ニ二種アリ、普通伐採ハ州長官、特別伐採ハ總督ノ承認ヲ要シ、伐採物ノ賣買ハ公入札法ニ依ルヲ原則トス。

保安林―原則トシテ伐採或ハ副産物ノ採集ハ禁ゼラル、モ特ニ局長承認ノ上林務官ノ監視下ニ許可セラル、場合アリ。尚伐採物ノ措置ニ於テモ林野管理官或ハ局長ノ指示ヲ受ク。

特別林―公安ヲ害セザル限リ伐採ヲ行ヒ得ルガ豫メ州長官ノ許可ヲ要ス。

二、編入林及保安林ノ伐採及伐採物賣買ノ受益者並ニ名義人ハ佛國民及保護領民並ニ佛國法ニ則ル会社ニ限ラル。

三、林産物ノ実際収入額ノ百分ノ一ハ管理資金トシテ国庫ニ徴収サル。

尚所謂本来的森林ノ内右ノ林業法ニ基ク編入林ノ一九三四年ニ於ケル状況ハ左表ノ如シ。

州別	項目	単位	東京	安南	交趾支那	柬埔寨	老撾	計
編入林数		一	一二三	一二六	一〇四	一	五一	
編入林面積		箇	三八七、三三四	一七二、六八五	八七三、八八〇	一	二、八四〇、〇五〇	
伐採面積		箇	五七、八八五	二九三、八五六	五一、九九八	一	四七七、五九九	
森林收入		比弗	三二七、六五八、六七〇	四七〇、五九八	四〇四、八六四	一	一、九三七、七六〇	

(3) 邦人企業ノ概況

バレエアニ中村商店小規模ノ事業ヲ行フノ外邦人ノ企業ナシ。

(4) 集荷機構ノ概況

伐採事業ハ土人及支那人ニヨツテ行ハレ木材商ハ雑夫ニ仕事ヲ持込ミ之ニ前払ヲナス。搬夫ニヨリ交通路附近ノ土場マデ運搬ヒラレ此処ニ於テ政メテ買入ラナス。斯クシテ市場ニ集荷ヒラル。カンボゲヤニテハ木材取引ハ全ク華人及支那人ノ手ニヨル。

(南方地域農林資料其ニ=拠ル)

(5) 設備能力

東京ニハ機械製材ノ大工場数ケ所ニ存在スルモ最大ノモノハ河内ノ印度支那機械製材会社 Société Indochinoise des Scieries et Fabriques (通称「ツーラン」ニ支店及工場、「ハムロンレ」ニ工場ヲ有ス)

及「ベンサエイレ」ノ印度支那製材構寸会社 Cie Indochinoise des Scieries et Fabriques de Phanrang (本社河内市、資本金百二十萬比弗)ガ木材会社ナルト共ニ構寸ノ製造ヲナス。

東埔寨ニテハ荏「クリスチマンヴィル」ノ「コランレ」製材工場ヲ最大トシ交趾支那デハ「ビエンホアレ」木工会社、両度人カ製造会社其ノ他安南人又ハ支那人ノ所有スル工場一〇ヲ数フ。

「ビエンホアレ」木工場 La Bien Hoa Industrielle et Forestiere ハ本社ヲ西貢市ニ有シ資本金四百萬比弗、満人経営ノ製材会社ニシテ一種ノ植民地開発会社ナリ。社有林大方陌「ビエンホアレ」ニ、大製材工場ヲ有シ構内桁木ニ独占的位置ヲ有ス、木材加工業トシテ漸々注目ニ値スルハ構寸及ビ製箱工業ニシテ構寸ノ工場ハ安南ニ於ケル前記二製材場ヲ会社ノ外、河内ノ「アンチレ」構寸製造会社アリ「ベンチュイレ」ノ工場ヲ最大トシ年産一億四千萬箱ヲ製造ス。原料ハ東埔寨奥地仕出シ「ボーデレ」材ヲ用フ。

製箱業ハ「タン」、木アレ州「フー」、「デインレ」村及河内附近ノ「バビエレ」村ノ小家内工業ヲ主トシ産出量ハ国内消費ニモ足ラズ、原料ニハ柔軟ナ木材、木材樹皮及竹ヲ用フ。最近備人経営ノ製紙用「パルプ」製造工場ガ三ケ所程出来シ之等モ竹ヲ原料トシテ用ニ居ルハ注目ニ値ス。之ハ熱帯材木ガ概シテ木肌ガ石色又ハ黒色ヲ呈シ、木質モ緊緻ナルタメト、両種ノ原料ヲ多量且容易ニ入手スルコトヲ得ザルタメナリ。

(6) 労力関係

税番	品目	課税ノ単位	一般税率	最低税率	日本国産品ノ税率（軽減率）
	松及樅（改）	風袋込百瓩	無税	無税	最低
	其他（新設）	同	四.〇〇	二.〇〇	同
一二八ノ二	用材又ハ挽キタル普通材				
	指示ノ厚サヲ超ユル（一〇糎以上）	同	七.六〇	一.九〇	最低
	鉄道用枕木（[illegible]ヲ除ク）（八〇糎以上）	同	九.〇〇	二.二五	同
	指示ノ厚サヲ有スル其ノ他ノモノ				
	八〇糎及以上（松及樅）	同	無税	無税	同
	（其ノ他（新設））	同	一二.〇〇	三.〇〇	同
	三五糎超過八〇糎未満ノモノ	同	一四.〇〇	三.五〇	同
	二糎超過三五糎未満（ベニヤ板ヲ含マズ）	同	一八.〇〇	四.五〇	同
	二糎未満ノモノ（新設）	同	八〇.〇〇	二〇.〇〇	同
	樽丸				
一三〇	樽用樽材板	同	無税	無税	最低
一三六	木炭及麻稈				
	清新トセルモノ（新設）	同	一〇.〇〇	二.五〇	最低
	其他（新設）	同	八.〇〇	二.〇〇	同

第三一類 木製品

税番	品目	課税ノ単位	一般税率	最低税率	日本国産品ノ税率（軽減率）
六〇二	木細工品				
	白木又ハ普通木ノ箱				
	内側包装用（新設）	風袋込百瓩	六〇.〇〇 法	三〇.〇〇	最低
	其他（新設）	同	二四〇.〇〇	六〇.〇〇	同
	木串及長サ一〇糎未満ノ小道具柄、紡績及織布用ノ糸巻、管、小串、ビオ、エプロ、嘴、落ビエセット、長サ左記ノ如キモノ	同	二四〇.〇〇	六〇.〇〇	同
	一〇糎ヲ超過セザルモノ	同	四八〇.〇〇	一二〇.〇〇	同
	一〇糎以上ノモノ	同	三二〇.〇〇	八〇.〇〇	同
	縫糸用ノ絲繰リ小絲巻ニテ普通材製ノモノニシテ塗ラズ染色セザルモノ	同	一四四.〇〇	三六.〇〇	同
	其他（改械）				
	塗ラザルモノ	同	七二.〇〇	三六.〇〇	同
	塗リタルモノ	同	九六.〇〇	四八.〇〇	同
六〇三四	木製品ノ内				

其他ノ木製品	同	一一二、〇〇〇	五六、〇〇〇	一割五分

(ヲ) 輸出税

税番	品目	単位	税率
四三	木炭	瓦斯込石炭	免税
四四	其ノ他	〃	同

(ワ) 本邦ニ於ケルモノ

(カ) 輸入税

品名	税番	単位	税率
木材	六一二		
(1) 単ニ切リ、挽キ又ハ割リタルモノ		従価	三〇%
(2) 鉄刀木、紅木、紫檀及黒檀(瘤黒檀ヲ除ク)		〃	一〇〇%
(3) チーク			無税
(4) 瘤黒檀			無税
(5) 其他(丸太及割材ヲ含ム)		每立方米	二、四〇〇

(四) 在庫量

品目	現在在庫量(石)	輸出可能量(石)	所在	最高輸出港	所有関係
チーク製品	二二、〇〇〇	仝上	西貢	西貢	佛人
其他ノ木材	一四、〇〇〇	仝上	西貢	西貢	〃

第二節 特殊、林産物

(一) 需給状況

(イ) 最近ノ年生産量消費量竝対本邦及主要貿易先別輸出入量

(ロ) 最近ノ年生産量、消費量

品目	年生産量(噸)	年度	消費量
藤類	六五、二一〇(佛領印度支那研究ニ依ル)	一九三九	国内消費殆ンドナシ(最近五〇〇噸程度)
漆	二、五〇〇(大南洋圏(南洋協会))	一九三七	カンボヂヤ漆ハ大部分国内消費ニシテ安南漆ハ生産ノ一割五分ガ国内消費ナリ
竹	一、三七〇、〇〇〇(本)(佛領印度支那農林畜水産業事情ニ依ル)	一九三七	

(ハ) 対本邦及主要貿易先別輸出量

品目	輸出總量（噸）	年度	仕向先	數量
護謨	六五、二二○	一九三九	米國	二九、三八三
			佛本國	二五、一八三
			新嘉坡	九、二六四
			白耳義	一、○一四
			英本國	八六七
			日本	二八六
松脂	六六○	一九三七	日本	六六○
安南漆	一、七三○	一九三八	佛國	八○
			支那	三九
			香港	二八八
			日本	一、三一二
			其他	五
竹	五五○	一九三七	佛國	一一七噸
			支那	二四二
			雲南	一三
			日本（パルプ）	一七七
			佛國	○、二

(2) 昭和十七年度ニ於ケル生産見込量、輸出見込量及算定ノ基礎

品目	生産見込量（噸）	輸出見込量（噸）	算定ノ基礎
護謨	六五、○○○	六五、○○○	最近ノ実績ニ據ル
漆	二、五○○	一、七○○	
松脂	七○○	七○○	

附表

(イ) 年次別護謨生産額

	栽培總面積（ヘクタール）	生産額（瓲）	輸出額（瓲）
一九三一年	一二五、六四四	一一、○○○	一一、九○一
一九三二年	一一○、○○○	一七、六○七	一四、六○七
一九三三年	一二五、六四四	一八、六八七	一八、六八七
一九三四年	一二五、九三八	二○、四五三	二○、四五三
一九三五年	一二五、九八七	三一、四九○	二九、二七八
一九三六年	一二六、○○○	四一、○○○	四一、三一四
一九三七年	一二七、二○○	五○、○○○	四五、一三七

	一九三八年	一九三九年	一九四〇年
数量（百噸）	一、二七一、八六〇	一、〇九三、〇〇〇	五八、〇二三
価額（千弗）	五八、〇二三	六九、〇〇〇	六九、〇〇〇

(四)蘭領仕向國別輸出額

（資料、逸見重雄　佛領印度支那研究）

	数量（百噸）		価額（千弗）		数量（百噸）		価額（千弗）	
	一九三二年				一九三五年			
米國	一六〇、六五四	一六六、六四一	二〇九、三八一	二三二、七〇六	一二七、〇八四	一三二、八四九	五八、〇二三	六九、〇〇〇
佛本國	一〇四、二一三	一〇七、八九八	一七二、八一九	一七八、五九〇	一〇四、六七二	一〇八、四三七	六四、四三七	六四、四三七
新嘉坡	四七、七八四	四九、九三六	一〇、四六、七二	一一、二八二	四七、七八四	四九、九三六	一〇、四六、七二	一一、二八二
白耳義	一六、三三〇	一六、八八〇	二七、七三七	二八、六七七	一六、三三〇	一六、八八〇	二七、七三七	二八、六七七
英國	四四四一	四九七六	二五、五六八	二七、五九三	四四四一	四九七六	二五、五六八	二七、五九三
日本	五〇三四四	五〇、二七三	一一、九八六	一二、四九二	五〇三四四	五〇、二七三	一一、九八六	一二、四九二
	一九三三年				一九三六年			
米國	一六〇、六五四	一六六、六四一	二〇九、三八一	二三二、七〇六	一二七、〇八四	一三二、八四九	五八、〇二三	六九、〇〇〇
佛本國	一〇四、二一三	一〇七、八九八	一七二、八一九	一七八、五九〇	一〇四、六七二	一〇八、四三七	六四、四三七	六四、四三七
新嘉坡	四七、七八四	四九、九三六	一〇、四六、七二	一一、二八二	四七、七八四	四九、九三六	一〇、四六、七二	一一、二八二
白耳義	一六、三三〇	一六、八八〇	二七、七三七	二八、六七七	一六、三三〇	一六、八八〇	二七、七三七	二八、六七七
英國	四四四一	四九七六	二五、五六八	二七、五九三	四四四一	四九七六	二五、五六八	二七、五九三
日本	五〇三四四	五〇、二七三	一一、九八六	一二、四九二	五〇三四四	五〇、二七三	一一、九八六	一二、四九二
	一九三四年				一九三七年			
米國	一六〇、六五四	一六六、六四一	二〇九、三八一	二三二、七〇六	一二七、〇八四	一三二、八四九	五八、〇二三	六九、〇〇〇
佛本國	一〇四、二一三	一〇七、八九八	一七二、八一九	一七八、五九〇	一〇四、六七二	一〇八、四三七	六四、四三七	六四、四三七
新嘉坡	四七、七八四	四九、九三六	一〇、四六、七二	一一、二八二	四七、七八四	四九、九三六	一〇、四六、七二	一一、二八二
白耳義	一六、三三〇	一六、八八〇	二七、七三七	二八、六七七	一六、三三〇	一六、八八〇	二七、七三七	二八、六七七
英國	四四四一	四九七六	二五、五六八	二七、五九三	四四四一	四九七六	二五、五六八	二七、五九三
日本	五〇三四四	五〇、二七三	一一、九八六	一二、四九二	五〇三四四	五〇、二七三	一一、九八六	一二、四九二
	一九三五年				一九三八年			
米國	一六〇、六五四	一六六、六四一	二〇九、三八一	二三二、七〇六	一二七、〇八四	一三二、八四九	五八、〇二三	六九、〇〇〇
佛本國	一〇四、二一三	一〇七、八九八	一七二、八一九	一七八、五九〇	一〇四、六七二	一〇八、四三七	六四、四三七	六四、四三七
新嘉坡	四七、七八四	四九、九三六	一〇、四六、七二	一一、二八二	四七、七八四	四九、九三六	一〇、四六、七二	一一、二八二
白耳義	一六、三三〇	一六、八八〇	二七、七三七	二八、六七七	一六、三三〇	一六、八八〇	二七、七三七	二八、六七七
英國	四四四一	四九七六	二五、五六八	二七、五九三	四四四一	四九七六	二五、五六八	二七、五九三
日本	五〇三四四	五〇、二七三	一一、九八六	一二、四九二	五〇三四四	五〇、二七三	一一、九八六	一二、四九二

(ハ)主要林産物輸出額（單位　弗）

（資料、佛領印度支那年鑑。南洋年鑑）

種別 / 年次	一九三二	一九三三	一九三四	一九三五
籐	二九八	五三二	五三六	七八一
木蠟	二九八	五三二	五三六	七八一

	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
クナオ	三、六七三	二、七七四	二、〇〇八	二、三七七	二、〇〇八	二、七七四	二、三七七
ベンジョアン	三七	二六	五三	六七	五三	二六	六七
スティックラック	一〇四	一四四	六八七	一五一	六八七	一四四	一五一
精製ゴムラック	三	二	六	一	六	二	一
籐及竹	九八五	一、四七二	五三六	六〇九	五三六	一、四七二	六〇九
ケーク材	八、〇八六	一一、七四〇	一四、七九八	一二、七五四	一四、七九八	一一、七四〇	一二、七五四
リム材	四七四	一六〇	五三二	四三一	五三二	一六〇	四三一
トラク材	五五三	二七六	五六九	一〇七	五六九	二七六	一〇七
カムライ材	一	二八	一四	一	一四	二八	一
ダンフォン材	二一	三四	二〇四	四二九	二〇四	三四	四二九
グー材	一	一	九	一	九	一	一
其他有用材	五九八	七二二	二一五	六二六	二一五	七二二	六二六
香木	四五	五二	四九	七二	四九	五二	七二
普通材	二、六二三	一、二七五	一、二二八	九七〇	一、二七五	一、二七五	九七〇
木炭	九、四九六	八、七八六	六、〇五九	三、〇六〇	六、〇五九	八、七八六	三、〇六〇
白豆蔻	三三六	三〇二	四〇九	三七三	四〇九	三〇二	三七三

(1) 生産地域及ビ面積　（資料、佛領印度支那研究、六南洋圏。其他）

(イ) 概説

栽培面積ハ約十二万七千町歩ニシテ其ノ約七七%ハ交趾支那ノビエンホア、ツードーモ、ギヤデイン、タイニン縁ノ諸州ニ存在シ、東京ニハ譲渡栽培地ハ若ド存在セザルモ、一九三七年一月一日現在ノ譲渡面数及ビ栽培面積ヲ示セバ左ノ如シ（単位町）

支那	栽培面積	総面積ニ対スル割合
バーリア州	三六	
ビエンホア州	一四六	四、五三八	三、五七%
シヨロン州	七	二八、三七七	二二、三二%
ギヤデイン州	三〇六	二六三	〇、二一%
ハチエン州	四〇	一一、六七七	九、一八%
タイニン州	一〇一	二五二	〇、二〇%
ツードーモ州	二六五	八、三九四	六、六〇%
小計	九〇五	四四、六三三	三五、一三%
東埔寨	八一	九八、一六八	七七、二一%
安南	一七	二七、二六五	二一、四四%
		一、六七八	一、三二%

(ロ) 安南ハ東京省ヲ主要生産地トシソノ他各地ニ於テモ農家ノ副業トシテ栽培セラレ其ノ面積七、〇〇〇町歩ニ及ブ

(ハ) 資料、南洋協会編、大南洋圏）

地域	栽培戸数	栽培面積	総面積ニ対スル割合
老撾	四	三二	〇、〇三%
東京	一	〇、〇〇〇	〇、〇〇%
合計	一、〇〇五	一二七、一〇〇	一〇〇、〇〇%

(2) 経営形態及利権関係等　（資料、南洋協会編、大南洋圏）

御印ニ於ケル外国人ノ企業ハ支那人ヲ除イテハ全ク僅少ナリ、ソレハ佛本国ノ独占主義トイフコトニモヨルガ、又コレマデ回地ノ事情ガ一般ニ知ラレザリシコトニモヨル。

一九二八年十一月四日附佛国大統領ハ、コンセツシヨンハ佛国臣民、籍民又ハ同国保護民ニ限ルト規定シ、農業会社モソノ本社ヲ佛国領土又ハ保護国内ニ有シ、株主、取締役、支配人等ハソノ過半数ヲ佛国臣民、籍民又ハ保護領民ニヨツテ占ムルヲ要ス

トアル。従ツテ鉱業鉄道ノ可能性モ極メテ限ラレ且ハザルベカラズ、マタ容有地ヲ除ク私有地ノ担保モ理論上ハ可能ノヤウデアリ現ニ支那人及印度人ニシテ交趾支那方面ニ於テ数万ヘクタール以上ノ土地ヲ所有セル者モアルガ其他ノ保護領ニ於テハ熱帯農業ノ特異性タル大規模ナ農園ヲ拓クコトハ殆ンド不可能ナリ、結局、農企業会社ノ

外國人ニ依ル經營ハマヅ絶無ニ近イ。五フベキナリ、併シ若シ適當ナ土地ガ入手出來得レバ、護謨、珈琲、茶、等ノ企業經營ハ其ノ天與的沃土、好適ナル氣象、灌漑用水ノ利便ト相俟ツテ必ズ成功スルモノト豫測サル。

(3) 邦人企業ノ現狀

バアレアニ於テ、中村商店小規模ノ企業ヲ行フニ過ギズ三井物産株式會社ハゴム、護等ノ貿易ニ從事ス。

(4) 集荷機構ノ現狀

護謨、護共ニ大部分佛人經營ニ係リ夫々ノ手ニ依リ集荷セラル、程度トス。

(5) 勞力關係 (資料、佛領印度支那ト貿易事情)

佛領印度支那ニ於ケル農、工、商、鑛業等各方面ノ企業ニ從事スル勞働者ハ主トシテ安南人ナリ、コレニ次イデ支那人、ヨーロッパ人(主トシテフランス人)並ニ栽培企業ニ於ケル契約苦力(付木開墾等ノ開拓ニ從事スル者)トシテ山地ノモイ族及ビ爪哇人等アリ、

安南人ハ大体ニ於テ支那人ヨリ賃銀ガ安ク又從順ナルガ規律的勞働ヲ厭ヒ、又鄕土愛着心ガ強ク、生地ヲ離ル、事ヲ嫌悪シ殊ニ山地方面ヘ勞働者トシテ行ク事好マズ。支那人勞働者ハ之ニ比ブレバ元氣ガ怜悧デアリ身体モ強健ニシテ氣候ニ對スル適應性モ大ナルタメ領内至ル所ニ活動ノ天地ヲ開キ居レリ。

賃銀形態ハスベテノ勞働者ニツキ大体同樣ニシテ一般ニ貨幣賃銀ノ外ニ實物賃銀トシテ飯米ガ支給サル。ソノ量ハ一日七〇〇!七五〇瓦位ヲ標準トスル。

地方貿易拡張銀ノ一例トシテ交趾支那及東糖業ノ發展ニ於ケル東京及安南出身ノ契約勞働者ノ賃銀ニツキ見ルニ一九三二年ニ於テ最低日給男〇.三〇一〇.四〇出帯、女〇.二三一〇.三〇ノ比率ナリシガ一九三五年ニ於テハ男〇.三七出精又〇.二〇出帯ニ低下セリ

(6) 輸出機構ノ現狀及主要輸出商社 (資料、佛領印度支那ト貿易事情)

昭和十六年二月十二日總督令ニ依リ輸入組合ノ結成ヲ見ルニ至レリ。輸出組合(輸出ク)ハ存在セズ。

將シ日滿經濟交渉ハ佛印經濟ノ高度統制機構ノ設立ソノ輸出商社ノ指定、護謨輸出機関ニ關スル法令ニ基ヅクトコロノ買付及ビ輸出ノ全般的統制執行ハルヽニ至レリ。

即チ護謨ニ關シテハ護謨輸出機関ニ關スル法令ガ昭和十七年二月十二日公布セラレ總督任命ニカヽル民間代表テル・ルージュ、ファナンシエール、英人某ノアルガン等四大護謨園ヲ含ム數社ガ公定輸出業者タルト共ニコノ機関ノ理事會ヲ構成シ、政府代表トシテ護謨局ヲ含ム數社ガ公定輸出ヲ全ク統制スルニ至レリ。

Plantation des Terres Rouges (資本金一億九千萬磅、生産高二万(一千五百噸)

Indochinois de Plantations d'Hévéas（資本金 八千萬法、生産高七千 噸）
Indochinois de Plantation de Mimot（〃 八千百四十萬法〃 四千 噸）
Caoutchoucs de Indochine（〃 二千八百萬法、〃 三千八百噸）
Hévéas de Tayninh（〃 六百七十五萬法〃 二千 噸）
Plantation de Kratie（〃 三千萬法、〃 一千八百噸）

ノ六社、即チ一千二百噸以上ノ生産カヲ持ツ栽培業者ハコノ輸出販賣機關ニ直接依出シ得ルガ其他ノ群小栽培業者ハ公定仲買人ノ手ヲ経テノミ賣リ込ミ得ルコト、ナリ、其仲買人トシテ、デイデルム、アルカン、ユニオン、フイナンシエール等ガ指定セラレタリ。而シテコレマデ佛印護謨ノ大手筋トシテ活躍セル三井物産ハ除外セラル。

(三) 價格

(1) FOB價格

(イ) ゴム 一噸当り 一、〇〇〇・〇〇円（極ク最近ニ至リ二、〇〇〇円ニ迄達セリト謂フ）
(ロ) タンニンパーク 一擔当り 六・五〇円（一噸当り一〇九・二〇円）
(ハ) 竹 一〇〇本当り 五〇・〇〇比弗（四八・八〇円）
(ニ) 籐 一擔当り 七・〇〇比弗（一噸当り 一一五・三七円）

(2) 運賃（資料、佛領印度支那ト貿易事情）

カポック（圧搾セルモノ）	一、〇〇〇キロニ付	一三比弗	（一二・六九円）
〃（圧搾セザルモノ）	〃	一四〃	（一三・六六円）
護謨	四〇才ニ付	一二〃	（一一・七一円）
樹脂	一、〇〇〇キロニ付	一四・五〃	（一四・一五円）
シエラック	一、〇〇〇キロニ付又ハ 四〇才ニ付	一八〃	（一七・五七円）

（西貢、海防ヨリ日本寄港地行貨物運賃）

(3) 内地公定價格

(イ) 護謨 一ポンド 〇・八五円（一噸当一、九〇〇円）但シゴム輸入組合標準價格
(ロ) タンニン
カッチ 含有率六〇％ノモノ一噸当リ 六〇〇・〇〇円

(4) 関税関係

(イ) 佛印ニ於ケル輸出税率（資料、南洋年鑑）

税番	品目	課税単位	税率（比弗）
三四	桂皮	正味百瓩	六・〇〇

	品名		最高込値付
五七	ゴムラック		一、〇〇〇
五八	漆		五、〇〇〇
四七	籐		一、〇〇〇

(ロ)本邦ニ於ケル輸入税率

品名	税番	単位	税率
ゴム	一四三		無
漆	二五六	毎百斤	（六、四八〇）（昭和七年法第四號改訂税率九、一八〇）
浸食子、五倍子其他ノタンニン材料	一四〇―五		無
ダマール	一四四		〃
ロパール	一四四		〃
丁香	一二五		〃
バニラ	一七八		〃
桂皮	一三七		〃
竹	六一〇	従價	二〇%
籐	六〇九		
一、割ラザルモノ			無
二、其ノ他		毎一〇〇斤	一、七〇〇（〃 六、二九）
キナ（皮）	一三七ノ二		無
安息香	一四〇ノ三		〃
白檀	一三九		
一、サンタルム アルデム			〃
二、其ノ他		毎百斤	二一、四八五（〃 五、一九）
コカ（葉）	一三六		無
大風子	一二八		〃

四、在庫量

蘋鐵

(イ) 現在在庫量　五、〇〇〇噸

(ロ) 輸出可能量　〃

(ハ) 所在　西貢

(ニ) 最寄輸出港　西貢

(ホ) 所有関係　主トシテ満人